

BS×スタートウインクル～12星宮に導かれたもの～

風森斗真

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

宇宙には、まだまだ人間の知らない謎が多くある。

その謎があるがゆえに、人間は想像（イメージネーション）を膨らませ、世界を作り上げていく。

太陽系からはるか遠く、宇宙の片隅「星空界」にある宮殿「スターパレス」。

そこには黄道十二星座を司る十二人の星姫、「スタープリンセス」がいた。

だが、ある日、スターパレスは謎の勢力「ノットレイダー」によって侵略され、スタープリンセスたちも「プリンセススターカラーペン」へと姿を変え、宇宙に散り散りになった。

スタープリンセスに仕える宇宙妖精プルンスは、姫から最後の希望として幼い妖精「フワ」を託され、宇宙をさまよった。

その途中、科学技術が発達した惑星『サマーン』から調査員として宇宙を旅していたララに拾われ、太陽系第三惑星『地球』へとやってきた。

プルンスたちは地球の少女、星奈ひかると出会い、伝説の戦士『プリキュア』に変身し、フワを狙うノットレイダーからフワを守り、プリンセスを助けることとなる。

だが、ひかるたちはおろか、プルンスすら知らない、もう一人の戦士が地球にはいた。

※バトスピのキャラも登場しますが、基本的にバトスピの原作キャラは『ブレイブ』『サーガブレイブ』のキャラしか出す予定はありません。

また、バトスピでのバトル時に関しては、作者がソードアイズ以降のルールを把握しきれしていないこともあり、使わないカードや効果が多数存在します。ご了承ください。

# 目次

設定

設定とあらずじ 1

序章

序章：激突王の名を継ぐもの 10

序章2：ファンタジーはいつも突然

やってくる 19

序章3：スターパレスのもう一つの伝

説 31

1、集めよう！プリンセススターカラー

ペン!!

ひかるとララ、初めてのバトスピ！（前

編） 41

ひかるとララ、初めてのバトスピ！（後

編） 53

やってきたのは、異星人のカードバト

ラー！ 73

降臨！光龍騎神サジツト・アポロドラ

ゴン!! 81

宇宙アイドル登場！プリンセスのペ

ンはオークション会場に！ 110

宇宙怪盗ブルーキャット、参上！宇宙

宙アイドルは仮の姿、しかしてその実態

は!! 120

大混戦！プリンセススターカラーペン

を取り返せ!! 133

	導とひかる、初めてのバトル!!	
142	再びのゼニー星	171
178	スターカラーペンを賭けたバトル?!	
	スターカラーペンを賭けたバトル!	
184	サジット・アポロドラゴン、出陣!!	
	ブルーキャット、再び?!	218
	カッパード出現?! スタープリンセス	
	の力は誰の手に!	225
	レインボーの星へ!	236
	レインボー星の真相	243
	ブルーキャットの秘密	250
	導の心の一端	258
	新たな刺客は少年カードバトラー?!	
263	v.s. 少年バトラー	271
	宇宙に煌めく、七色の光! キュアコ	
	スモ、誕生!!	301
	乗っ取られたアイワーン?! ダークネ	
	スト登場!!	307
	スターパレスへ! プリンセスの復活	
	と……どちらさま?	316



## 設定

## 設定とあらすじ

馬神導ばしんしるぶ

14歳、男性

観星中二年生、ひかると同級生のカードバトラー

”二代目激突王”と呼ばれるハイランカーであり、”激突王””ブレイヴ使いの弾””こ  
と馬神弾と””ヴィオレ魔ゐ””ノヴァ使いのまゐ””こと旧姓紫乃宮まるの息子

赤と紫の混色デツキの使い手であり、ネクサス「闇の聖剣」とキースピリットの一体  
である「滅神星龍ダークヴルム・ノヴァ」によるブレイヴキラーと、マジック「メテオ  
ストーム」ともう一体のキースピリット「超神星龍ジークヴルム・ノヴァ」の激突コン  
ボを得意とする

カードショップ大会があつた日にノットレイダーに襲撃されるも、不思議な白い球体  
に救われる。

その後、マジサと名乗る女性からバトルスピリッツのデツキを渡され、プリキュアを  
手助けしてほしい、と依頼される

わけもわからず、目を覚ますと、ノットレイダーと戦う四人の少女たちを目撃したことをきつかけに、プリキュアとノットレイダーの戦いに身を投じることになる

非営利団体の活動で貧困地域へボランティアに行くことが多い両親の影響か、困っている人を放っておけない性格なのだが、かつて両親がいわれのない激しいバッシングを受けていたことを知り、他人と深く関わろうとはしない

特にまどかに対してはその態度が顕著で、むしろ避けている節すらある

なぜそうなったのか、その理由をまどか自身は知らないが、まどかの父親は何かを知っている様子

ちなみに、両親は大好きだが、祖父母はあまり好きではない様子

ひかるがそのことを聞いてみると、まどかのことを避けているのと同じ理由、としか答えてもらえず、プリキュアたちはその理由を深くは知らない

両親とその仲間たちが受けたバッシングの影響か、ひかるよりも現実的であり、簡単に人と人が理解し合えないことを知っている

そのため、ある意味でもっともノットレイダーたちに近い歪みを持っていると言えなくもないが、その歪みを知るがゆえに、世界共通の競技であるバトルスピリッツで分かり合おうと努力をしている

〈戦い方〉



裏十二宮ブレイブを顕現させ、自分自身に合体させて戦うスタイルと、バトスピによる対決の二つ

前者はノットレイダー戦闘員に対して、後者はノットレイダーに協力するカードバトルか、幹部が生み出したノットレイダーに対して使用する

個人的には後者の方が性に合っている、とのこと

なお、プリキュアやスタープリンセスと出会ってからは、普段使っている『Wノヴァ』デッキだけでなく、マジサから手渡された『赤式十二宮』デッキも使うようになる

ただし、スタープリンセスたちが全員帰還したのち、スターパレスの守護者を名乗る「リリア」という女性から『光導十二星』デッキを受け取って以降、『Wノヴァ』とともにこちらが主軸となる

〈デッキレシピ〉

『Wノヴァ』

超神星龍ジークヴルム・ノヴァ 1

滅神星龍ダークヴルム・ノヴァ 1

雷皇龍ジークヴルム 2

黒皇龍ダークヴルム 2

レイニードル 3

デイノニクソー	3
ヴェロキ・ハルパー	2
サーベカウラス	2
キツネービ	3
ソードール	3
リブリーパー	2
ビッグバンエナジー	2
メテオストーム	2
リボーンフレイム	2
バキユームシンボル	2
サイレントウオール	2
シエアリングペイン	2
ブレイヴブレイク	2
闇の聖剣	2
太陽石の神殿	2
(総計 42枚)	

『赤式十二宮』

光龍騎神サジット・アポドラゴン	1
金牛龍神ドラゴニック・タウラス	1
太陽神龍ライジング・アポドラゴン	1
太陽龍ジーク・アポドラゴン	2
砲竜バル・ガンナー	2
輝竜シャイン・ブレイザー	1
トレス・ベルーガ	1
乙女星鎧ヴァルゴブレイヴ	1
牡羊星鎧アリエスブレイヴ	1
宝瓶星鎧ブレイヴアクエリアス	1
ニジノコ	3
ライト・ブレイドラ	3
ヴェロキハルパー	2
モルゲザウルス	2
ザニーガン	2
ノーザンベアード	2
リバイブドロー	2

スターリードロー 2

バーニングサン 2

デルタバリア 2

バキュームシンボル 2

サイレントロック 2

光り輝く大銀河 2

(総計 40枚)

『光導十二星』

超光騎神サジツトヴルム・ノヴァ 1

ゾディアック・レムリア 1

光龍騎神サジツトアポロ・ドラゴンX 1

天蠍機動スコルビウム 1

十二星槍ゾディアックランサー 2

銀河星剣グランシヤリオ 1

鋼鉄双士ジェミニコス 2

天星12宮 炎星竜サジタリアス・ドラゴン 2

天星12宮 地星兵リブライヴァ 2

水瓶竜アクエリジャードラゴン 3

天星12宮 雷星獣ドラグ・タウラス 2

天星12宮 樹星獣セフィロ・シープ 3

天星12宮 光星姫ヴァージニア 3

天星12宮 氷星獣レオザード 2

蟹甲竜キャンサードラゴン 2

アドベントスター 2

コズミックリターン 2

サジットノヴァアロー 2

キャンサーシエル 2

クローズドジェミニ 2

光導創神アポロン 2

(総計 40枚)

黄道十二宮。

世界のどの場所でも、必ず夜空に瞬く十二の星座。

その星座を司る存在が、太陽系を離れ、はるか遠くの銀河系に存在する。

それが、十二星座を司る十二人の姫スタープリンセスのおわす領域、スターパレス。しかし、その聖域とも呼ぶべき場所は、全宇宙の支配を目論む勢力「ノットレイダー」によって、かつての輝きを奪われてしまった。

その輝きと、宇宙の均衡を取り戻すため、プリンセスに仕える妖精プルンスは、最後の希望として託された幼い妖精フワとともに、スターパレスを脱出した。

途中、サマーン星の少女ララに保護され、地球へと不時着する。

そこで、のちにララとともに、星々の輝きを取り戻す伝説の戦士プリキュアとなる地球の少女星奈ひかると出会い、スタープリンセス復活のカギとなるペン「プリンセスターカラーペン」を集めることになった。

紆余曲折あったものの、無事に十二本のプリンセススターカラーペンを回収できた彼女たちだったが、十二星座の力を宿したアイテムは、プリンセスターカラーペンだけではなかった。

そして、そのアイテムを操る少年が、地球にいることも彼女たちはまだ知らずにいた。

---

カードゲーム。

古くは17世紀のヨーロッパに起源を持つとされる遊戯の一つ。

だが、時として、その遊戯は熱狂を生み、多くの人々に愛されている。

もし、その多くの人々の熱狂とカードゲームを生み出した人々のイメージーションが何らかの超自然的な力を得たなら。

その力が、星々の輝きを取り戻す伝説の戦士たちと同等の力を持つものであったなら。

これは、「バトルスピリッツ」と呼ばれるカードゲームと、そのゲームを愛する少年たちとプリキュアたちの物語。

十二宮Xレア、裏十二宮ブレイブと呼ばれる、二つの十二星座の力を宿すカードを使い戦う、プリキュアたちとは違う戦士たちがプリキュアとともに、星々の輝きを取り戻す物語である。

## 序章

## 序章：激突王の名を継ぐもの

日本のどこかにある、星がとても綺麗に見える町、みほしちやう観星町。

その町の一角にあるゲームショップでは、あるカードゲームの大会が開かれていた。そのカードゲームの名は、バトルスピリッツ。

コア、と呼ばれるビーズのようなものと四十枚以上のカードを使う対戦ゲームだ。

現在、このショップで開かれている大会の決勝戦では、赤紫の髪の毛をしたまだ幼さの残る青年とプラチナブロードの長髪をした不敵な笑みを浮かべている青年がバトルをしていた。

”二代目激突王”と”月光”のバトルだぜ

「どつちが優勢？」

「いまのところは”月光”ね……けど、”激突王”の布陣は整ってるわ」

「あとはキースピリットを呼べるかだけだな」

「その前にこのターンを乗り切れるかじゃないか？」激突王”のライフ、あと一つだぜ？」

ライフとは、バトルスピリッツにおいて勝敗を分けるための重要な要素である。



プレイヤーはゲームスタート時にそれぞれ五つのライフを持ち、これがゼロにされたほうが敗北となる。

そして、”二代目激突王”と呼ばれた赤紫の髪の青年のライフは残り一つ。対して、”月光”と呼ばれた青年のライフは三つ残っていた。

その残りのライフ一つを砕くために、”月光”が動いた。

「アタックステップ！」「月光げつこうりゆう龍ストライク・ジークヴルム」でアタック!!」

「フラッシュタイミング！マジック「バキュームシンボル」を使用！相手の全スピリットの宣言したシンボル一つを取り除く！白のシンボルを宣言!!そのアタックはライフで受ける!!」

バトルスピリッツのカードにはいくつかの分類が存在する。

そのなかの一つが、スピリットと呼ばれる分類だ。

スピリットはフィールド、すなわち場に出すことができる分類のカードで、アタックにより相手のライフを減らすことができる。

そのスピリットを支援し、特殊な効果をもたらすカードがマジックと呼ばれる分類だ。

マジックにはメインとフラッシュ、二つのタイミングで使える効果が存在する。

フラッシュタイミングは、相手ターンでも自分のターンでも使用でき、スピリットに

効果を与えたり、破壊をしたり、あるいは防御をしたりと様々な効果が存在する。

今回、”二代目激突王”が使用したマジック「バキウムシンボル」は、シンボルと呼ばれるスピリットカードに描かれている一つ、または二つの宝石のマークに影響を与える効果を持っている。

そのシンボルの数だけ、相手のライフを削ることができたり、召喚やマジックの使用に必要なコアの数を軽減することができる。

今回、”月光”と呼ばれた青年がアタック宣言をしたスピリット「月光龍ストライク・ジークヴルム」のシンボルは一つ。

よって、「バキウムシンボル」の効果によりすべてのシンボルが失われたこととなり、ライフがこれ以上削られることはないのだ。

「さらにフラッシュタイミング！マジック「サイレントウォール」を使用！このバトル終了後、アタックステップを終了させる！不足コストはレベル2のレイニードルとソードールをレベル1に下げて確保！」

「……ターンエンドだ」

フィールドにはまだスピリットが何体か残っているにもかかわらず、”月光”はターン終了を宣言した。

これは先ほど”二代目激突王”が使用したマジック「サイレントウォール」の効果に

よるものだ。

バトルスピリッツのターンの流れにはそれぞれ、ステップと呼ばれる順序がある。

まず、ターンの始まりを宣言する「スタートステップ」。

次に、コアを一つ追加する「コアステップ」、デッキからカードを一枚手札に加える「ドローステップ」、前のターンに使用したコアをもとの位置に戻し、アタックやブロックなどで疲労状態となったスピリットを元に戻す「リフレッシュステップ」と続き、第四のステップ「メインステップ」に移る。

このメインステップで、スピリットの召喚やマジックの使用、あるいは「ネクサス」と呼ばれる分類のカードを場に置くことができる。

そして、メインステップ終了後、「アタックステップ」へと移行する。

アタックステップでは、文字通り、スピリットによるアタックが可能となる。

このアタックで相手のライフを削るか、スピリット同士を戦わせ、破壊することができるのだ。

そして、ここで鍵を握るのがスピリットのアタック時に使用できる効果と、フラッシュタイムニングでのマジックの使用だ。

今回、「二代目激突王」はこのフラッシュタイムニングで二つのマジックを使用したのが、そのうち、最後に使用したサイレントウォールは、強制的にアタックステップを終

了させる効果を持っている。

アタックステップが終了すると、プレイヤーはそれ以上の行動はできない。

そのため、「月光」はターンを終了するしかなかったのだ。

「守り切った!」

「くるぞ、」二代目激突王の激突コンボ!!」

周囲の音がざわめきだす中、「二代目激突王」はターンを進めた。

「スタートステップ、コアステップ、ドローステップ、リフレッシュステップ……メインステップ!マジック「ビッグバンエナジー」を使用!このターン、〈系統・皇竜〉を持つ自分スピリットの召喚コストを、自分のライフと同じにする!」

コストとは、スピリットの召喚やマジックの使用に必要なコアの数を示す。

これは、場に出ているシンボルの数によって決められた数まで減らすことができる。

現在、「二代目激突王」のフィールドにあるシンボルは赤と紫が二つずつとなっている。さらにマジック「ビッグバンエナジー」の効果により、〈系統・皇竜〉を持つスピリットの召喚に必要なコストは、現在の「二代目激突王」のライフと同じ数になるため、うまくすればコスト無しで召喚が可能となる。

そして、このカードを発動したということは、「二代目激突王」の象徴である二体の龍が姿を現すということでもあった。

「星食らう龍をここに！」「滅神星龍ダークヴルム・ノヴァ」をノーコスト召喚、レベル3！さらに！雷よ、炎纏いて龍となれ！「雷皇龍ジークヴルム」レベル2で召喚！こいつもノーコストだ!!」

”二代目激突王”のフィールドに、紫に縁どられたカードと赤に縁どられたカードの二枚がフィールドに出てきた。

どちらも似たような姿の龍がイラストに描かれているが、赤いカードのほうは少しばかり線が細く感じられた。

だが、この赤い龍がもう一体の切り札キースピリットを呼び出す布石であることは、周囲の人間は知っていた。

「アタックステップ！ジークヴルムでアタック！〈激突〉発動!!」

「受けて立つ！ストライク・ジークヴルムの効果！相手スピリットのアタック時、このスピリットは回復する!!ストライク・ジークヴルム、ブロック!!」

「フラッシュタイムング！マジック「メテオストーム」！このターン、「ヴルム」と名のついたスピリット一体がバトルポイントBを比べて相手スピリットを破壊したとき、このスピリットのシンボルの数だけ、相手のライフをリザーブへ送る！さらに、「超神星龍ジークヴルム・ノヴァ」焔臨!!」

ソウルコアとは、通常使用されるコアとは違い、一回り大きい赤いコアのことだ。

このコアをコストで使用することで更なる効果を得ることが出来たり、「封印」という特殊な工程を行うことができるものだ。

そして、煌臨もまた、ソウルコアを使う行動で、手札にいるスピリットを条件が合致しているスピリットに重ねる形でフィールドに出すことができるのだ。

「超新星龍ジークヴルム・ノヴァ、煌臨時効果、トラッシュにあるコア全てをこのカードに乗せる。さらに、「ヴルム」と名のついたスピリットに煌臨したことで、俺のライフを5まで回復する！アタックは継続中だ!!」

ここでさらに、超新星龍ジークヴルム・ノヴァの効果が発動する。

バトルポイント、BPというスピリットが持つ力を示す数値が合計200000になるまで破壊するか、ゲーム中一度だけ、互いの手札をすべて破棄するかを選択できるのだ。

今回、「二代目激突王」が選択した効果は。

「超新星龍ジークヴルム・ノヴァ、アタック時の効果発動！ゲーム中一度だけ、互いの手札をすべて破棄する!!」

「くっ!!」

これにより、「月光」は手札に持っていたマジックをトラッシュに送らねばならなくなり、ストライク・ジークヴルムをマジックで補佐することができなくなった。

ジークヴルム・ノヴァのBPは現在15000、対してストライク・ジークヴルムの

B Pは10000であるため、破壊されてしまう。

通常ならばそこまでなのだが、超神星龍ジークヴルム・ノヴァを煌臨する前に、ジークヴルムに対して使用していたマジック「メテオストーム」の効果は、ジークヴルム・ノヴァに引き継がれるため、”月光”のライフが削られることとなる。

超神星龍ジークヴルム・ノヴァが持つシンボルは二つ。

よって、”月光”のライフは残り1つとなる。

だが、それだけで”二代目激突王”の攻撃は終わらない。

「ネクサス「太陽石の神殿」の効果発動！最初の〈激突〉で破壊した相手スピリットのB Pまで、相手スピリットを破壊する!!」

この時、通常の状態では”月光”のフィールドに残っていたカードは三枚あった。

だが、その三枚の合計B Pは10000に届かないため、”月光”のフィールドはがら空きとなってしまった。

そして、いよいよ最後のアタックとなる。

「滅神星龍ダークヴルム・ノヴァ！最後のライフを砕け!!」

「ライフで受ける!!」

”月光”の残りライフは1、そして滅神星龍ダークヴルム・ノヴァのシンボルは二つ。よって、”月光”のライフはなくなり、この勝負は”二代目激突王”の勝利となり、

シヨツプ大会の優勝は、二代目激突王のものとなった。



## 序章2：ファンタジーはいつも突然やってくる

「ありがとうございます、いいバトルでした」

「こちらこそ。だが、次は負けない」

バトルが終了し、互いに握手を交わした。二代目激突王と月光に、周囲は拍手を送り、健闘を称えた。

その後、簡単な授賞式を終え、大会は終了した。

大会が終わると、二代目激突王はデッキを片付け、店を出た。

店を出てしばらく町をふらふらと歩いていると、二代目激突王という二つ名ではなく、本名で自分を呼ぶ声を聴き、声がした方へと視線を向けた。

「やっぱり馬神くんだ！」

「……星奈ひかる。俺に用か？」

「用はないよ？ 見かけたから、声かけただけ」

”二代目激突王”——馬神導に声をかけてきたのは、同級生の女子中学生、星奈ひかるだった。

宇宙と星座が大好きで好奇心旺盛、物怖じする、ということが一切ない天真爛漫な少

女なのだが、導は突き放すように冷たい態度をとっていた。

「そうか」

「ね、馬神くん、商店街来るの珍しいけど、なにか用事あったの?」

「ちよつとな」

ぶつきらばうな態度で、導はひかるの質問に返した。

その態度はいつものことなので、ひかるはあまり気にしていないようだが、その態度が原因で、一部の教師はもちろんのこと、生徒会や同級生の姫ノ城桜子からは改めろとよく言われている。

だが、何度言われても改める気は全くないらしい。

最終的に、教師たちは諦めてしまっているようで、もうその態度について言及することはなくなった。

いや、言及したくてもできなくなった、というところだろうか。

一度、生活指導で引つ張られたことがあるが、その時にぐうの音も出ないほど反論したらしい。その反論が事実であり真実であったことが教師たちの間に広まり、まるで腫れ物に触るかのような扱いに変わったのだそうだ。

それ以来、教師たちは基本的に導を放置するようになった。

もつとも、問題行動を起こすことがめつたにないから放置しても大丈夫、と判断され

ているともとれるのだが。

「ふくん？あ、そうだ！ねえ、これからお茶会するんだけど、よかつたら来ない？」

「なんで俺が……」

「いいじゃんいいじゃん！まどかさんやえれなさんも来るし」

「せっかくだが、ごめんこうむる。これから行くところもあるしな」

まどかといえな、というのは二人が通う観星中学校の三年生で、えれなはその明るい笑顔とカリスマから「観星中の太陽」、まどかは生徒会長として生徒が学校で過ごしやすいように見守ってくれていることから「観星中の月」と呼ばれている学校の人気者のことだ。

絶大な人気を持つ二人だが、導はこの二人、特にまどかに対して辛辣な態度をとることが多く、一部の生徒、特に生徒会からは嫌われている傾向にある。

そんな導を気遣っているのか、それとも本当に気にしていないのか、ひかるはそんな中でも導に声をかける珍しい生徒であった。

「そっか……それじゃまたこんどね！」

元氣よく笑いながら投げかけられたその言葉に、ひらひらと手を振って返ししながら、導はその場を立ち去っていった。

商店街を出てしばらく歩いていき、自宅に到着した導は、ポケットから鍵を取り出し、玄関に差しした。

かちやり、と無機質な音を立てて鍵が開くと、導はそつとため息をつき、ドアを開けて中に入った。

玄関に入つてすぐ右手にある下駄箱の上には、ハンカチや鍵を入れておく棚のほかに、紫の長い髪をした美女と赤い髪をした端正な男に挟まれて笑顔を浮かべる幼い少年の写真が飾られていた。

言わずもがな、幼いころの導だ。

他にも、小学校の入学式や卒業式の時の写真、中学校の入学式の時の写真もあれば、バトルスピリッツの大会で初めて優勝したときの写真もある。

導はその中の一つ、昨年の暮れに撮った写真を手に取った。

「ただいま、父さん、母さん。今日も優勝したよ……ぎりぎりだったけど」

写真にそう報告し終わると、導はリビングを抜けて洗面所へむかった。

手洗いとうがいはきちんとしなさい、という両親からのしつけに従い、手洗いとうがいをすませ、キッチンへと向かい、冷蔵庫の中身を見た。

普通ならば、ある程度、食材が入っているもののだが、導の目に入ったのは、比較的保存がきくチーズやバターなどの調味料だけだった。

両親はNGOの活動で不在にしていることが多いため、夕方になれば買い物袋を提げて帰ってくる、という可能性は低い。

となれば、導がとる行動は一つだった。

今日はよくよく、商店街と縁がある日だな、と思いながら、導は両親がより分けていた食費から三千円ほどを引き出し、再び商店街へとむかっていった。

途中、大会で戦ったカードバトラーや大会を見学していた子供たちとすれ違いながら、スーパーで買い物が終わらせ、献立を考えながら帰路についていると、突然、上空から巨大な白い光の球体がまっすぐ導のほうへ飛んできた。

「な、なんなんだよーっ?!?!」

普段冷静な導にしてはかなり動揺した様子で、向かってくる白い球体から逃げるように走り出した。

だが、球体の飛行速度は予想以上に早く、導の逃亡もむなしく、球体に包み込まれてしまった。

---

球体に包まれた瞬間、目を閉じた導だったが、特になにも異常はなかった。

恐る恐る目を開けてみると、そこには、薄い桃色のウェーブがかかった長髪の女性がいた。

「あら？弾とまるの気配を追いかけてたつもりだったのだけど……あなた、誰？」

「いや、それはこっちの……もしかして、あんた、いや、あなたは……けど、ありえない」「あら？わたしに見覚えがあるの？会ったことはないはずだけど？」

「俺が写真で一方的に知ってるだけだ。父さんと母さんから、あなたのことは聞いている。かつての旅のことや、そこであった戦いのことも」

目の前にいる女性に、導は心当たりがあった。

といつても、導は自身の両親や両親と懇意にしている二人の人物から写真と話を聞いていただけだったうえに、あまりに荒唐無稽なことだったので、作り話なのだろう、と勝手に決めつけていた。

「確かに、私は異界グラン・ロクの魔女であり、マザーコアの光主。本来なら、この星に来ること自体、ありえない存在だもの」

「異界へのゲートは閉じた。少なくとも、六百年以上は開かないはず……父さんも母さんも、コアの光主たちはそう話していた」

読者諸君の中には、二人の会話の意味が分からない者もいるだろう。

ここで、導の目の前にいる女性マギサと、導の両親、そしてコアの光主という存在について話しておく。

導の両親、馬神弾ばしんだんと馬神まるは、中学生の頃、不思議な体験をしている。

三十年以上前に、この世界とゲートでつながった一つの異世界があった。

その異世界の名は異界グラン・ロロ。バトルスピリッツの勝敗が物事を決める、六つの世界に分かれた世界だ。

六つの世界には、それぞれバトルスピリッツのカードに記されたものと同じ色のシンボルがあり、そのシンボルが各世界の活力の源となっていた。

そのシンボルをコアと呼び、コアを守護するカードバトラーをコアの光主と呼んだ。

詳しい経緯は割愛するが、その世界に招かれた導の両親と五人の少年少女たちは、グラン・ロロの支配者であり、地球を支配することを目論んでいた男、異界王の野望を阻止し、グラン・ロロの生命の源「マザーコア」をマギサに託し、二つの世界を切り離れた。

その後、グラン・ロロでの経験を活かし、地球を少しでも良い世界にするため、両親は仲間たちとともに地球で活動することになるのだが、それはまた別の話。

「そう……あの子たちが……」

「……なあ、もし、父さんたちの話が本当なら、なぜゲートが開いた？開くのはまだしばらく先だったはずだ」

「開かざるをえなくなつた、というべきかしら？といっても、人が行き来できるような規模じゃないのだけれどもね……下手をすると、この星だけでなく、グラン・ロロ全土に

も影響を与える事態になりかねない。だから、ちよつとした魔術をつかつて、あなたに、正確にはあなたの両親に伝えたかったのだけれど……」

「二人の子供だから、気配を間違えた？悪かったな、父さんと母さんじゃなくて」

「そこまで言つてないじゃない……けど、あなたの光も、二人と全く劣らないわね。もしかして、そうとう腕に自信があるんじゃない？」

「バトスピのつて意味なら、まあ、自信あるけど……もしかして、俺に父さんと母さんの代わりになれつてこと？」

誤解がないように言つておくが、導は決して、両親が嫌いというわけではない。

むしろ、祖父母よりも大好きだ。

だからこそ、二人と比べてそんな色ないといわれたことに、喜びこそ感じて怒りを感じることにはなかった。

「……で、俺は父さんたちに代わつて何をすればいいんだ？」

「あら？案外、素直に話を聞こうとするのね？」

「少なくとも、今まで俺が関わつてきた人間の誰よりもまだ……父さんと母さんを知つていて、否定しない奴に悪い奴はいない。経験的に知ってる」

マギサの問いかけに、導は恥ずかし気に顔をそらしながら、ぶつきらぼうにそう返した。



その理由と、口にした言葉の意味を知っているマジサは特に何も言わず、手にしている杖の宝玉を導のほうへ向けた。

すると宝玉から白い光の球体と十二個の小さな光の球体が導のほうへと近づいてきた。

「この星に、グラン・ロク第七の世界に危機が迫ってるの。その危機を退けるために、戦ってもらえないかしら？」

「俺も光主になれてることか……わかった。それが俺にできることなら」

意外とあっさり了承したことに驚きつつも、マジサは導にお礼を言った。

その瞬間、マジサが持つ杖から強い光が放たれ、導の視界をふさいだ。

光がおさまると、そこは普段と変わらない商店街の外れにある森だった。

先ほどの現象は夢だったのだろうか、と思いましたが、現実であることは、手の中にあるバトルスピリッツのカードデッキが証明していた。

何の気もなしにデッキの中身を見てみると、そこにはブレイヴという見たことのない種別のカードや〈光導〉や〈星魂〉と書かれた見たことのない系統を持つスピリットがあった。

——このカードたちはいつたい……

そんな疑問が浮かんできた瞬間、背後に爆発音が響き、さらに六十年近く前から流行している特撮番組に登場する敵陣営の構成員のように統一されたタイツを着た人影が飛び出してきた。

その人影を追いかけるように、四人の派手なコスチュームを着た少女たちが飛び出てきた。

「プリキュア！ 牡牛座スターパンチ!!」

「プリキュア！ 獅子座ミルキーシヨック!!」

「プリキュア！ 天秤座ソレイユシユート!!」

「プリキュア！ 山羊座セレーネアロー!!」

少女たちが叫ぶと同時に、色とりどりの光が放たれ、構成員たちを吹き飛ばした。

いったい、どこの世界のアニメを見ているんだ、と思いながらその様子を見ていた導だったが、構成員の一人がこちらに気付き、一斉に向かってくると、立ち向かうべく身構えた。

その瞬間、デッキから一枚のカードが飛び出し、赤い光を放ったが、あまりに強い光に目がくらみ、その場にいた全員が思わず目を閉じ、構成員たちも目の部分を腕で隠し、光をさえぎっていた。

光がやむと、導に明らかな変化が起きていた。

その体はまるで十年以上前に流行した星座をモチーフにした聖戦士が身につけるような鎧に包まれ、手には赤い弓が握られていた。

スピリットを合体スピリットにするとこんな感じになるのかもしれないな、となぜか残っていた冷静な部分でそんな感想を抱きはしたが、やはり驚愕のほうが大きく。

「な、なんだ、これは?!?!」

と思わず叫んでいた。

だが、混乱する頭を落ち着かせる暇もなく、構成員たちが飛び掛かってきた。

「ちよっ?!」

中学に上がって以降、取っ組み合いなんてやったことがない導は身構えはしたが、どう対応すべきかわからずすくんでしまい、目を閉じてしまった。

が、まるで自分ではない誰かに体を動かされているかのように、無意識に体が動き、向かってきた構成員たちを相手に無双し始めた。

「ど、どーなってるの?!」

「わからないルン!!」

「けど、今がチャンスだよ!」

「はい!!」

突然、場をかき乱されたことに驚いた少女たちだったが、構成員たちが導に殴り飛ば

されたことで現実に引き戻され、再び攻撃へ転じた。

それからは早かった。

数分とすることなく、構成員たちは全滅し、やたら大きく悔しそうな声が空から響くと、倒れていた構成員たちはすべて姿を消した。

## 序章3：スターパレスのもう一つの伝説

いかにも宇宙人めいたスーツを着た、悪の組織の構成員らしき連中を退散させると、導がまとつていた鎧は光を放ち、カードへと戻った。

導はカードを見て、怪訝な顔をした。

そこにあつたカードは、『射手星鎧ブレイヴサジタリアス』。ブレイヴに分類されるバトスピのカードではあるが、まったく見覚えがないカードだ。

なぜ、こんなカードが自分の手元に。

そんなことを考えていると、本日二度目となる声が聞こえてきた。

「やつぱり導くんだ!!」

「……星奈?なんでお前がここにいるんだよ」

そこにいたのは、つい数時間前にすれ違い、声をかけてきた同級生だった。

「なんで、はこつちのセリフだよ?!導くんこそなんでここに……」

ひかるはそう言いかけて、急に黙ってしまった。その顔には、驚きと怯えが同時に浮かんでいた。

その理由は、目の前にいる導の表情にあつた。彼の顔はいま、ものすごく険しくなっ

ていた。

その視線の先には、観星中の生徒会長である香久矢まどかの姿があった。

彼女のその顔を見た瞬間、導は明らかに不機嫌になってしまったようだ。

が、もともと、あまり物怖じしない性格をしているひかるが、勇気を出して導に再び問いかけるよりも早く、白いふわふわとした生き物が飛び出してきた。

「つて、ちょ?!フ、フワ?!いま出てきちゃ……」

「プリンセスが呼んでるフワ!」

「つて、こんな時に?!……ば、馬神くん、後で色々話すから、いまは……」

「……いや、どうやら俺の方も呼ばれてるらしい」

慌てながら説明しようとするひかるに、導はバトスピのカードを取り出した。

カードは、なぜか六色の光に包まれながらそこにあった。

導がカードを出した瞬間、カードから強い光があふれ、周囲を包み込んだ。

光がおさまり、目を開けると、そこは先ほどまでいた商店街外れにある森ではなかった。

上空では星々が輝き、どこかの神殿のような荘厳で、しかし穏やかな雰囲気の流れるその場所は、まさに幻想的という言葉がふさわしかった。

だが、なぜ自分がここにいるのか、導には理解できなかった。

——えくと、状況を整理すると……星奈たちが変身して、俺もどっから出てきたのかわからない鎧を装着してどっかの特撮戦闘員みたいな連中と戦った。で、敵の幹部が出した大物を倒れると、星奈たちと一緒にいた白いふわふわした生き物が出した光に飲み込まれた……何を言っているのかわからないな、俺もわからん

カイロまで奇妙な冒険をすることとなった高校生が出てくる少年漫画のようなセリフを心中で呟くと、改めて周囲を見回した。

上空には満天の星空、周囲にはパルテノン神殿のような造りの石柱と、そこに鎮座している美しい女性が数名。

よく見れば、空席もある。

下を見てもみると、ステンドグラスのような光沢と透明感を持つ床に、十二星座の紋章が描かれている巨大なタイルがある。

——十二星座？……もしかして、このブレイヴカードとなにか関係が？

導は手元にある一枚のバトルスピリッツのカードを見つめながら、そんな疑問を抱いた。

手元にあるのは「射手星鎧ブレイヴサジタリアス」と名のついた、赤のブレイヴ。

ここに来る前での戦闘で、この鎧を纏っていたことは覚えている。

だが、自分のデツキにはこんなカードは入っていないし、ストレージにも入れていない。

そもそも、「星鎧」と名のついたブレイヴの存在自体を知らない。

今自分たちがいるこの空間と何かしらの関係があることは、なんとなく察しがついた。

「え、えつと……なんでわたしたち、呼ばれたのかな？」

「わからないルン。プルンス、何か心当たりはないルン？」

「聞いてないでプルンスよ？」

「それはこれからお話します」

ひかるたちがなぜこの空間に呼ばれたのか疑問に思っていると、突然、女性たちが声をかけてきた。

視線を女性たちのほうへ向けると、牛の角のようなヘッドドレスを身に着けた女性が話を始めた。

「あなた方を呼んだのは、その少年がまとった鎧のことを説明するためです」

「鎧……まさか、これのことか？」

「ええ。その通りです」

導は、母さんの声に似てるな、と思いつつ、女性に問いかけると、女性は頷いて返し



た。

だが、鎧のことも、バトスピのカードのこともそうだが、導にとって重要なことが他にあった。

「ここはいつたいたいどこなんだ？なんで星奈たちがここにいる？あんたらはいつたいたい何者だ？さつき襲ってきたショッカーモドキと何か関係があるのか？まずはそこから説明してくれ」

いつたいたい、何が起きているのかまったく把握できていない導は、目の前にいる女性にそう問いかけた。

その言葉遣いにクラゲのような何かが、無礼者、と叫んでいた。

が、女性はやんわりとそのクラゲを制止した。

「まず、わたしたちのことを話さなければなりませんね」

そう言って、女性は穏やかな表情で自分たちのことを話し始めた。

「わたしは、いえ、わたしたちはスタープリンセス。ここスターパレスを守護する十二人のプリンセスです。わたしはその一人、牡牛座のプリンセスです」

自らプリンセスと名乗ったその女性は、導に自分たちのこと、この空間のこと、そしてひかるたちのことを説明し始めた。

いま現在、導たちがいるこの空間の名は『スターパレス』。彼女たち、十二人のスター

プリンセスたちはこのスターパレスで宇宙の均衡を見守っていたのだが、突如、ノットレイダーと名乗る勢力により制圧されてしまった。

そこで、宇宙の均衡を守るためのカギとなる存在『スペガサツス・プララン・モフーピット・プリンセウインク』、通称フワをプルンスに託したのだという。

「で、逃げてる途中にララに拾われて、地球に飛来。わたしと出会って、プリキュアになったの！」

「……話の途中で割り込んでくるな」

「というか、いろいろと端折ってるルン……プリキュアっていうのは、宇宙の伝説に伝わっている希望の戦士ルン。プルンスとフワを保護してから、スターパレスの危機を知って、スターパレスとプリンセスを取り戻すため、プリキュアとトウインクルブックを探していたルン」

「プリキュア……なるほど、さっきのひらひらした格好はそれだったわけか」

ララの説明に納得した導だったが、疑問が浮かんできた。

ならば、なぜマジサは自分に、いや、両親に協力を求めたのだろうか。

プリキュアという戦う存在がいるのならば、自分たちは必要ないはずだ。

そんなもつともな疑問に答えを返したのはスタープリンセスの一人、山羊座のプリンセスだった。

「スターパレスにはわたしたち、スタープリンセスのほかに、ここを守護する精霊たちがいました。彼らはずっとも均衡が乱れやすい世界、地球へと向かい、そのまま姿を変えてとどまったのです」

「……その姿つてのは、まさかこれか？」

「ええ、その通りです」

導は持っていたカードの裏表紙を見せながら問いかけると、山羊座のプリンセスは即座に肯定した。

驚くべきことに、精霊たちはバトルスピリッツに姿を変えて、地球にとどまっていたらしい。

余談だが、この精霊たちを地球の人々は『十二宮Xレア』と『裏十二宮ブレイヴ』と名付け、特に『十二宮Xレア』は神々が作ったと言われる祭壇に捧げること、膨大なエネルギーを砲弾として発射する装置を起動するための鍵としていた。

「地球は、グラン・ロロ第七の世界。おそらく、それに合わせて、彼らも姿を変えたのでしょう」

「……あ、あの〜一つ聞いてもっ？」

「なんだ？」

「グラン・ロロつて、何？」

ひかるはもとより、導とスタープリンセス、そしてプルンス以外の全員が同じことを思っていたらしい。

こちらのことは話したから、早くそちらのことも教えてほしい、といわんばかりの顔をしていた。

「……言っておくが、俺は地球の人間だ。グラン・ロロのことは父さんと母さんから聞いた以上のことは知らないぞ」

「それで構わないから！」

「教えてほしいロン!!」

ひかるとララの強い要望で、導はグラン・ロロについて話し始めた。

「グラン・ロロってのは、平たく言えば異世界だ。そこは、六色のコアによって守られた六つの世界が一つのゲートでつながっている世界で、世界ごとに種族、文明レベルが違っていろいろらしい。けれど、共通していることが一つだけあった。それが、こいつだ」

両親、そして両親の仲間たちが語っていた冒険譚を思い出しながら、グラン・ロロについての概要を語り、再びバトルスピリッツのカードを見せた。

「え？バトルスピリッツ?」

「ああ。グラン・ロロではどの世界でもバトルスピリッツの勝敗が最も尊ばれる。一期はかなりの数の実力者、ハイランカーが集まった時期もあったほどだ」

「ふうん……」

「で、そのグラン・ロロと地球がどんな関係があるルン？」

「地球はグラン・ロロ第七の世界で、時々、ゲートがつながるんだ。当然、地球に何かあれば、グラン・ロロの他の世界にも影響が出る可能性がある」

もつとも、可能性があるというよりも、影響があるからこそ、マジサはコアの光主を探していたのだろうが、それは予測の範囲を出ないので、ここで話すべきではないと導は感じていた。

これ以上のことは、両親からも聞いていないし、教えても意味がないと思ったのか、導は自分が言えることはもうない、と言つて、話を終わらせた。

「うくん……よくわかんないけど、つまり、馬神くんも一緒に戦つてくれるつてことだよね?！」

「協力はする。だが、もしもの時は俺一人で戦わせてもらう」

ひかるの問いかけに、導は興味なさそうにそう返した。

その返し方に、導との接点がほとんどないえれなとまどかは目を丸くした。

接点がないどころか、今日が初対面のプルンスは憤慨していたが、導はそれをまるつきり無視して、スタープリンセスの方へ向き直つた。

「ノットレイダーの連中も、地球がグラン・ロロの第七世界つてことは知ってるのか？」

「わかりません。ですが、知っているものがないても不思議ではないでしょう」

「なら、なおのことだな。仮にグラン・ロロの人間がいたとしたらバトスピで決着をつけたほうが手っ取り早い」

このメンバーの中で、仮にバトスピを挑まれたとして勝利することができる可能性が一番高いのは、導しかない。

だからこそ、もしもの時、と前置きをしていた。

「まあ、でも協力してくれることに変わりはないんだよね？」

「協力はする、といったからな」

ぶっきらぼうな態度で導が返すと、ひかるは仲間が増えたことを喜んでいるのか、『キラヤバーツ!』と叫んでいた。

# 1、集めよう！プリンセススターカラーペン！！ ひかるとララ、初めてのバトスピ！（前編）

スターパレスに住まうスタープリンセスたちからの依頼を受けることを決めた導だったが、普段と変わらない様子で日常を過ごしていた。

だが、確かにその日常に変化はあった。

「導くん！あたしにもバトスピ教えて！！」

朝の教室。

ひかるは突然、導にそう頼んできた。

あまりに唐突であったため、導は目を丸くし、沈黙してしまった。

が、そんなことはお構いなしにひかるは導の目をまっすぐに見つめてきていた。

「……放課後、展望台に集合。それでいいな？」

「うん！！」

一種の暴走状態になっていると感じら導は、これ以上は何を言っても無駄だと判断したのか、あきらめたようにため息をついてそう伝えた。

そもそも、学校にデッキを持ってきていないし、当然、カードやコアといった必要と

なるものもない。

ある程度のルールを教えたとしても、普段のひかるの成績から考えるに、習うより慣れた方が覚えも早いだろうし、覚えたら試したいと思うのは人の性だ。

ならば、教えてすぐに実戦が出来るようにしておこう、という導なりの気遣いだった。放課後になり、帰宅した導は自室からデッキとカードをしまっている箱を持ち出し、展望台まで向かった。

展望台の入り口には、待ちきれず、荷物を置いて着替えてから超特急できたのか、ひかるとララの姿があった。

「どうやら、ララもバトスピに興味があるようだ。」

「地球のゲームに興味がある、か」

「そういうことルン。ロケットの場所まで案内するルン」

「おいおい、羽衣が異星人だってことを知ってる人間は少ない方がいいんじゃないのか？」

「導は大丈夫ルン。導だって、あんな体験したことを話しても誰も信じてもらえないって思うだろうし」

確かに、あんな経験を他人にしたところで、信じてくれるのはグラン・ロコの光主であつた両親とその仲間たちくらいなものだろう。



第一、導はあまり人と深く関わりを持たない。

ララの正体が導の口から漏れることは、ほぼありえないだろう。

「まあ、細かいことはいいいから! さっそくララのロケットに行こう!!」

「……俺の口よりもひかるの口から漏れる可能性のほうが高いな、たしかに」

「オヨ……」

よくこの調子の人間と一緒にいてはれないな、と導は奇妙なところで感心していた。

ひかるとララに案内された先には、確かにロケットと思しき物体があった。

なんともファンシーなその外見に、本当にロケットなのか、と疑問が浮かんできたことは言うまでもない。

ひかるたちに促されるまま、ロケットの中に入っていくと、『プルンス』が口癖のクラゲ型異星人が出迎えた。

「おかえりでプルンス、ララ……って、ひかるはともかく、なんでそいつがいるでプルンスか?」

「ちよつと失礼じゃないか? プルンス」

「地球のゲームに興味が出たから、ひかると一緒に教えてもらおうと思ったルン」

「え〜? ……大丈夫でプルンスか? スタープリンセスが信頼しているとはいえ、地球人

でプルンスよ？」

「信用ないかもしれないが、俺の言葉を信じる連中は少ないよ……俺の声なんて、あいつらからすればすぐにもみ消せる雑音のようなもんだしな」

文句を言うプルンスに、導は何かをこらえるように顔をしかめてそう返した。

あいつら、という言葉がいったい誰を示しているのか、それを知らないひかるたちは首をかしげていたが、これ以上は何も話すことはないとばかりに、導は無理やり話題を切り替えた。

「ほら。始めるぞ」

「あ、う、うん！」

「わかったルン！」

導の一言に、ひかるとララは慌てた様子でうなずき、導の前に座った。

持つてきていた予備のカードを広げ、導はバトスピのルールとゲームの流れを説明し始めた。

あまりに一度に教えるとひかるの理解が追いつかない可能性も考え、基本的な流れと何が出来て何ができないのか、そして何が必要なのかを集中的に教えることにした。

「……まあ、基本はこんなもんだ。大丈夫か？」

「オツケーオツケー！」

「だいたいわかったルン!」

「それじゃ、実践してみるか」

そう言つて、導は二つのデツキを取り出し、ひかるとララの目の前にそれぞれ置いた。

「い、いきなり?!」

「だ、大丈夫ルン?!」

「さつき教えたようにして、自分が好きなようにデツキを回してみろ。何かわからないことがあれば教えてやる」

導にそう言われて、ひかるとララは恐る恐るといった風にデツキを手に取り、何が入っているのかを確認した。

「デツキの内容をだいたい把握した二人は、さつそく、先攻と後攻を決めて初めてのバトルを始めた。」

「わたしからだね?」

「オヨク、じゃんけん負けちゃったルン……」

「先攻と後攻は最初に引いたカード四枚の状態をみて、決定権をもらったプレイヤーが決めることができるんだ。ひかる、今回はどうするんだ?」

「それじゃ、先攻をもらおうよ! スタートステップ!! 最初だからコアステップを飛ばして、ドローステップ!」

バトルスピリッツの先攻と後攻は、バトル開始前に決定権を得たプレイヤーが最初に引く四枚のカードを見てから判断することが許されている。

だが、今回ひかるは先攻を選んだ。

〈第1ターン〉

ひかる：ライフ5、リザーブ4、トラッシュ0、手札4↓5

フィールド

スピリット：なし

ネクサス：なし

バースト：なし

「メインステップ！「ライト・ブレイドラ」と「モルゲザウルス」をレベル1で召喚する

よー！」

ひかるは赤のスピリットであるライト・ブレイドラとモルゲザウルスを一体ずつ召喚した。

この時点で、ひかるはリザーブにあるすべてのコアを使い切ってしまったため、これ以上は何もすることができず、ターンエンドを宣言した。

〈第1ターン〉

ひかる：ライフ5、リザーブ4↓0、トラッシュ0↓2、手札5↓3

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／コスト0／Lv1：BP1000）

モルゲザウルス（赤／コスト3（軽減：赤2）／Lv1：BP2000）

ネクサス：なし

バースト：なし

「ターンエンド、ララの番だよ」

「わかったルン！スタートステップ！コアステップ、ドローステップ！」

〈第2ターン〉

ララ：ライフ5、リザーブ4↓5、トラッシュ0、手札4↓5

フィールド

スピリット：なし

ネクサス：なし

バースト：なし

「メインステップルン！まずはバーストをセットするルン！そして、「イグアバギー」と

「ガドフアント」をレベル1で召喚するルン!!」

ララはひかるとは対照的にバーストをセットし、白のスピリットであるイグアバギーとガドフアントをフィールドに召喚した。

バーストとは、フィールドに一枚、裏側でセットすることができるカードであり、カードに記されたタイミングによって本来の効果とは異なる能力を発揮するカードだ。

〈第2ターン〉

ララ：ライフ5、リザーブ5↓1、トラッシュユ0↓2、手札5↓3

フィールド

スピリット：イグアバギー（白／コスト1（軽減：赤／白1）／Lv1：BP1000）

ガドフアント（白／コスト2（軽減：白2）／Lv1：BP2000）

ネクサス：なし

バースト：あり

「あれ？そのカード、わたしがもらったデッキにもあったような……」

「オヨ？……：そういうえば、ひかるが出したカードも……これ、どういうことルン？」

ひかるはララが召喚したカードが自分のデッキにも含まれていたことを思い出し、その口にする、ララもまた、ひかるが召喚したカードが自分のデッキに入っていたことを思い出した。

二人の視線は同時にデッキを渡してきた導のほうへと向いた。

「そりゃそうだ。そのデッキは父さんが依頼されて作った初心者用デッキだからな。同

じカードが入ってるの当然だろ」

導が二人に手渡したデッキは、馬神弾監修で作られた初心者用のデッキだった。

初心者用であるため、基本となるスピリットやブレイヴの召喚、マジックやバーストの使用を覚えることを重視している構成ではあるが、攻守のバランスは絶妙なものであり、熟練者が少し手を加えれば十分大会でも活躍できるほどの潜在能力を持っているデッキとなっている。

導があえて二人に同じデッキを渡したのは、このデッキでのミラーマッチを見て、ひかるとララのバトルの性格を把握し、今後のデッキづくりでの確なアドバイスを行うためだった。

「なるほど。使う人間が違えば、同じデッキでも違って見えるものというわけでプルンスな」

「わかってるじゃないか、プルンス」

「ふっふっふ、なめてもらっては困るでプルンス!」

お調子者なきらいがあるプルンスは胸を張るようにして導の言葉に返した。

一方、少し困惑したひかるとララだったが、初心者であることは確かだし、なにより、ゲームはまだ始まったばかりだからか、すぐにバトルへと意識を戻した。

「これ以上はなにもないルン。ターンエンドルン」

「よし！スタートステップ！コアステップ、ドローステップ！リフレッシュステップ！！」

〈第3ターン〉

ひかる：ライフ5、リザーブ0↓3、トラッシュユ2↓0、手札3↓4

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／コスト0／Lv1：BP1000）

モルゲザウルス（赤／コスト3（軽減：赤2）／Lv1：BP2000）

ネクサス：なし

バースト：なし

「メインステップ！わたしもバーストをセットするよ。でもって、モルゲザウルスをレ

ベル2に！」

〈第3ターン〉

ひかる：ライフ5、リザーブ3↓2、トラッシュユ0、手札4↓3

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／コスト0／Lv1：BP1000）

モルゲザウルス（赤／コスト3（軽減：赤2）／Lv1↓2：BP2000

0↓3000）



ネクサス：なし

バースト：あり

「……よし、突っついてみよう! アタックステップ! モルゲザウルスでアタックだよ!!」  
第3ターンに入り、ひかるは早くもアタックを仕掛けてきた。

この瞬間、モルゲザウルスは全レベル共通効果により、BPが2000上昇するため、合計BPは5000となる。

ララはそのアタックをライフで受けた。

バトルが終了したため、モルゲザウルスのアタック時効果は終了し、BPは元に戻る  
こととなる。

〈第3ターン〉

ひかる：ライフ5、リザーブ2、トラッシュ0、手札3

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ (赤/コスト0 / Lv1：BP1000)

モルゲザウルス (アタックにより疲労状態) (赤/コスト3 (軽減：赤2)

/ Lv2：BP5000 ↓ 3000)

ネクサス：なし

バースト：あり

ララ：ライフ5↓4、リザーブ1↓2、トラッシュユ2、手札3

フィールド

スピリット：イグアバギー（白／コスト1（軽減：赤／白1）／Lv1：BP1000）

ガドフアント（白／コスト2（軽減：白2）／Lv1：BP2000）

ネクサス：なし

バースト：あり

「ターンエンドだよ」

まだライト・ブレイドラでアタックすることはできるが、ライト・ブレイドラはBP1000であるため、ブロックされればひとたまりもないと考えたのか、ひかるはそれ以上のアタックを控え、ターン終了を宣言した。

## ひかるとララ、初めてのバトスピ! (後編)

導にバトルスピリッツのことを教わったひかるとララは、さつそく導から受け取った初心者用デッキを使い、実戦を行っていた。

第3ターンにひかるとララが最初のアタックを仕掛け、ララはそれをライフで受けた。

これにより、ララのライフが一つ減り、ひかるとララが一步リードする形となった。

### 〈第4ターン〉

ララ：ライフ4、リザーブ2、トラッシュ2、手札3

フィールド

スピリット：イグアバギー（白／コスト1（軽減：赤／白1）／Lv1：BP100

0

ガドフロント（白／コスト2（軽減：白2）／Lv1：BP2000）

ネクサス：なし

バースト：あり

ひかるとララ：ライフ5、リザーブ2、トラッシュ0、手札3

フィールド

スピリット：ファイザード（赤／コスト0／Lv1：BP1000）

モルゲザウルス（疲労状態）（赤／コスト3（軽減：赤2）／Lv2：BP

3000）

ネクサス：なし

バースト：あり

「スタートステップルン！コアステップ、ドローステップ！リフレッシュステップルン！」

〈第4ターン〉

ララ：ライフ4、リザーブ2↓5、トラッシュユ2↓0、手札3↓4

フィールド

スピリット：イグアバギー（白／コスト1（軽減：赤／白1）／Lv1：BP1000）

ガドフロント（白／コスト2（軽減：白2）／Lv1：BP2000）

ネクサス：なし

バースト：あり

「メインステップ！「ガドフロント」と「ノーザンベアード」をレベル1で召喚。先に召喚していたガドフロントをレベル2にするルン」

## 〈第4ターン〉

ララ：ライフ4、リザーブ5↓2、トラッシュ0↓1、手札4↓2

フィールド

スピリット：イグアバギー（白／コスト1（軽減：赤／白1）／Lv1：BP1000）

ガドフアント（白／コスト2（軽減：白2）／Lv1↓2：BP2000）  
↓3000）

ガドフアント（白／コスト2（軽減：白2）／Lv1：BP2000）

ノーザンベアード（白／コスト3（軽減：白2）／Lv1：BP4000）

ネクサス：なし

バースト：あり

「場を固めてきたな」

「でも、ライフの数はひかるが優勢でプルンス。ララがここからどう動くかで戦況が変わるのではないでプルンスか？」

「そうだな。手札にどんなマジックを仕込んでいるか。あるいは、ネクサスがあるのか

……」

手札にどんなカードがあるのかによって、一瞬でフィールドの状況が変化する。

カードゲームではよくある話だが、当然、バトスピでもその話が適用される。

だが、そのカードをいつ切るかはプレイヤーの判断によってさまざまだ。

ララがどう動くか、プルンスと導はそこに注目していた。

「……アタックステップルン！レベル1のガドフロントでアタックルン!!」

「ライフで受けるよ!!」

〈第4ターン〉

ララ：ライフ4、リザーブ2、トラッシュユ1、手札2

フィールド

スピリット：イグアバギー（白／コスト1（軽減：赤／白1）／Lv1：BP100

0）

ガドフロント（白／コスト2（軽減：白2）／Lv1↓2：BP2000

↓3000）

ガドフロント（アタックにより疲労）（白／コスト2（軽減：白2）／Lv

1：BP2000）

ノーザンベアード（白／コスト3（軽減：白2）／Lv1：BP4000）

ネクサス：なし

バースト：あり

今度はララがアタックステップによりひかるにアタックを選択。

だが、ひかるはマジックでカウンターを行うことはなく、ライフで受けた。

それが、ひかるの狙いでもあった。

〈第4ターン〉

ひかる：ライフ5↓4、リザーブ2↓3、トラッシュ0、手札3

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／コスト0／Lv1：BP1000）

モルゲザウルス（疲労状態）（赤／コスト3（軽減：赤2）／Lv2：BP

3000）

ネクサス：なし

バースト：あり

「自分のライフが減ったことで、バーストの発動条件を満たした！バースト発動!!」「三札之術」！BP4000以下の相手スピリット1体を破壊する！ノーザンベアードを破壊  
!!」

「オヨオツ?!?!」

ひかるが発動したバーストは、自分のライフが減少した時に発動できるもので、その効果は一定のBP以下の相手スピリット1体を破壊するものだった。

その効果で、ノーザンベアードは破壊されてしまい、ララは大きく動揺した。

〈第4ターン〉

ララ：ライフ4、リザーブ2、トラッシュユ1、手札2

フィールド

スピリット：イグアバギー（白／コスト1（軽減：赤／白1）／Lv1：BP1000）

ガドフアント（白／コスト2（軽減：白2）／Lv2：BP3000）

ガドフアント（疲労状態）（白／コスト2（軽減：白2）／Lv1：BP2

000）

ネクサス：なし

バースト：あり

ひかる：ライフ5↓4、リザーブ2↓3、トラッシュユ0、手札3

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／コスト0／Lv1：BP1000）

モルゲザウルス（疲労状態）（赤／コスト3（軽減：赤2）／Lv2：BP

3000）

ネクサス：なし



バースト：あり↓マジック「三札之術」（赤／コスト5（軽減：赤3））

「なるほど、考えたな」

「どういうことでプルンス？」

「ノーザンベアードにはブロック時効果でボイドからコア一つを自分の上に置くことができる効果がある。ひかるはそれを防いだんだろう」

「コアが多ければ戦術の幅も広がるから、それは困る、ということではプルンスか……」

おそらく、ノーザンベアードの能力を覚えているわけではなく直感的に行ったことなのだろうが、直感がさえているひかるだからこそその結果だろう。

だが、バースト能力を持っているマジックはコストを支払うことで本来の能力を使用することもできる。

ひかるは「三札之術」の使用コストを支払い、メインの効果を使用した。

「ライト・ブレイドラとモルゲザウルスがいるから、コストが2減って……コスト3でメインの効果を使って、2枚ドロ―！さらに、デッキの一番上を1枚めくって、赤のスピリットだったら手札に加えるよ！」

〈第4ターン〉

ひかる：ライフ4、リザーブ3↓0、トラッシュ0↓3、手札3↓5

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／コスト0／Lv1：BP1000）

モルゲザウルス（疲労状態）（赤／コスト3（軽減：赤2）／Lv2：BP3000）

ネクサス：なし

バースト：なし

ひかるがめくったカードは赤のスピリット「太陽龍ジーク・アポロドラゴン」だった。よって、このカードも手札に加わることとなる。

「……た、ターンエンド、ルン」

ライフにはまだ余裕があるため、さらなるアタックを仕掛けても問題はないのだが、ララはここでターン終了を宣言した。

先ほど手札に加わったジーク・アポロドラゴンは、ララのデッキにも入っているし、やたら数字が大きかったことから、おそらく、このデッキに入っているカードの中で最強クラスのカードなのだろうということとは推察できた。

それが手札に加わった、ということとは、ここからひかるの猛攻撃は始まるということでもある。

ならば、少しでもブロックできるスピリットを残しておきたいと思うのは、必然だ。

「スタートステップ！コアステップ、ドローステップ！リフレッシュステップ！」

〈第5ターン〉

ひかる：ライフ4、リザーブ0↓4、トラッシュユ3↓0、手札5↓6

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ (赤／コスト0 / Lv1：BP1000)

モルゲザウルス (疲労状態から回復) (赤／コスト3 (軽減：赤2) / Lv

2：BP3000)

ネクサス：なし

バースト：なし

ターンを明け渡されたひかるはターンを進め、メインステップに入った。

「メインステップ：まずはこのカード！」「太陽龍ジーク・アポロドラゴン」をレベル1で召喚！足りないコアは、レベル2のモルゲザウルスのものを使うよ！」

〈第5ターン〉

ひかる：ライフ4、リザーブ4↓0、トラッシュユ0↓4、手札5↓4

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ (赤／コスト0 / Lv1：BP1000)

モルゲザウルス (赤／コスト3 (軽減：赤2) / Lv2↓1：BP3000

0↓2000)

太陽龍ジーク・アポロドラゴン（赤／コスト6（軽減：赤2／青2）／Lv1：BP4000）

ネクサス：なし

バースト：なし

「アタックステップ！太陽龍ジーク・アポロドラゴンでアタック！アタック時効果で、イグアバギーに指定アタックするよ!!」

ひかるはジーク・アポロドラゴンを呼び出すときっそくアタックを仕掛けた。

太陽龍ジーク・アポロドラゴンには全てのレベルに共通する効果として、回復状態の相手スピリットに指定アタックができる効果がある。

これにより、ララはイグアバギーでこのアタックをブロックするしかなかった。

ひかるは続けて、モルゲザウルスでアタック。

ララはこのアタックをブロックせず、ライフで受けた。

ひかるはブロックを残すためか、それ以上は攻撃を行わず、ターンを終了させた。

〈第5ターン〉

ひかる：ライフ4、リザーブ0、トラッシュ4、手札4

フィールド

スピリット：ライトブレイドラ（赤／コスト0／Lv1：BP1000）

モルゲザウルス (アタックにより疲労状態) (赤/コスト3 (軽減:赤2)  
/Lv2↓1:BP3000↓2000)

太陽龍ジーク・アポドラゴン (アタックにより疲労状態) (赤/コスト6

(軽減:赤2/青2) /Lv1:BP4000)

ネクサス:なし

バースト:なし

ララ:ライフ4↓3、リザーブ2↓4、トラッシュユ1、手札2

フィールド

スピリット:ガドファアント (白/コスト2 (軽減:白2) /Lv2:BP3000)

ガドファアント (疲労状態) (白/コスト2 (軽減:白2) /Lv1:BP2

000)

ネクサス:なし

バースト:あり

「バトルの流れはひかるにあるようでプルンスな」

「今のところは、な」

プルンスが漏らした言葉に、導は淡々と返した。

確かに、ライフの数、フィールドに残っているスピリットの数、手札。どの要素を見

ても、ひかるに分がある。

だが、ララはまだ勝負をあきらめてはいなかった。

第6ターンとなり、ララはステップを進めた。

〈第6ターン〉

ララ：ライフ3、リザーブ4↓6、トラッシュユ1↓0、手札2↓3

フィールド

スピリット：ガドフアント（白／コスト2（軽減：白2）／Lv2：BP3000）

ガドフアント（リフレッシュユステップにより回復）（白／コスト2（軽減：

白2）／Lv1：BP2000）

ネクサス：なし

バースト：あり

「メイנסテップ！イグアバギー2体をノーコスト召喚！こっちも「太陽龍ジーク・アポロドラゴン」を召喚するルン!!」

ララのフィールドにもジーク・アポロドラゴンが召喚された。

コスト以外に必要なコアは、イグアバギーに乗っているものを使うことで確保したため、イグアバギー2体は消滅することとなる。

さらにレベル2だったガドフアントをレベル1に下げ、ジーク・アポロドラゴンをレ

ベル2に引き上げた。

〈第6ターン〉

ララ：ライフ3、リザーブ6↓4↓0、トラッシュユ0↓4、手札3↓0

フィールド

スピリット：ガドファント（白／コスト2（軽減：白2）／Lv2↓1：BP3000↓2000）

ガドファント（白／コスト2（軽減：白2）／Lv1：BP2000）

太陽龍ジーク・アポロドラゴン（赤／コスト6（軽減：赤2／青2）／L

v2：BP6000）

ネクサス：なし

バースト：あり

「アタックステップ！太陽龍ジーク・アポロドラゴンでアタック！効果でライト・ブレイドラを指定するルン!!」

「ライト・ブレイドラでブロック！」

「続けて、ガドファントでアタックルン！」

「ま、まだライフに余裕はあるから……ライフで受ける！」

〈第6ターン〉

ひかる：ライフ4↓3、リザーブ0↓1、トラッシュユ4、手札4  
 フィールド

スピリット：モルゲザウルス（疲労状態）（赤／コスト3（軽減：赤2）／Lv2↓1：  
 BP3000↓2000）

太陽龍ジーク・アポドラゴン（疲労状態）（赤／コスト6（軽減：赤2／  
 青2）／Lv1：BP4000）

ネクサス：なし

バースト：なし

「ターンエンドルン」

このアタックにより、ライフの数はお互い同じになった。

だが、次のひかるのドローでララは一気に追い詰められることとなる。

「スタートステップ！コアステップ、ドローステップ！リフレッシュステップ!!」

〈第7ターン〉

ひかる：ライフ3、リザーブ1↓6、トラッシュユ4↓0、手札4↓5

フィールド

スピリット：モルゲザウルス（リフレッシュステップで回復）（赤／コスト3（軽減：

赤2）／Lv1：BP2000）



太陽龍ジーク・アポロドラゴン (リフレッシュステップで回復) (赤/コス

ト6 (軽減:赤2/青2) /Lv1:BP4000)

ネクサス:なし

バースト:なし

「メインステップ!」「ライトブレイドラ」2体を召喚!そして、「砲竜バル・ガンナー」を  
召喚するよ!!」

〈第7ターン〉

ひかる:ライフ3、リザーブ6↓1、トラッシュ0↓2、手札5↓2

フィールド

スピリット:モルゲザウルス (赤/コスト3 (軽減:赤2) /Lv1:BP2000)

太陽龍ジーク・アポロドラゴン (赤/コスト6 (軽減:赤2/青2) /L

V1:BP4000)

ライト・ブレイドラ (赤/コスト0 /Lv1:BP1000)

ライト・ブレイドラ (赤/コスト0 /Lv1:BP1000)

砲竜バル・ガンナー (赤/コスト4 (軽減:赤2) /BP4000)

ネクサス:なし

バースト:なし

ひかるはライトブレイドラを2体と砲竜バル・ガンナーを連続で召喚した。

この砲竜バル・ガンナーはスピリットではなく、バトルスピリッツ第四のカード「ブレイヴ」だ。

ブレイヴはスピリットと同じようにフィールドに出すこともできるが、その真の能力は別にある。

「バル・ガンナーをジーク・アポドラゴンに合体<sup>ブレイヴ</sup>して、レベル2に！」

その真の能力は、自分フィールドのスピリットと「合体」することだ。

「合体」とは、自分フィールドのスピリット状態のブレイヴの上に、条件が合致するスピリットを重ねる状態にすることを言う。

この状態のスピリットを「合体スピリット」と呼び、通常のスピリット状態のときにはない、特殊な能力を得るものもある。

〈第7ターン〉

ひかる：ライフ3、リザーブ6↓1、トラッシュ0↓2、手札5↓2

フィールド

スピリット：モルゲザウルス（赤／コスト3（軽減：赤2）／Lv1：BP2000）

太陽龍ジーク・アポドラゴン＋砲竜バル・ガンナー（赤・赤／コスト6

＋4（軽減：赤2／青2）／Lv1↓2：BP4000↓6000＋4000）

ライト・ブレイドラ (赤/コスト0/Lv1:BP1000)

ライト・ブレイドラ (赤/コスト0/Lv1:BP1000)

ネクサス:なし

バースト:なし

「アタックステップ!合体スピリットでアタック!バル・ガンナーの合体時効果で、デッキからカードを1枚ドローして、BP6000以下の相手スピリット1体を破壊するよ!!ララのアポロドラゴンをこの効果で破壊!」

「オヨオツ?!」

「さらにアポロドラゴンの合体アタック時効果で、BP9000以下の相手スピリットを破壊!疲労状態のガドフアントを破壊させてもらおうよ!」

「オヨオツ?!」

「そして、アポロドラゴンの本来の効果でガドフアントに指定アタック!!」

「が、ガドフアントでブロックするルン!ブロック時効果でBPをプラス3000するけど……オヨオ、負けルン……」

指定アタックを受けたガドフアントは、強制的にアポロドラゴンとバトルすることになる。

ガドフアントにはブロック時の効果として自分のBPを3000アップさせる効果

があるのだが、現在のジーク・アポロドラゴンはBP10000であり、たとえその効果でBPが上がっていても太刀打ちはできなかった。

なお、ライト・ブレイドラが持っている「強化」<sup>チャージ</sup>の効力により、BP破壊の上限が底上げされているのだが、ひかるはそのことをすっかり忘れていたらしい。

導も指摘しようかどうか考えていたが、それをする前にターンが進んでしまったため、口をはさむことができなかった。

〈第7ターン〉

ララ：ライフ3、リザーブ0↓5、トラッシュユ4、手札0

フィールド

スピリット：なし

ネクサス：なし

バースト：あり

この一瞬でララのフィールドはプロッカードがない、まっさらな状態になってしまった。

この状態を好機と見たひかるは、これ見よがしに一齐攻撃を仕掛けた。だが、ララもただやられるだけではない。

「モルゲザウルスでアタック！」

「ライフで受けるルン！ライフ減少により、バーストを発動！「絶甲氷盾」のバースト効果でボイドからコア一つを自分のライフに置くルン。さらに、コスト4を支払ってアタックステップを強制終了ルン！」

「あちやく……ターンエンドだよ」

バースト効果を持つ白のマジック「絶甲氷盾」。

その効果は、ライフが減少した時に発動でき、ボイドからコア一つをライフに置くことが出来るもの。シンボル一つ分のダメージならば、実質なかったことにできるといって強力的な能力を秘めている。

さらに、コストを支払うことでアタックステップを強制終了させることができる、強力な防御能力も持っている。

だが、ララの手札はなく、フィールドもがら空き。

たとえスピリットを呼べたとしても、アポロドラゴンのアタックで蹂躪されることは確実だ。

そのため、ララが取った手段は。

「……降参ルン……」

降参を認めることだった。

「オヨく……地球のゲームは少し難しいルン……」

「えく？ そうかなあ?？」

「今回は星奈がドロローに救われただけだ。次やったらどうなるかはわからない、それがバトスピだ」

初バトルで降参という選択肢をしてしまったララが落ち込みながらそう話すと、ひかるはわりと直感でどうにかできてしまったためか首をかしげ、導はひかるとララに合うだろうと考えているカードを選びながら返していた。

数分もせずに、導は数枚のカードをひかるとララの前に置いた。

「え?？」

「オヨ?？」

「持つても使いそうにないから、お前たちにやる」

「え? でも……」

「いいルン?」

「ああ」

もらつても大丈夫か困惑している二人に導はうなずいて返した。

その厚意に甘えて、二人は導が選んでくれたカードを受け取ることにするのだった。

## やってきたのは、異星人のカードバトラー!

導がひかるとララにバトスピの基本的なルールを教え、デッキと数枚のカードを渡した翌日。

休日だったその日、導はなくなり始めている消耗品を買いに商店街に出ていた。

「ティッシュとトイレットペーパー、洗濯洗剤……こんなもんかな? ゴミ袋はまだあつたし、掃除機。パックも大丈夫……よし、帰るか」

とつぶやき、帰ろうとしたその時、背後から聞き覚えのある声が聞こえてきたため、ため息をついた。

「導くん! こんにちは!!」

「こんにちはルン」

「……ああ。それじゃな」

「つて、立ち去るの早すぎ!!ちよつと待ってよ!!」

面倒ごとと巻き込まれる前にさつきと帰ろうとした導だったが、ひかるに服をつかまれてしまった。

こうなるとどこでも動かせないことを学んだ導は、ため息をつけてなぜ引き留めたの

か問いかけた。

「なんだよ、俺、これから帰って夕飯の支度とかしないとなんだけど？」

「そこを何とか！」

なぜか引き留めようとするひかるに嫌気を覚えながらも、生来の人の好きが出てきてしまった導は、ひとまず話だけ聞くことにした。

「はあ……で？なんだよ？」

「これからえれなさんのうちでパーティーなんだけど」

「……荷物、置いてきてからでいいか？」

どうせ断つても勢いで押し切るつもりであることを察した導は、ひとまず、持っている荷物だけでも置いていきたいと思い、そう提案した。

意外にも、ひかるは導の荷物をしっかりと把握していたのか、了承してくれた。

だが、導の性格も把握していたらしく。

「それじゃ、わたしたちもついていくよ！」

「はあっ?!なんで……」

「たぶん、馬神くんだけで行かせたら逃げるって思ってるルン」

「……はあ……わかった」

こうなったらかみついたすっぽんのように絶対に離さないことを悟り、導はため息を



ついてついてくることを了承した。

ひかるとララに連行されるような形で一時帰宅をした導は、買い足したものを置いて、再びひかるたちと一緒に商店街へむかった。

商店街に到着し、えれなの実家であるフラワーショップに到着すると、一人の男の子が走り去っていく姿が目に入った。

「……なんだ?」

「あれ?とうまくん?」

「あ、ひかる!ララ!!」

男の子に続き、慌てた様子のえれなが姿を見せた。

「どうやら、よほどのことがあったらしい。」

いつもならば放っておくのだが、両親譲りの人の好きが発動してしまい、導は面倒くさそうにため息をついた。

「弟さん、追っかけてきます」

「あ、ならわたしたちも!」

導の言葉に、ひかるたちも慌ててとうまを追いかけた。

だが、途中で見失ってしまい、手分けして探すことになってしまった。

導は一人で商店街の外へ出て探し回ってみたが、目的の人物とは別の人物を見つけて

しまった。

「あら？あなたはたしか、プリキュアと一緒にいた……」

「天狗？……にしてはあんた、ずいぶんな格好してるな」

そこにいたのは、天狗が持つ柏の団扇に似た団扇を持った、長い鼻の仮面を被った女性だった。

見た目こそ天狗なのだが、ところどころ露出が多く、とても修験者が転じた妖怪とは思えない姿だった。

「まあいいわ。ちよつと遊んでもらうわよ!!」

女がそう叫ぶと同時に、手にした団扇を掲げた。

その瞬間、どこに隠れていたのか周囲から『NO』と顔面に書かれたマスクをかぶった、いつぞやの戦闘員たちが姿を現した。

「駒ちゃんたち、やっておしまい!」

『ノットレイイツ!!』

「ああ……結局こうなるのか……」

ため息をつきながら、導は持つてきていたデツキホルダーに手を伸ばし、「射手星鎧ブレイヴサジタリアス」のカードを取り出し、掲げた。

その瞬間、カードから赤い光が放たれ、あたりを包んだ。

光がおさまると、カードに描かれたイラストと同じ、赤い鎧をまとった導の姿があった。

「……いぐぞ」

格闘技の心得はないが、拳を握り、静かにそう告げた瞬間、戦闘員たちが一斉に襲いかかってきた。

無計画に次々に飛び掛かってくる彼らに對して、導は拳や蹴り、時には『ブレイヴサジタリアス』の弓で矢を放ち、撃退していった。

だが、その数はまったく減る様子がなかった。

「……数が多いな……」

そうつぶやくと、腰のホルダーから一枚のカードが飛び出してきた。

まるで、自分を使え、と言っているかのように導の前に浮かんできたカードをつかみ、カードを掲げた。

「マジック『サザンクロスフレーム』を使用!BP4000以下のスピリットすべてを破壊する!!」

そう叫んだ瞬間、カードから十字を描いた炎が吹き上がり、周囲の戦闘員たちを吹き飛ばした。

どうやら、戦闘員たちはBP4000以下として扱われるようだ。

まさかバトスピと同じ効力を発揮することができるとは思ってもみなかつたらしく、目の前に広がる結果に導は呆然としていた。

「うわあ……」

「な、なんなのよ、いったい……」

「いや、俺もよくはわからないんだけど……」

女天狗の問いかけに、導は頬に汗を伝わせながら返した。

だが、女天狗はその隙をついて、さらなる戦闘員を呼び出し、導に向かわせた。

導はすぐに反応し、ホルダーから新しいカードを取り出し、先ほどと同じようにカードの名前を叫んだ。

「マジック「サイレントロック」を使用!!」

今度は白のマジック「サイレントロック」に描かれたものと同じ、白い鎖が地面から伸びてきて戦闘員たちを縛り付けた。

「サイレントロック」の本来の効果は、「合体していないスピリットのバトル終了時、アタックステップを終了する」というものなのだが、どうやら、攻撃をロックしているようだ。

攻撃が終わり、周囲を見渡すが、先ほどの女天狗は姿を消していた。

この場から離れたのだろうか、それとも、妖怪の天狗よろしく、上空に飛び上がって

いるのだろうか。

注意深く周辺に意識を凝らしていたが、どうやらこの場から離れたようだ。

となれば、これ以上、ここで暴れても仕方がないと判断し、導はそのまま立ち去ろうとした。

だが、その行く手を阻むように、一発の弾丸が導の足元に命中した。

思わず立ち止まり、銃声がした方へ視線を向けると、そこには一人のガンマン風の男が銃口をこちらに向けて立っている姿があった。

「誰だ、あんた……銃を持つてることば一般人じゃないな?」

「……冷静だな。さすが、スタープリンセスたちから十二宮Xレアを預かったカードバトラー」

正確にはスタープリンセスたちではなくマギサからなんだが、と突っ込みたくなかったが、ひとまず誤解しているのならばそのままにしておこうと想い、導は何も言わなかった。

スタープリンセスたちのことを知っているとすることは、おそらくは異星人。そして、十二宮Xレアのことを知っているとすることは。

「あんたもカードバトラーか?」

「その通り。ダークネストとかいうやつに拾われた、『流浪のカードバトラー』ロビン、そ

れが俺だ」

「なら、目的はこれだろ？」

そう言つて、導はバトスピのデッキを取り出した。

それを見た瞬間、ロビンと名乗つた異星人の目は獰猛なものへと変わった。

まるで獲物を目の前にした狩人のような目だ。

「ああ、その通りだ。地球にもカードバトラーがいたことに驚いたが、何より、スタープリンセスよりその実力を認められたつて話だからな。バトルしてみたくなるのが、カードバトラーの性つてもんだろ！」

ロビンはそう語りながら、自身のデッキを取り出した。

そして、導とロビンは同時に叫んだ。

自分たちの戦いを始めるための言葉を。

「ゲードオーブン！ 解放!!」

その言葉を叫んだ瞬間、二人のデッキから白い光があふれ、二人を包み込んだ。

## 降臨!光龍騎神サジツト・アポロドラゴン!!

ノットレイダーの襲撃にあつた導だつたが、マジサから渡されたカードの力でどうか切り抜けることができた。

だが、ほつとしたのもつかの間、ノットレイダーの首領ダークネストに雇われた、という異星人のカードバトラー『流浪のカードバトラー』ロビンとバトルをすることになった。

「ゲートオープン!界放!!」

二人がデツキをかざし、その言葉を口にした瞬間、デツキからあふれた光に飲み込まれた。

気付けば、導は先ほどの赤い鎧姿のまま、荒廃した荒野が広がる高台にいた。

「……は……?」

「ここはバトルフィールドだ。なんだ、地球にやこのフィールドがないのか?」

「……少なくとも、グラン・ロロとのゲートが閉じてからは出現することがないと聞いている。けど……そうか、ここが」

ロビンの言葉を聞いて、導はどこか納得していた。

かつてのグラン・ロロでの冒険、未来の世界での戦い。それらの話は、すべて両親とコアの光主から聞いていた。

だからこそ、感慨深いものがあつた。

かつて、父が求めてやまなかつた場所に立っていることが。

「いつもでも呆けてんじやねえよ。先攻はもらうぜ」

「好きにしたらいい」

「なら遠慮なく。スタートステップ！ドローステップ！」

〈第1ターン〉

ロビン／ライフ：5、リザーブ：4、トラッシュユ：0、手札：4↓5

フィールド

スピリット：なし

ネクサス：なし

バースト：なし

「メインステップ！ネクサス「蟲招く妖花の塔」を配置！ターンエンドだ」

〈第1ターン〉

ロビン／ライフ：5、リザーブ：4↓0、トラッシュユ：0↓4、手札：5↓4

フィールド



スピリット：なし

ネクスス：蟲招く妖花の塔（緑／4（軽減：緑2）／Lv1）

バースト：なし

「ターンエンドだ」

「スタートステップ！コアステップ、ドローステップ！」

〈第2ターン〉

導／ライフ：5、リザーブ：4↓5、トラッシュ：0、手札：4↓5

フィールド

スピリット：なし

ネクスス：なし

バースト：なし

「メインステップ！「ライト・ブレイドラ」をLv1、「ヴェロキ・ハルパー」をLv2

で召喚！」

〈第2ターン〉

導／ライフ：5、リザーブ：5↓0、トラッシュ：0↓1、手札：5↓3

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

ヴェロキ・ハルパー（赤／1／Lv2：BP3000）

ネクサス：なし

バースト：なし

導が2体のスピリットを召喚すると、眼下の荒野に突然、赤のコアが出現し、そのコアが砕け、中からライト・ブレイドラとヴェロキハルパーが姿を現した。

初めて、自分のスピリットの姿を見た導は、感動を覚え、目を輝かせた。だが、いまはバトルの最中。

そのことを思い出し、すぐに意識をバトルに向けた。

「アタックステップ！ヴェロキハルパーでアタック!!」

「ライフで受ける！」

〈第2ターン〉

ロビン／ライフ：5↓4、リザーブ：0↓1、トラッシュ：4、手札：4

フィールド

スピリット：なし

ネクサス：蟲招く妖花の塔（緑／4（軽減：緑2）／Lv1）

バースト：なし

アタックを宣言した瞬間、導が呼び出した恐竜に似たスピリット「ヴェロキ・ハル

パー」が地面を駆け出した。

ロビンはそのアタックをライフで受けることを宣言。その瞬間、ヴェロキ・ハルパーは高くジャンプし、ロビンに向かって飛び蹴りをしてきた。

だが、その爪はロビンを引き裂くことはなかった。

ロビンの目の前に赤い光を放つ壁が出現し、その爪を阻んだのだ。

壁が砕け散ると、ロビンがまもつている鎧にともつていた青い輝きが一つ、消滅した。どうやら、この輝きがライフの数を示しているようだ。

アタックが終了すると、ヴェロキ・ハルパーはその場から離れ、力なく首を垂れ下げた状態で待機した。

だが、両者ともこれで行動が終わったわけではない。

ヴェロキ・ハルパーは自身のアタックで相手のライフを減らした場合、デツキからカードを1枚どろーでき、ネクサス「蟲招く妖花の塔」は全レベル共通の効果として、コスト7以下の相手スピリットのアタックによってライフが減った場合、ボイドからコア2個をリザーブに置くことができる。

導もロビンもそれぞれ、その効果を使い、手札とコアを補充した。

〈第2ターン〉

導／ライフ：5、リザーブ：0、トラッシュ：1、手札：3↓4

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

ヴェロキ・ハルパー（アタックにより疲労状態）（赤／1／Lv2：BP3

000）

ネクサス：なし

バースト：なし

ロビン／ライフ：4、リザーブ：1↓3、トラッシュユ：4、手札：4

フィールド

スピリット：なし

ネクサス：蟲招く妖花の塔（緑／4（軽減：緑2）／Lv1）

バースト：なし

「ターンエンドだ」

「さっそく仕掛けてきたか。せつかちだな、お前は」

「兵は拙速を貴ぶ。仕掛けられるうちに仕掛けないと身動きが取れなくなるんでな」

「なるほど、道理だ……スタートステップ！コアステップ！ドローステップ！リフレッ

シユステップ！」

〈第3ターン〉

ロビン／ライフ：4、リザーブ：3↓8、トラッシュユ：4↓0、手札：4↓5  
フィールド

スピリット：なし

ネクサス：蟲招く妖花の塔（緑／4（軽減：緑2）／Lv1）

バースト：なし

「メインステップ！だが、お前はわざわざ俺にコアを与えてくれた。ちいとサービスが良すぎるんじゃないか？」

「緑デッキはコアバーストに特化した色だろう。どのみち、そのネクサスがあるんじゃないか」  
生半可なスピリットの攻撃じゃコアバーストし放題じゃないか」

ロビンの挑発するような言葉に、導は淡々と返した。

バトルスピリッツは、色によって特性が変わり、その基本となる戦術も異なる。

例えば、導や導の父、馬神弾が好んで使用する赤の特性は、フィールドのスピリットやネクサスを破壊することによる力押し of 戦術が、導の母、馬神まるが好んで使用する紫の特性は、コアを外すことにより相手スピリットの力をそぎ落とす戦術がセオリーとなる。

ロビンが使用している緑デッキの基本セオリーは、コアバーストでコアを大量に獲得し、スピリットの大量召喚やマジックの使用に利用する戦術がセオリーとなる。

そのため、コアを増やす効果を持つネクサスやスピリットが多く存在している。

「コアブーストは緑デツキの特権だからな。だが、そのコアこそがバトルの結果を左右する! 「ヤクヤナギ」をLv2、「コロコロン」をLv1で召喚!」

〈第3ターン〉

ロビン／ライフ：4、リザーブ：8↓1、トラッシュユ：0↓5、手札：5↓3  
フィールド

スピリット：ヤクヤナギ（緑／2（軽減：緑1）／Lv2：BP5000）

コロコロン（緑／3（軽減：緑1）／Lv1：BP4000）

ネクサス：蟲招く妖花の塔（緑／4（軽減：緑2）／Lv1）

バースト：なし

続いて、ロビンのフィールドに水牛に似たスピリットと尾がトウモロコシのようになっている狐が姿を現した。

2体のスピリットの効果は、いずれも緑のスピリットが所有するある能力に関するものだった。

そして、ネクサス「蟲招く妖花の塔」Lv2の効果を知っている導は、ロビンのバトルスタイルがどのようなものを理解した。

「ターンエンドだ」

「スタートステップ!コアステップ!ドローステップ!リフレッシュステップ!!」

〈第4ターン〉

導/ライフ:5、リザーブ:0↓2、トラッシュユ:1↓0、手札:4↓5

フィールド

スピリット:ライト・ブレイドラ(赤/0/Lv1:BP1000)

ヴェロキ・ハルパー(リフレッシュステップで回復)(赤/1/Lv2:B

P3000)

ネクサス:なし

バースト:なし

「メインステップ!「モルゲザウルス」をLv1で召喚!」

〈第4ターン〉

導/ライフ:5、リザーブ:2↓0、トラッシュユ:0↓1、手札:5↓4

フィールド

スピリット:ライト・ブレイドラ(赤/0/Lv1:BP1000)

ヴェロキ・ハルパー(赤/1/Lv2:BP3000)

モルゲザウルス(赤/3(軽減:赤2)/Lv1:BP2000)

ネクサス：なし

バースト：なし

導は新たなスピリット「モルゲザウルス」をフィールドに呼び出した。

導のフィールドに再び赤のコアが現れ、その中からごつごつとした兜をかぶり、しつぽの先がとげ付きの鉄球になっている赤い恐竜が姿を現した。

スピリットを増やすと、導はアタックを開始した。

「アタックステップ！モルゲザウルスでアタック！アタック時効果により、BP+2000。よってBP4000のアタックだ!!」

「ライフで受ける!!」

「続けて、ヴェロキ・ハルパーでアタック！」

「これもライフだ！」

〈第4ターン〉

導／ライフ：5、リザーブ：0、トラッシュ：1、手札：4↓5

フィールド

スピリット：ライトブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

ヴェロキ・ハルパー（アタックにより疲労状態）（赤／1／Lv2：BP3

000）



モルゲザウルス（アタックにより疲労状態）（赤／3（軽減：赤2）／Lv

1：BP2000）

ネクサス：なし

バースト：なし

ロビン／ライフ：4↓2、リザーブ：3↓9、トラッシュユ：5、手札：3

フィールド

スピリット：ヤクヤナギ（緑／2（軽減：緑1）／Lv2：BP5000）

コロコロン（緑／3（軽減：緑1）／Lv1：BP3000）

ネクサス：蟲招く妖花の塔（緑／4（軽減：緑2）／Lv1）

バースト：なし

「ターンエンド……コアをためてきたか。なら、そろそろ来るな」

「へへっ……スタートステップ！コアステップ！ドローステップ！リフレッシュステッ

プ!!」

〈第5ターン〉

ロビン／ライフ：2、リザーブ：9↓14、トラッシュユ：5↓0、手札：3↓4

フィールド

スピリット：ヤクヤナギ（緑／2（軽減：緑1）／Lv2：BP5000）

コロコーン（緑／3（軽減：緑1）／Lv1：BP4000）

ネクサス：蟲招く妖花の塔（緑／4（軽減：緑2）／Lv1）

バースト：なし

「メインステップ！」「武神鳥バーディ・ケンシン」を召喚！Lv2だ!!」

〈第5ターン〉

ロビン／ライフ：2、リザーブ：14↓7、トラッシュユ：0↓4、手札：4↓3

フィールド

スピリット：ヤクヤナギ（緑／2（軽減：緑1）／Lv2：BP5000）

コロコーン（緑／3（軽減：緑1）／Lv1：BP4000）

武神鳥バーディ・ケンシン（緑／6（軽減：緑2）／Lv2：BP8000）

0)

ネクサス：蟲招く妖花の塔（緑／4（軽減：緑2）／Lv1）

バースト：なし

「コスト6のスピリット……仕掛けてくるか!」

ロビンのフィールドに旋風が巻き起こり、その中から白い大鷲が姿を現した。

だが、普通の大鷲ではない。翼の羽はどこか金属質で、頭には兜のようなものをかぶ

り、背には槍を、体には刀を差したその姿は、「武神」の名を冠するだけのことではあった。

そして、このスピリットが召喚された瞬間、ロビンはアタックスステップに入った。

「アタックスステップ!ヤクヤナギでアタック!!」

「ライフで受ける!」

〈第5ターン〉

導／ライフ：5↓4、リザーブ：0↓1、トラッシュユ：1、手札：5

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

ヴェロキ・ハルパー（疲労状態）（赤／1／Lv2：BP3000）

モルゲザウルス（疲労状態）（赤／3（軽減・赤2）／Lv1：BP2000

0）

ネクサス：なし

バースト：なし

ロビンがアタック宣言を行うと、ヤクヤナギが角を突き出し、導に向かって突進してきた。

導がライフで受けることを宣言した瞬間、ヤクヤナギが飛び上がり、その鋭い角を導に向けて突き立ててきた。

当然、ロビンと同じように、緑の光の壁が阻んだため、その角が届くことはなかった。

だが、その壁が砕け散ると、同時に、導の胸に強い衝撃が走った。

「ぐうっ……こ、これがライフが砕ける痛み……」

「フラツシユタイミング! 「ゴクラクチョー」をLv1で神速召喚!! ヤクヤナギの効果で軽減シンボル：緑が2つ追加されたことでノーコスト召喚!!」

痛みに耐え、どうにか意識と体勢を保っていた導に、ロビンは容赦なく襲いかかってきた。

神速とは、緑のスピリットが持つ、リザーブから必要なコストを支払うことで、フラツシユタイミングに召喚を行うことが出来る能力だ。

本来であれば、ゴクラクチョーの召喚コストは4であり、緑のシンボル2個分のコスト軽減を行うことができるため、少なくともコア2個をリザーブから支払わなければ召喚はできない。

だが、ヤクヤナギが持つ「手札にある神速を持つスピリットに軽減シンボル緑2個を与える」能力により、軽減シンボルが緑4個に増えたため、ノーコストで召喚が可能となったのだ。

さらに、ゴクラクチョーは〈系統：爪鳥〉を持つスピリットであるため、バーディ・ケンシンの効果により、BPが3000上昇。

よって、合計BPは5000となる。

さらに、ゴクラクチョー召喚時効果でボイドからコア1つがロビンのリザーブに置かれる。

「そしてアタック!!」

「ライフで受ける!!」

〈第5ターン〉

ロビン／ライフ：2、リザーブ：7↓6↓7、トラツシユ：4、手札：3↓2

フィールド

スピリット：ヤクヤナギ（アタックにより疲労状態）（緑／2（軽減：緑1）／Lv2：BP5000）

コロコーン（緑／3（軽減：緑1）／Lv1：BP4000）

武神鳥バーディ・ケンシン（緑／6（軽減：緑2）／Lv2：BP800

0）

ゴクラクチョー（アタックにより疲労状態）（緑／4（軽減：緑2）／Lv

1：BP2000+3000）

ネクサス：蟲招く妖花の塔（緑／4（軽減：緑2）／Lv1）

バースト：なし

導／ライフ：4↓3、リザーブ：1↓2、トラッシュユ：1、手札：5

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

ヴェロキ・ハルパー（疲労状態）（赤／1／Lv2：BP3000）

モルゲザウルス（疲労状態）（赤／3（軽減：赤2）／Lv1：BP200

0）

ネクサス：なし

バースト：なし

「くっ……」

「フラッシュユタイミング！手札の「乙の白騎士アルパイン・ビット」をレベル3で神速召喚！！ヤクヤナギの能力で、こいつもノーコストだ!!」

ロビンがそう宣言した瞬間、フィールドに竜巻が起こり、その中から鎧をまとった大鷲とその背に乗る鎧騎士が姿を現した。

その威圧感から、導はこのスピリットがロボビンのキースピリットであることを悟った。

〈第5ターン〉

ロビン／ライフ：2、リザーブ：7↓1、トラッシュユ：4、手札：2↓1

フィールド

スピリット：ヤクヤナギ（アタックにより疲労状態）（緑／2（軽減：緑1）／Lv2：BP5000）

コロコーン（緑／3（軽減：緑1）／Lv1：BP4000）

武神鳥バーディ・ケンシン（緑／6（軽減：緑2）／Lv2：BP8000＋3000）

ゴクラクチョー（アタックにより疲労状態）（緑／4（軽減：緑2）／Lv1：BP2000＋3000）

乙の白騎士アルパイン・ビット（緑／4（軽減：緑3）／Lv3：BP12000＋3000）

ネクスス：蟲招く妖花の塔（緑／4（軽減：緑2）／Lv1）  
バースト：なし

「アルパイン・ビットでアタック！アルパイン・ビットの効果、互いのアタックステップで「神速」を持つスピリットがアタックかブロックをしたとき、1ターンに1回だけ、トラッシュにある俺のコアを好きなだけリザーブか緑スピリットに置くことが出来る！コアはすべてリザーブへ!!そしてメインのアタックだ!!」

「ライフで受ける!!」

## 〈第5ターン〉

導／ライフ：3↓2、リザーブ：2↓3、トラッシュユ：1、手札：5

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

ヴェロキ・ハルパー（疲労状態）（赤／1／Lv2：BP3000）

モルゲザウルス（疲労状態）（赤／3（軽減：赤2）／Lv1：BP2000

0）

ネクサス：なし

バースト：なし

## 〈第5ターン〉

ロビン／ライフ：2、リザーブ：1↓5、トラッシュユ：4↓0、手札：2↓1

フィールド

スピリット：ヤクヤナギ（アタックにより疲労状態）（緑／2（軽減：緑1）／Lv2：

BP5000）

コロコーン（緑／3（軽減：緑1）／Lv1：BP4000）

武神鳥バーディ・ケンシン（緑／6（軽減：緑2）／Lv2：BP8000

0+3000）



ゴクラクチョー（アタックにより疲労状態）（緑／4（軽減：緑2）／Lv  
1：BP20000+3000）

乙の白騎士アルパイン・ビット（アタックにより疲労状態）（緑／4（軽減：  
緑3）／Lv3：BP12000+3000）

ネクサス：蟲招く妖花の塔（緑／4（軽減：緑2）／Lv1）  
バースト：なし

「バーデイ・ケンシンでアタック！バーデイ・ケンシンのLv2アタック時効果により、  
神速を持つスピリット2体を回復させる!!よって、ゴクラクチョーとアルパイン・ビッ  
トが回復!!」

「フラッシュタイムングー！マジック「サイレントロック」を使用!!合体ブレイクしていないスピ  
リットのバトル終了時、アタックステップを終了する！バーデイ・ケンシンのアタック  
はライフで受ける!!」

〈第5ターン〉

ロビン／ライフ：2、リザーブ：5、トラッシュ：0、手札：2↓1

フィールド

スピリット：ヤクヤナギ（アタックにより疲労状態）（緑／2（軽減：緑1）／Lv2：  
BP5000）

コロコーン（緑／3（軽減：緑1）／Lv1：BP4000）

武神鳥バーディ・ケンシン（アタックにより疲労状態）（緑／6（軽減：緑2）／Lv2：BP8000+3000）

ゴクラクチョー（バーディ・ケンシンの効果で回復）（緑／4（軽減：緑2）／Lv1：BP2000+3000）

乙の白騎士アルパイン・ビット（バーディ・ケンシンの効果で回復）（緑／4（軽減：緑3）／Lv3：BP12000+3000）

ネクサス：蟲招く妖花の塔（緑／4（軽減：緑2）／Lv1）  
バースト：なし

導／ライフ：2↓1、リザーブ：3↓4↓0、トラッシュユ：1↓5、手札：5↓4  
フィールド

スピリット：ライトブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

ヴェロキ・ハルパー（疲労状態）（赤／1／Lv2：BP3000）

モルゲザウルス（疲労状態）（赤／3（軽減：赤2）／Lv1：BP2000）

ネクサス：なし

バースト：なし

パーティー・ケンシンのアタックが終わった瞬間、地面の下から光の鎖が伸びてきて、口ビンのスピリットたちに巻き付いた。

「どうやら、これ以上アタックすることはできないようだ。」

「ターンエンドだ」

「スタートステップ!コアステップ!ドローステップ!リフレッシュステップ!!」

〈第6ターン〉

導/ライフ：1、リザーブ：0↓6、トラッシュユ：5↓0、手札：4↓5

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤/0/Lv1：BP1000）

ヴェロキ・ハルパー（リフレッシュステップにより回復）（赤/1/Lv2：

BP3000）

モルゲザウルス（リフレッシュステップにより回復）（赤/3（軽減・赤2）

/Lv1：BP2000）

ネクサス：なし

バースト：なし

「メインステップ!ネクサス「光り輝く大銀河」を配置!」

そう宣言した瞬間、導の背後に突如、銀河が出現した。

さらに、導はカギとなるカードを手札から取り出した。

「輝竜シャイン・ブレイザー」を召喚!! 不足コストはヴェロキ・ハルパーより確保」

〈第6ターン〉

導／ライフ：1、リザーブ：6↓4↓1、トラッシュ：0↓2↓5、手札：5↓3

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

ヴェロキ・ハルパー（赤／1／Lv2↓1：BP3000↓1000）

モルゲザウルス（赤／3（軽減：赤2）／Lv1：BP2000）

輝竜シャイン・ブレイザー（赤／5（軽減：赤2青2）／BP5000）

ネクサス：光り輝く大銀河（赤／4（軽減：赤2）／Lv1）

バースト：なし

導のフィールドに、機械の鳥が舞い降りると同時に、ヴェロキハルパーが力なくうなだれた。

——レベルが下がるとこんな反応するんだ……面白いな

と、どこか感心しながら、導はもう一枚、キースピリットを手を取った。

「龍神の弓、天馬の矢！ 戦いの嵐を鎮めよ!!」「光龍騎神サジット・アポロドラゴン」、召

喚!! 不足コストはヴェロキ・ハルパーから確保!!」

導の背後に輝く銀河の星々が、突如、射手座を描いた。

そのシルエツトから炎が吹き上がり、導のフィールドに伸びていくと、炎は上半身が赤い龍となっている人馬となり、降り立った。

〈第6ターン〉

導／ライフ：1、リザーブ：1↓0、トラッシュ：5↓6、手札：3↓2

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

ヴェロキ・ハルパー（赤／1／Lv1：BP1000）

モルゲザウルス（赤／3（軽減：赤2）／Lv1：BP2000）

輝竜シャイン・ブレイザー（赤／5（軽減：赤2青2）／BP5000）

光龍騎神サジツト・アポロドラゴン（赤／8（軽減：赤4）／Lv1：B

P6000）

ネクサス：光り輝く大銀河（赤／4（軽減：赤2）／Lv1）

バースト：なし

「さらに、シャイン・ブレイザーとサジツト・アポロドラゴンを合体！ヴェロキ・ハルパーの残りのコアを使用し、Lv2に!!」

導がそう宣言した瞬間、シャイン・ブレイザーが翼のような形に変形し、サジツト・ア

ポロドラゴンの背後に装着された。

ブレイヴと合体したことにより、サジツト・アポロドラゴンの威圧感がさらに増し、ロピンは思わず残り一枚となった手札を握りしめていた。

〈第6ターン〉

導／ライフ：1、リザーブ：1↓0、トラッシュユ：5↓6、手札：3↓2

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

モルゲザウルス（赤／3（軽減：赤2）／Lv1：BP2000）

光龍騎神サジツト・アポロドラゴン＋輝竜シャイン・ブレイザー（赤／8

＋3（軽減：赤4）／Lv1↓2：BP6000＋5000↓10000＋5000）

ネクスス：光り輝く大銀河（赤／4（軽減：赤2）／Lv1）

バースト：なし

「アタックステップ！合体スピリットでアタック！！サジツト・アポロドラゴンの効果で相手スピリット1体を指定アタック！バーディ・ケンシンを指定アタック！！」

「くっ！バーディ・ケンシン、ブロックだ！！」

バーディ・ケンシンはその矢に胸を貫かれ、爆発してしまった。

本来、スピリットのアタックはライフで受けるかスピリットでブロックすることを選

択できる。

だが、サジツト・アポロドラゴンの持つ指定アタックは、相手スピリット1体を指定し、強制的にバトルするものだ。

条件がない限り、疲労状態のスピリットであつたとしても防ぐことはできない。

導はさらに追い打ちをかけてきた。

「合体しているシャイン・ブレイザーの効果!BP8000以上の相手スピリットを破壊した時、破壊したスピリット1体につき、相手ライフ1つをリザーブに!さらに、フラッシュタイミング!マジック「バーニングサン」を使用!手札のブレイヴ1枚をアポロと名のついた自分スピリットにノーコストで直接合体させ、回復!「トレス・ベルーガ」を合体!!不足コストはライト・ブレイドラより確保!」

バーディ・ケンシンが爆発した背後からサジツト・アポロドラゴンが飛び出してきて、ロビンに向かって炎を浴びせてきた。

当然、実際にやけどを負うことはなかったが、ライフが碎ける衝撃はロビンに襲ってきた。

これにより、ライフは残り一つ。どちらも一步読み間違えれば負けが確定してしま

う。  
導の手札から、青い光がサジツト・アポロドラゴンに伸びていったと同時に、フィー

ルドにいたライトブレイドラが消滅した。

青い光がサジツト・アポロドラゴンに命中すると、サジツト・アポロドラゴンの体に変化した。

身にまとう鎧は金色に輝き、まるで日輪を背負っているかのように背後の翼が輝きを増した。

### 〈第6ターン〉

導／ライフ：1、リザーブ：0、トラツシユ：6↓7、手札：2↓0

フィールド

スピリット：モルゲザウルス（赤／3（軽減：赤2）／Lv1：BP2000）

光龍騎神サジツト・アポロドラゴン＋輝竜シャイン・ブレイザー＋トレス・ベルーガ（赤＋青／8＋3＋5（軽減：赤4）／Lv2：BP10000＋5000＋6000）

ネクサス：光り輝く大銀河（赤／4（軽減：赤2）／Lv1）

バースト：なし

ロビン／ライフ：2↓1、リザーブ：5↓6↓9、トラツシユ：0、手札：1

フィールド

スピリット：ヤクヤナギ（アタックにより疲労状態）（緑／2（軽減：緑1）／Lv2：



BP5000)

コロコーン(緑/3(軽減:緑1)/Lv1:BP4000)

ゴクラクチョー(緑/4(軽減:緑2)/Lv1:BP2000)

乙の白騎士アルパイン・ビット(緑/4(軽減:緑3)/Lv3:BP12000)

ネクスス:蟲招く妖花の塔(緑/4(軽減:緑2)/Lv1)

バースト:なし

「だ、ダブル合体、だと?!」

ロビンは驚きに目を見開いた。

通常、スピリットがブレイヴと合体できる数は1体につき1つだけだ。

だが、光龍騎神サジツト・アポロドラゴンはダブル合体が可能な非常に珍しいスピリットなのだ。

「合体スピリットでアタック!サジツト・アポロドラゴンの効果、アルパイン・ビットを指定アタック!」

「ぐうっ!!ブロックだ!」

ロビンがブロックを宣言した瞬間、アルパイン・ビットを駆る騎士が槍を構え、サジツト・アポロドラゴンに立ち向かっていった。

サジツト・アポロドラゴンも、弓を剣に変形させ、アルパイン・ビットと切り結んだ。だが、合体スピリットであるサジツト・アポロドラゴンのBPは現在21000。対するアルパイン・ビットは12000。

力の差は歴然であったため、アルパイン・ビットはサジツト・アポロドラゴンに切り伏せられてしまった。

そして、BP勝負で相手スピリットを破壊した、ということは、合体スピリットの能力が発揮されるということでもある。

「シャイン・ブレイザーの合体時効果。BP8000以上の相手スピリットを破壊した場合、相手ライフのコア一つを相手のリザーブへ置く」

ロビンのライフは残り一つ。

よって、このアタックでバトルに決着がつくこととなった。

「ありがとうございました、いいバトルでした」

バトルフィールドから戻ってきた導は、ロビンに手を伸ばしながら穏やかな表情でそう語り掛けた。

「が、握手の習慣がない星の出身なのか、それともそういわれたことがロビンは戸惑っていた。」

「地球では、バトルの後はこうやって互いの手を取るのが普通なんだ」  
「そうか……変わった習慣だな」

導にそういわれ、ロビンは戸惑いながらも導の手を握った。

だが、ロビンはすぐにその手を離し、その場から去っていった。

周囲を見れば、ノットレイたちの姿もない。

どうやら、逃げ帰ったようだ。

——さてと、天宮先輩の弟くん、探そうと思ったけど疲れたし、そろそろ見つかって  
るだろうから、帰るとするかな

と心中で呟き、踵を返すと、見覚えのある人影が手を振りながら走ってきていた。

それがひかるとララであることがわかるまでさほど時間はかからなかったが、ひかる  
たちに見つかったことで帰宅するという選択肢が消え去り、導は天宮家のホームパー  
ティーに半ば無理やり招待されることになるのだった。

宇宙アイドル登場！〜プリンセスのペンはオークシヨン  
会場に！〜

その日、導はひかるとララに引きずられて、ララのロケットに乗せられようとしていた。

なんでも、スタープリンセスの力の結晶であり、スタープリンセス自身が姿を変えたアイテム、スターカラーペンが見つかったらしい。

それを一緒に探しに行こう、ということのようだが。

「なんで俺まで同行しなきゃいけないんだ」

「だって、わたしたちに協力してくれるんだよね?!」

「それが頼まれたことだからな」

「だったら行こうよ!!」

どうあつても、ひかるは導を宇宙に連れていきたいらしい。

普段から一人でいることが多いからなのか、それとも、同じ秘密を共有している仲間だからなのかはわからないが、基本的に一人暮らしの導からすれば、休日はやらなければならぬことが多くあるため、誘ってほしくないというのが本心だ。

「……お前は親が家にいるからいいが、俺はいないし、やらなきゃいけないことが大量にあるんだ」

「大丈夫だよ! 今日中に帰ってこれるから!!」

「だから、そういう問題じゃ……」

『導様、あきらめてください。こうなったひかる様はここで譲りません』

「……AI、お前もか……」

AIにまで諭され、導はげんなりした表情になった。

いつもならばAIもさりげなくサポートしてくれるのだが、今回はプリンセススターカラーペンの回収ということもあってか、ひかるの見方をしているようだ。

さすがに分が悪いと感じたのか、導はもうそれ以上の抵抗をやめて、おとなしくついていくことにした。

「はあ……」

「ご、ごめんね? なんか……」

「ほんとつすよ……俺だつてやらなきゃいけないこととかあんのに……」

えれなが苦笑を浮かべながら導に謝罪すると、導は頭を抱えながらぶつぶつと文句を言っていた。

家の手伝いを積極的に行っているためか、それとも実質的に導が一人暮らしをしている

ことを知っているためか、このメンバーの中でえれなが一番同情的であることが、おそらく唯一の救いだろう。

「まあまあ。ひかるなりに導くんを気にかけてるんだと思うよ?」

「二人でいるところを狙われても困るんで、それはそうなんでしょうけど……なんでこう強引なんですかね、あいつ」

「それはひかるだからとしか言えないでプルンス」

やれやれ、といった風にプルンスは首を横に振った。

もはやここにいるメンバーの中で、ひかるのあの強引さを止めることができる人間はいないらしい。

そう感じた時、導はさらに深いため息をつくのだった。

そんなこんなうちに、ロケットは地球を離脱し、太陽系を離れ、他の銀河系の星に到着した。

眼下に広がるその光景は、まるでラスベガスの夜景を思わせるような光景だった。

「キラヤバ〜ッ!」

「へえ……ラスベガスとか函館山の夜景みたいな町だな」

「導はどもかく、ひかるは少し暢気すぎルン」

「ララの言う通りでプルンス!ここゼニー星は星空連合に所属していない、お金だけがものをいう無法地帯!気を引き締めていくでプルンス」

星空連合とは、宇宙にある文明の進んだ惑星で成り立つ国際連合のような組織のことで、宇宙の平和と均衡を保つため、日々活動している。

というのがプルンスの説明だった。

だが、ここゼニー星はその連合に加盟していないため、ゼニー星独自のルールが幅を利かせているらしい。

「国際ルールが関係ない国みたいな感じかな?」

「おそらくは……あら?この歌は?」

そんな話をしながらロケットを降りると、不意に、ひかるたちの耳に可愛らしい歌声が響いてきた。

歌が聞こえる方へ視線を向けると、そこには桃色の髪をした女の子の映像が流れていた。

「あれは……」

「マオたんでプルンス!!」

突然、プルンスが興奮した様子で叫んだ。

気を引き締めて、という言葉はどこへやら。という感想を一行が抱いたことは言うま

でもない。

こんな状態で大丈夫なのだろうか、と思いながら、導はララに問いかけた。

「アイドルか何かか？」

『『宇宙アイドルマオ』。彗星のように現れ、出した歌は天文学的ヒットをたたき出す、ナンバーワンアイドルン』

「宇宙にもアイドルっているんだ!？」

「驚くところそこなのか？」

ひかると導が漫才のようなやり取りをしている一方で、えれなとまどかはペンダントの反応を追いかけて、向かうべき方向を確認していた。

すると、ある方向に強い反応が出てきた。

「あっちみたいだね」

「ええ……みなさん、行きましょう!」

まどかの呼びかけで、全員が移動を始めた。

ペンダントの反応を追いかけて歩いていくと、一行は通り過ぎた建物の中でも一層きらびやかな建物に到着した。

どうやら、オークション会場らしい。

「……まさか、競売にかけられてるってオチか？」



「競売?」

「一つのものに対して、最低限の価格をつける。大人数がそれ以上の価格を言い合って、最後に価格を言った人間がその価格で物を買ってシステム」

「それをオークションと呼び、それを行う会場をオークション会場と言うのです」

「意外。まどか詳しいね」

「父に時折、連れてきてもらっていましたので」

だが、仮にプリンセススターカラーペンがオークションにかけられているのだとしたら、非常に厄介だ。

正攻法で行くとしても、オークションに勝利する必要があるし、かといって、あちらもこれが商売である以上、頼み込んで譲ってもらおう、などという方法は考えられない。

どうしたものか、と考えている導をよそに、ひかるは一人、オークション会場の入り口に突撃を仕掛けた。

「怪しい方のご入場はお断りしております」

だが、あっけなく入り口で門前払いを食らってしまった。

「いや、当然だろ……こういう大きな金額が動く場所はしっかり身元が確認できる人間でないと入場できないってのが相場が決まってるんだよ」

「そんな……」

「フワア……」

呆れた表情を浮かべながら、導はひかるに説明した。

その説明を高笑いしながら、その通り、と賛同する声が背後から聞こえてきた。

「ここに入れるのは、僕のような超！セレブだけさ!!」

「いらつしやいませ、ドラムス様」

声が出た方へ視線を向けると、地球の幻想生物『ドラゴン』を二足歩行させたような姿の異星人がいた。

入口に立っていた警備員の態度を見るに、かなり有名な人物のようだ。

「悪く思わないでくれよ？今日は特に警戒が厳重なんだ」

「……テロ予告かなにかあったので？」

「いいや、テロなんて物騒なものじゃない。怪盗さ」

「怪盗？」

ドラムスからその言葉を聞いた瞬間、地球人四人はかの有名な怪盗『アルサーヌ・ルパン』のように黒マントとシルクハット姿の人物が頭に浮かんだ。

が、異星人であるララは違ったらしい。

「怪盗……まさか、ブルーキャットルン?!」

「ブルーキャット？」

「狙った獲物は必ず盗み出す、宇宙怪盗ルニー」

アイドルに続いて怪盗までも宇宙に存在するらしい。

カードバトラーが存在している時点で、もしかしたらとは思っていたが、まさか本当にいるとは思わなかったため、頭痛を覚えたように頭を抱えていた。

「さ、行こうか。マオ」

「ニヤン」

そんな様子の導は放置して、ドラムスは乗ってきたリムジンに乗っている人物に声をかけた。

すると、リムジンから一人の少女が降りてきた。

その少女は、今まさに町で流れている映像の少女だった。

「ま、ま、ま……マオたん?！」

まさかの人物の登場に一番驚いていたのはブルンスだった。

どうやら、オークションを盛り上げるためにドラムスが自身のポケットマネーで招待したらしい。

いったいどれだけの金をつぎ込んだのやら、と感想を抱きながら、導はマオに視線を向けた。

「よろしくニヤン♪」

「…………どうも」

「ところで、そのあなたはマオのファンかニヤン？」

マオも導に視線を向けていたらしく、自然と目が合った。

笑顔で声をかけるマオに対して、人間不信のためか昨日、今日出会った他人に合いそうよく振舞えない導は無愛想に返した。

それに気分を害することなく、さきほどからキラキラした視線を向けてきているプルンスに気付いたのか、マオが問いかけると、プルンスは完全に語彙力を喪失してしまつたらしく、普段は青いその顔を赤くして高速でうなずいていた。

「なら、ドラムスさん。この子たちも入れてあげてニヤン」

「おいおい、いくら君の頼みでもそれはさすがに」

「マオにとつて、ファンは友達と同じニヤン。お願いニヤン」

さすがに、マオのお願いでもオークシヨン会場にひかるたちを入れることはできない。  
い。

そう断ろうとしたが、マオからの再度のお願いに、ドラムスは折れた。

「…………か、かわいい…………オーケーー！」

「ありがとうニヤン♪」

「…………あざとい…………」

あつさりと折れたドラムスもそうだが、ドラムスを折らせたマオの頼み方にそんな感想を抱いたのは導だけではなかったが、もはや信者と言っても過言ではないような熱狂ぶりのプルンスだけは、さすが、と感銘していた。

だが導たちは気づかなかった。

誰の視界にも入らないよう、マオが怪しげな笑みを浮かべていたことなど。

宇宙怪盗ブルーキャット、参上！〜宇宙アイドルは仮の姿、しかしてその実態は!!〜

オークション会場に入ったのはいいが、通常、こういった場所ではフォーマルドレスを着用することになっている。

が、一着もそういった用途の服を用意していなかったひかるたちのために、マオが自分のフォーマルドレスを貸し出してくれた。

「キラヤバーツ！」

「すごい数ルン……」

「お借りしてもよろしいのでしょうか？」

「全部マオのだから、気にすることはないニヤン♪」

女性更衣室に通されたひかるたちは、マオが用意してくれたドレスの数々に目を丸くしていた。

どれを借りても構わない、と話すマオの腕の中には、マオが安心できる人間と判断したためか、フワがすっぽりと収まっていた。

「マオ、いい匂いフワ」

「ふふふ♪それじゃ、楽しんでいってニヤン♪」

着替えが終わったひかるたちにフワを返し、マオは外へと出た。

ひかるたちも会場の方へ向かうため部屋を出ると、会場の前にはタキシードを着た見覚えのある後姿があった。

言わずもがな、導だ。

どうやら、ドラムスがタキシードを貸してくれたらしい。

「おつまたせー!」

「導、カツコイイルン!」

「へえ、似合ってるね」

「ええ。一瞬、見間違えましたわ」

「おほめの言葉どうも」

四人から褒められはしたが、まだ心を開ききっていないためか、そつけない態度で返した。

そのことにプルンスから文句が飛び出しそうになっていたが、ひかるになだめられ、追及はしてこなかった。

オークションの開始時間が迫っていることもあり、ひかるたちはオークション会場に早足で入っていった。

「紳士、淑女の皆様。本日はお集まりいただき、まことにありがとうございます！」  
オークション会場に入り席に座ると、どうやら開始の時間になったらしく、視界と思しき異星人がマイクを片手に会場に集まった客人にそう挨拶をしてきた。

「まずは皆様に余興をお楽しみいただきましょう！皆様ご存じの宇宙アイドル！」  
「マオだにゃ〜ん♪」

ステージの中央にマオが姿を現すと同時に、彼女の定番ソングが流れ始めた。

「好きよ、嫌いよ？どっちなのよ〜♪」

ここに来るまでの間に流れていたものと全く同じ歌がオークション会場に響いてきた。

その演出もさることながら、マオの歌声にテンションが上がり、フワも一緒になって歌い始めた。

一方で、プルンスはどこか遠いまなざしをしていた。

それに気づいた導がどうしたのか問いかけると、プルンスは自分が初めてマオの曲を聞いた時のことを話してくれた。

「プルンスは、プリンセスたちからフワを託され、ノットレイダーから逃げている間中、何度もくじけそうになってでプルンス……でも、マオさんの歌に力をもらって頑張ろうって気になれたんでプルンスよ」



「ずいぶん、過酷だったんだな」

「それはもう、聞くも涙語るも涙の……」

と言いかけたところで、マオのステージは終了。

いよいよ本番であるオークションへと移った。

語られると長くなりそうだったので、正直助かったという感想を抱いた導は、オークションに出される品物に注目した。

「まずはこの品！いきなりの大物、惑星レインボーのネックレスでございます!!」

司会の紹介と同時に、先ほどまでマオがステージライブを行っていた会場中央に、虹色に輝く宝石が埋め込まれたネックレスが登場した。

その美しさに、会場の全員が見惚れていた。

ひかるもその一人だったが、導とまどかは惑星レインボーについて気になったらしく、プルンスとララに惑星レインボーについて問いかけていた。

「惑星レインボーって?」

「レインボーは滅びた惑星でプルンス。星空連合に加盟していなかったから詳しくはわからないでプルンスが」

「調査報告だと、惑星の住民すべてが石になっていたらしいルン」

「住民すべてが石に……」

「原因は不明でプルンスが、レインボーの貴重な宝石がいくつもほかの星に巡回していると報告されているでプルンスが……まさかここでお目にかかるとは思わなかったでプルンス」

そんな話をしている間に、ネックレスは五百万キランという値段でオークションが始まった。

なお『キラン』とは宇宙共通の貨幣単位であり、その通貨価値は日本円とほぼ同等だ。つまり、日本円に換算して五百万円からのスタートということになる。

が、開始早々。

「一億キラン」

ドラムスが一億という金額を宣言した。

いきなり二十倍に跳ね上がったことに驚愕するひかるたちは、いったいどれだけの資金を持っているんだ、と思ったことは言うまでもない。

その後も、ドランは次々と品物を落札していき、いよいよ、本日の目玉が出品された。

「本日の目玉商品。本日最後にして最高のお品物！『プリンセスの力』!!」

「『プリンセススターカラーペン』?!?!」

「うわぁ……最悪の展開だ……」

「プ、プリンセスの力をお金で競り落とそうなどと!!不敬にもほどがあるでプルンス!!」

そこに現れたのは、明らかにひかるたちが回収しているアイテム、プリンセススターカラーペンだった。

オークション会場に反応があるということは、こういうこともあり得ると思っていた導は、まさに最悪の展開になったことに頭を抱え、プルンスは敬愛するプリンセスの力がこのような形で売り払われることに対して怒りを覚えていた。

「ど、どうしよう?!」

「どうするって、買ったたくしかないだろ」

「け、けどお金なんて……」

「……こうなったら!わたし全財産で!!」

と叫ぶひかるだったが、導がそれに待ったをかけた。

「中学生の小遣い程度でオークションで戦えるわけないだろ?さっきから見えてわからないのか?!」

「そんなのやってみなきゃ……」

「万や億どころか下手すると兆単位の金が動くんだぞ?!お前の財布の中にはどれだけ入ってるんだよ?!」

「うぐっ!」

「で、でもどうすれば……」

今すぐ億単位の資金を集めることなど、できるはずもない。

かといって、このままプリンセススターカラーペンをほかの誰かの手に渡してしまうなんて選択肢もナンセンスだ。

こんなとき、所有者が個人であればバトスピで譲ってもらうこともできるのだろうが、戦いの舞台はバトルフィールドではなくオークション会場。

行われているのはバトスピではなく、オークションだ。

さすがに、分が悪い。

誰もがそう思ったが、ここでまどかが口を開いた。

「……プルンス。お願いがあります。あなたが作ったドーナツ、使わせていただけませんか?」

「え?」

突然の提案にプルンスは困惑したが、まどかの考えに乗ることにした。

そうこうしているうちに、ドラムスが9億という値段で競り落としかかり、それ以上の値段が出てこなかったため、ドラムスに落札が決まろうとしたその時だった。

「お待ちください! ドーナツ、おひとつで」

まどかが待ったをかけた。

どうやら、まどかの考えとは、自分たちの手元にあるものを使うことだったようだ。

その中で価値が最もわかりやすい食べ物、ドーナツを使うことにしたらしい。

当然、宇宙ではあまりスイーツであるため、説明が求められた。

「これは、わたくしの星『地球』で大変価値のあるスイーツです。こちらと交換で、いかがでしょうか?」

当然、周囲は何を言っているのかわからず、中には侮蔑の笑みを浮かべるものもいた。だが、その笑みに屈することなく、まどかは力説した。

「初めてこれを食べた時、わたくしはとても感銘しました。それこそ、今日初めて聞いたマオさんのステージと同じように!であれば、文化や星の垣根を越えて、このスイーツの価値を皆様にもお分かりただけか!」

随分と強引ではあるが、資金が手元がない以上、自分たちは物々交換をおこなうがいかに手段がないことは重々承知していた。

ゆえに、いつもまどかには批判的な導もこの時ばかりは何も言わずに成り行きを見守っていた。

「物は試しです」

「おひとつ、いかがでプルンス?」

「……そこまで言うのならわたくしが」

まどかの力説に押されたのか、美食評論家を名乗るマダム、シタコ・エーテルがドー

ナツに手を伸ばした。

「もつとも、わたくしの知らない料理がおいしいはずが……」

と文句を言いながら、ドーナツを口に運んだ。

すると、その表情は一変した。

「……っ?!?!う、うまー……っ?!?!」

「さあ、お味はいかがですか?」

「この食感、この甘味……どれも素晴らしい!!これは、一個十億キランの価値がありますわ!!」

「ほお、面白い!ならば十一億!」

宇宙のあらゆる美食を食べつくしたと評判の宇宙美食評論家の太鼓判のおかげか、ここでドラムスが乗ってきた。

オークションはまだかとドラムス、どちらが競り落とすかの勝負となっていた。

その価格はとうとう、五十億キラン。ドーナツ五つとなっていた。

もうこれ以上はドーナツがない。

だが、まだかかまるでそれを隠すように余裕の笑みを浮かべていた。

——くっ、い、いったいどれだけの資産を持っているというんだ?!

まだかの笑みに、ドラムスは危機感を覚えた。

さすがにこれ以上は自分も出すことができない。

ここは、意地を張るよりも目の前の相手を立てて、カッコよさをアピールしつつ退く方が賢明と判断したようぞ。

「……ふ、僕としたことが熱くなりすぎて忘れていたよ。ドラゴン家のモットーは『常にレディーファースト』!ここは貴女にお譲りしよう!!」

その宣言は、ドラムスが勝負を降りたということにほかならない。  
すなわち。

「な、な、なんと?!地球のお嬢さんが五十億キランで落札!!」

まどかの勝利である。

どうにか勝負に勝てたことに安堵する一行だったが、ふと会場を見た瞬間、導は目を見開き叫んだ。

『プリンセスの力』がない?!

「ふふふつ、『スタープリンセスの力』、確かにもらいうけるわ!」

突如、会場の天井あたりから声が響いてきた。

そちらに目を向けると、青いシルクハットにサングラスをかけた猫耳の少女がプリンセススターカラーペンを手にしている姿があった。

「あ、あれは?!」

「怪盗ブルーキャットルン!!」

その少女こそ、今回、オークション会場に予告状を出した宇宙怪盗、怪盗ブルーキャットだった。

獲物を手に入れたブルーキャットは煙幕で視界をくらませ、その場から逃げ去っていった。

「ぶ、プリンセススターカラーペンがっ!!」

「ど、どうするルン?!」

「ペンダントの反応を追いかければいいだろ!」

「あ、そっか!!」

導の言葉に、困惑していたひかるとララは冷静さを取り戻し、ペンダントの反応を追いかけて、会場の外へ出て、屋根に上った。

そこには、避難してきたのだろうか、コートを着たマオが町を見下ろしながらたたずんでいた。

「あ、マオたんでプルンス!」

「マオさん、宇宙怪盗を見ませんでした?!」

「宇宙怪盗? ここには誰も来てないニヤン」

ひかるの質問に、マオは淡々と返してきたが、まどかは自分が持っているペンダント



をマオに向けた。

その瞬間、プリンセススターカラーペンの力を感知した時と同じ反応があった。

それが意味することが何か、それを察することができないほど、ひかるもプルンスも鈍くはなかった。

「ま、まさか……」

「う、?でプルンスよね?何かの冗談でプルンスよね?!」

「……ふくん?意外と高性能なのね、そのレーダー」

何かの間違いであってほしいと言いたそうな声色で、プルンスがマオにそう問いかけた。

が、返ってきた答えは残酷なものだった。

「そう、みんなが大好きな宇宙アイドルは仮の姿……その実態は!!」

マオは着ていたコートをつかみ、翻し、コートの影に隠れた。

翻ったコートがマオの手を離れ、上空に投げ捨てられると、コートの影からマオとはまったくの別人が姿を現した。

「宇宙をまたにかける宇宙怪盗!ブルーキャット!!」

それは確かに、オークション会場からプリンセススターカラーペンを盗み出した張本人。

宇宙怪盗ブルーキャットだった。

# 大混戦!プリンセススターカラーペンを取り返せ!!

「宇宙をまたにかける宇宙怪盗、ブルーキャット!」

宇宙一のアイドル、マオの正体は、宇宙をまたにかける怪盗、ブルーキャットだった。その事実を知ったブルンスはショックのあまり固まってしまった。

当然、ひかるたちも驚きのあまり呆然としていたが、まどかと導は冷静だった。

「ふふふ、だましたみたいでごめんなさいね?」

「怪盗つてのは人をだますもんだろ?ならなんで謝罪する」

「ふふふ、怪盗のお茶目というところかしら?さて……わたしはこれでとんずら」

「させると思うか?」

呆然としているひかるとララ、どう動くべきか機会をうかがっていたまどかとえれなをよそに、ブルーキャットの言葉に導はそう返しながら、デッキから「宝瓶星鎧ブレイヴアクエリアス」を引き抜いた。

すると、ブレイヴアクエリアスが白い光を放ち、導を包み込んだ。

光がおさまると、今まで何度か見てきた赤い鎧ではなく、肩の部分がえらく大きい白い鎧を纏った導の姿があった。

「すまないが、そのペンは返してもらおうぞ」

「できるかしらっ？」

「やるさ。それが俺の仕事だ」

ブルーキャットが挑発するように問いかけるが、導はまったく感情を動かさずに答えた。

その手には、白のマジックが握られていた。

どうやら、一瞬で勝負をかけるつもりのようなのだ。

ブルーキャットもそれがわかるらしく、何もアクションを起こさなまま、導に視線を向けたままだった。

だが、足元から突然、スポットライトがブルーキャットを照らした瞬間、導は動いた。

「マジック『サイレントロック……』」

『バケニヤーンがないから、ダークペン使い放題だっつーの！やっちゃえっつーの、ノットリガー!!』

手にしたマジック『サイレントロック』を使おうとした瞬間、突如、上空から一昔前の女子高生が使うような口調で叫ぶ声が聞こえてきた。

見上げると、そこにはサイクロプスのような一つ目の少女が見覚えのある服を着たドラゴンに乗っている姿があった。

「アイワーン?!」

「ノットレイダーも来ていたルン?!」

「どうやら、彼女も河童や天狗と同じ、ノットレイダーの仲間のようなだ。」

「河童と天狗に続いて、今度は一つ目小僧か?……いや、ただ妖怪っぽい連中がいるんだよ」

導はそんな感想を口にしながら、『サイレントロック』のカードをしまい、今装着しているブレイヴを解除し、別のカードを二枚引き抜いた。

それと同時に、ひかるたちもペンダントとペンを取り出した。

「二」スターカラーペンダント!煌めく、星の力で!!憧れの”わたし”描くよ!!トウインクル、トウインクル、プリキュア!トウインクル、トウインクル、プリキュア!スター☆トウインクル……スター☆トウインクルプリキュア!♪「二」

ひかるたちがペンをペンダントに差し込むと、ひかるたちの服がそれぞれの色のワンピースへと変わった。

さらに、ペンを引き抜き、ペンダントにたまっていた光のインクで自分たちのコスチュームを描いていき、初めて出会ったときと同じコスチュームへと変身した。

「宇宙に輝く、きらきら星!キュアスター!」

「天にあまねく、ミルキーウェイ!キュアミルキー!」

「宇宙を照らす、灼熱の煌き！キュアソレイユ！」

「夜空に輝く、神秘の月明かり！キュアセレーネ！」

「「スタートウインクル！プリキュア!!」」

スターたちが変身を終わると同時に、導は引き抜いた二枚のカードの内の一枚、『射手星鎧ブレイヴサジタリアス』を掲げた。

その瞬間、カードは赤い光を放ち、導を包み込んだ。

光がおさまると、赤い鎧をまとった導がそこにいた。

プリキュアのものとはまた違う変身に、ブルーキャットは興味深そうにしていたが、それどころではない。

「プリンセスの力！超越すっつーの!!」

『『デルタバリア』!!』

突然、ひかるたちからアイワーンと呼ばれた少女がそう叫びながらドラゴンと一緒に突撃していた。

だが、導が手にしたカードをかざした瞬間、巨大な光の三角形の壁が出現し、ドラゴンの前に立ちちはだかった。

「会場の人たちを避難させろ！」

「えっ?!」

「で、でもブルーキャットはどうするルン?!」

「それに導くん一人でノットトリガーを相手にするつもり?!」

「いくらなんでも無茶です!!」

スターたちが口々にそう告げてきた。

だが、導は強い口調で彼女たちに背を向けたまま反論した。

「無関係の人たちを巻き込んでまで手に入れなきゃいけないのか?!」

たしかに、いま襲われている会場にいる人々は、自分たちとは関係ない人々であり、巻き込むことは道理に反している。

けれど、だからといってこのままプリンセススターカラーペンを奪われてしまうのも納得がいかない。

いったいどうすればいいのか、スターたちが迷っている中、導だけはノットトリガーを相手取りながら、逃げ惑う人々を安全な方向へと誘導していた。

だが、さきほどから使用しているマジックはすべて防御に使用するもので、攻撃に転じることが出来ずにいた。

周囲にいる人々を巻き込まないためなのだろうが、このままではギリ貧になることは目に見えていた。

「ブルーキャットはわたくしが! みなさんは導くんの援護と会場の方々の避難誘導を

!!

そんな中で先に動いたのはセレーネだった。

セレーネの指示を受けて、スターたちはノットリガーの方へ向かっていった。

残るセレーネは、ブルーキャットと向かい合っていた。

「あなた一人でどうするのかしら？」

「たとえわたくし一人でも、貴女からプリンセススターカラーペンを取り戻します！」

セレーネは真つ直ぐにブルーキャットを見ながらそう返した。

向かい合う二人はどちらからとなく動き出した。

アクロバティックな動きをするブルーキャットに、セレーネは翻弄されながらもしつ

こく食らいついていた。

いい加減、しつこいと感じたのか、ブルーキャットはオークション会場の天井にぶら

下がりながら、着地したセレーネに問いかけた。

「意外としぶといわね……」

「返していただくまで、いくらでも追いかけていただきます!!」

さながら、アルセーヌ・ルパンとガニマール警部、あるいは、その孫と銭形平次の子

孫か。

しばらくの間、二人の追いかけっこは続いていた。



だが、ノットリガーが会場に突っ込んできたことで、状況は一変した。

オークション会場を破壊するように暴れ回るだけでなく、会場に残されていた競売品まで盗みだそうとしていた。

それだけならばまだいいかもしれないが、逃げ遅れたオークション客に襲いかかろうとまでしていた。

さすがにこの状況を見かねたのか、ブルーキャットはプリンセススターカラーペンをセレーネに向かって投げた。

「あなたに預けておくわ!だからはやくあいつを何とかしなさい!」

「な、なんとかかって!!そんな勝手な!!」

いきなり何とかしろと言われても困るため、文句は出てくるが、あまり長い間討論している場合ではないため、セレーネは受け取ったプリンセススターカラーペンをペンダントに差し込んだ。

「プリキュア!射手座!セレーネアロー!!」

射手座のスタープリンセスの力を宿した光が矢となり、ノットリガーにむかっていた。その矢の形状からはわからないが、かなり高密度のエネルギーがこめられていたらし

く、セレーネが放った矢はノットリガーを吹き飛ばし、地面にたたきつけてしまった。

「セレーネ！」

「ペンを取り返したルン?!」

「やったね！」

「はい！みなさん、今のうちに!!」

スターたちと合流したセレーネの言葉にうなずき、スターたちはペンダントに手をかざした。

「そら宇宙に輝け！イマジネーションの力！トウインクルステッキ!!」

「スタートウインクル！」

「ミルキートウインクル！」

「ソレイユトウインクル！」

「セレーネトウインクル！」

「二「四つの輝きを、いま、一つに！プリキュア！サザンクロス・ショット!!」

四人のイマジネーションの光が南十字星を思わせる形へと変わり、ノットリガーへとむかつていった。

十字星の光に飲み込まれたノットリガーは、イマジネーションの歪みが戻り、素体となったドラムスに戻っていった。

その後、フワの力でプリンセススターカラーペンを使い、射手座のスタープリンセスをよみがえらせてから地球に戻るため、再びロケットに乗ったのだが。

「……やたら食うな、プルンス」

「当たり前でプルンス!こうなったら、もうやけ食いでプルンス!!」

憧れの宇宙アイドルの正体が、宇宙怪盗ブルーキャットであったことがショックだったのか、プルンスはマオに差し入れするといって作っていたドーナツをバクバクと食べていた。

だが、一人で食べきれないことはわかっていたようで、ひかるたちにも応援を要請していた。

「……なにやってんだか……」

その様子を部屋の隅で眺めながら、導は呆れたようにため息をついていた。

そんな導の脳裏には、ブルーキャットがなぜスタープリンセスの力を求めているのか、そして、まるでひかるたちがプリンセススターカラーペンを集めていることを知っていたのか。

そんな疑問が渦巻いていた。

## 導とひかる、初めてのバトル!!

射手座のスタープリンセスを復活させてから数日。

いつもと変わらず、導は一人で静かにゆったりと過ごしていた、はずだった。

いつの間にかひかるとララ、そしてえれなとまどかが導のいる場所に集まっていた。

ひかるにもララにも、どこにいるか教えていないはずなのに、なぜあつまり見つけることができるのか。

その謎に、導は頭を抱えていた。

そんな導の様子など知ったことではないというように、ひかるたちは楽し気に会話を繰り広げていた。

「あ、そうだ導くん！」

「……なんだ？」

「わたしと一回、バトスピしない?！」

「……本気で相手になるけど、いいか?」

突然、ひかるからバトルの申し込みがあったのだ。

仮にも、シヨップ大会どころか全国大会の予選で上位に食い込むほどの実力を持って

いる導に、無謀にも素人が挑もうというのだ。

普段ならばしないことだが、日頃のストレスもあるのか、導はひかるに本気で戦うことを宣言していた。

だが、天狗になり始めていることもあるのか、それとも本気でぶつかること導の本音を知ることができると思っているのか、ひかるはかまわないと言ってきた。

「当然！やるからには全力でしょ！」

「言ったな？なら覚悟しとけ」

その言葉を口にした瞬間、導のまとう雰囲気が変わった。

プリキュアとして戦ってきた経験からか、その雰囲気が圧倒的強者のものであることを察するまで、さほどかからなかった。

思わず、成り行きを見守っていたララたちは唾をのみこんでいた。

放課後になり、ひかるたちはララのロケットにいた。

テーブルではすでに、導とひかるがデッキとコアを取り出し、バトルの準備をしていた。

その様子を、えれなとまどかは興味深そうに眺めていた。

「どっちにするかは星奈が決める」

「いいの?」

「ハンデだ」

本来、バトルスピリッツの先攻後攻はコイントスやじゃんけんなど、わかりやすい方法でプレイヤーのどちらかが選ぶことになる。

だが、大会に何度も出場し、その度にある程度の成績を修めている導に対し、ひかるはつい先日バトスピを始めればかりだ。

実力差は明らかであるため、せめてものハンデ、ということなのだろう。

「それじゃ遠慮なく!後攻をもらおうよ!!」

「なら、俺から進めさせてもらおう」

先攻を譲られた導はスタートステップを宣言し、デッキからカードを引いた。

さらに、ヴェロキ・ハルパーをLv1、レイニードルをLv2で召喚し、ターンを終了した。

〈第1ターン〉

導／ライフ：5、リザーブ：4↓0、トラッシュ：0↓1、手札：4↓5↓3

フィールド

スピリット：ヴェロキ・ハルパー（赤／1／Lv1：BP1000）

レイニードル（赤／1（軽減：赤1）／Lv2：BP3000）

ネクサス：なし

バースト：なし

第2ターンになり、ひかるはコアステップ、ドローステップに続き、メインステップに入った。

「メインステップ!」「ライト・ブレイドラ」、「戦竜エルギニアス」をそれぞれLv1で召喚。ネクサス「炎の楽園」をLv1で配置してターンエンドだよ」

〈第2ターン〉

2 ひかる／ライフ：5、リザーブ：4↓5↓1、トラッシュ：0↓2、手札：4↓5↓

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

ネクサス：炎の楽園（赤／4（軽減：赤2）／Lv1）

バースト：なし

第3ターンで導はキツネービを1体召喚しターンを終了。

続く第4ターン、ひかるはネクサス「炎の楽園」とライト・ブレイドラをLv2に上げ、もう一体の戦竜エルギニアスを召喚してターンを終わらせた。

「お二人とも、先ほどからカードを出すだけですわね」

「決定打になるものがないから、なのかな？」

「コストの高いスピリットを召喚するなら、フィールドになるべくスピリットを並べた方が有利ルン。だから今は、二人とも場を整えることに集中してるルン」

静かに進む戦況に、えれなとララがそんな予測を立てた。

少なくとも、まだ仕掛ける時ではないと二人が判断していると感じているのは確かかなようだ。

そして、バトルは第5ターンに突入した。

〈第5ターン〉

ひかる／ライフ：5、リザーブ：1↓4↓0、トラッシュ：2↓0、手札：2↓3↓

2

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000↓Lv2：BP2000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

ネクサス：炎の楽園（赤／4（軽減：赤2）／Lv1↓2）



バースト：なし

導／ライフ：5、リザーブ：0↓2、トラッシュユ：1↓0、手札：3↓4  
 フィールド

スピリット：ヴェロキ・ハルパー（赤／1／Lv1：BP1000）

レイニードル（赤／1（軽減：赤1）／Lv2：BP3000）

キツネービ（紫／1／Lv1：BP1000）

ネクサス：なし

バースト：なし

「メインステツプ！レイニードルをLv1に下げ、ネクサス「闇の聖剣」を配置！ターン  
 エンドだ」

「「闇の聖剣」？なんかかっこいいかも！」

「そう言ってくれるのも今の内だ」

〈第5ターン〉

導／ライフ：5、リザーブ：2↓0、トラッシュユ：0↓3、手札：4↓3

フィールド

スピリット：ヴェロキ・ハルパー（赤／1／Lv1：BP1000）

レイニードル（赤／1（軽減：赤1）／Lv2：BP3000↓Lv1：B

P1000)

キツネービ(紫/1/Lv1:BP1000)

ネクサス:闇の聖剣(紫/4(軽減:紫2)/Lv1)

バースト:なし

新たなカードの登場に目を輝かせているひかるに対して、導は冷たい笑みを浮かべながらそう告げた。

だが、ひかるがその意味を理解するまで、まだ時間が必要となる。

一体、どのような能力が秘められているのか、気になって仕方のないひかるだったが、自分のターンが回ってきたため、聞くことはなかった。

〈第6ターン〉

ひかる/ライフ:5、リザーブ:0↓1、トラッシュ:0、手札:2↓4

フィールド

スピリット:ライト・ブレイドラ(赤/0/Lv1:BP1000↓Lv2:BP2000)

戦竜エルギニアス(青/1(軽減:赤・青1)/Lv1:BP1000)

戦竜エルギニアス(青/1(軽減:赤・青1)/Lv1:BP1000)

ネクサス:炎の楽園(赤/4(軽減:赤2)/Lv2)

バースト：なし

第6ターンに入り、ひかるはネクサス「炎の楽園」Lv2の効果でドローステップでドロールできるカードが一枚追加されたことで、二枚のカードを引いた。

その中に目当てのカードはなかったのか、それとも手札に来たがまだ召喚できないような状況ではないのか、何もせずにターンを終了させた。

続く第7ターン、ここで導が動きを見せた。

「メインステップ、ヴェロキ・ハルパーとレイニードル、「闇の聖剣」をLv2にアップ！」

〈第7ターン〉

導／ライフ：5、リザーブ：0↓4↓0、トラッシュユ：3↓0、手札：3↓4

フィールド

スピリット：ヴェロキ・ハルパー（赤／1／Lv1：BP1000↓Lv2：BP3000）

レイニードル（赤／1（軽減：赤1）／Lv1：BP1000↓Lv2：BP3000）

キツネービ（紫／1／Lv1：BP1000）

ネクサス：闇の聖剣（紫／4（軽減：紫2）／Lv1↓Lv2）

バースト：なし

「続けてアタックステップ！ヴェロキ・ハルパーでアタック！」

「ライフで受けるよ！」

最初のアタックは導が仕掛けてきた。

ひかるは、ヴェロキ・ハルパーのアタックをライフで受けたことで、Lv2の効果が発動。

導はデッキからカードを一枚ドロウした。

〈第7ターン〉

導／ライフ：5、リザーブ：0、トラッシュ：0、手札：4↓5

フィールド

スピリット：ヴェロキ・ハルパー（アタックにより疲労）（赤／1／Lv2：BP3000）  
00）

レイニードル（赤／1（軽減：赤1）／Lv2：BP3000）

キツネビ（紫／1／Lv1：BP1000）

ネクサス：闇の聖剣（紫／4（軽減：紫2）／Lv2）

バースト：なし

ひかる／ライフ：5↓4、リザーブ：1↓2、トラッシュ：0、手札：4

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv2：BP2000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

ネクサス：炎の楽園（赤／4（軽減：赤2）／Lv2）

バースト：なし

「先に動いたのは導の方でプルンスな」

「ひかる、ライフを減らしちゃっても大丈夫なの？」

「最低でも一つ残れば問題ないのでは？」

「その通りルン。ライフを削ることも戦略だつて導は言つてたルン」

ライフはバトルが始まる前に五つ用意される。

最低でも一つ残れば、バトルを続けることはできるし、大逆転劇を生むことが可能となることもある。

何より、ライフは砕けてもコアとしてリザーブに残るため、より早く、新たな戦力を出すことが出来るようになる。

最初に導からバトルスピリッツを教えてもらつてから、ひかるとララは何度かバトルしてきたためか、そのあたりがわかるようになったらしい。

「ターンエンドだ」

そんなギャラリーをよそに、導はターン終了を宣言し、ひかるにターンを渡した。

そして第8ターンとなり、ひかるもようやく動きを見せた。

「メインステップ！」「砲竜バル・ガンナー」を召喚！そして、導くんからもらったカード！「星雲竜アンドロメダ・ドラゴン」をLv1で召喚！足りない分は、「炎の楽園」とライト・ブレイドドラから使うよ！」

〈第8ターン〉

ひかる／ライフ：4、リザーブ：2↓3↓0、トラッシュユ：0↓2↓5、手札：4↓

6↓4

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドドラ（赤／0／Lv2：BP2000↓Lv1：BP1

000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

砲竜バル・ガンナー（赤／4（軽減：赤2）／BP4000）

星雲竜アンドロメダ・ドラゴン（赤／6（軽減：赤3）／Lv1：BP5

000）

ネクサス：炎の楽園（赤／4（軽減：赤2）／Lv2↓Lv1）

バースト：なし

「大型スピリットを出してきたな」

「さらに、アンドロメダ・ドラゴンの召喚時効果でレイニードルを破壊するよ!!」

星雲竜アンドロメダ・ドラゴンは、その召喚時、BP6000以下の相手スピリット1体を破壊する能力を持っている。

ここにライト・ブレイドラとアンドロメダ・ドラゴン自身の『強化』<sup>チャージ</sup>が加わり、BP8000までの相手スピリット1体を破壊することが可能となる。

ひかるはこの効果で、レイニードルを破壊した。

「相手スピリット1体を破壊したことで、自分フィールドの『強化』を持つスピリット1体につき、デッキからカードを1枚ドロウする。ライト・ブレイドラとアンドロメダ・ドラゴンの2体がいるから、二枚ドロウだよ!」

〈第8ターン〉

ひかる／ライフ：4、リザーブ：0、トラッシュ：5、手札：4↓6

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

砲竜バル・ガンナー（赤／4（軽減：赤2）／BP4000）

星雲竜アンドロメダ・ドラゴン（赤／6（軽減：赤3）／Lv1：BP5

000）

ネクスス：炎の楽園（赤／4（軽減：赤2）／Lv1）

バースト：なし

導／ライフ：5、リザーブ：0↓2、トラッシュユ：0、手札：5

フィールド

スピリット：ヴェロキ・ハルパー（アタックにより疲労）（赤／1／Lv2：BP30

00）

キツネービ（紫／1／Lv1：BP1000）

ネクスス：闇の聖剣（紫／4（軽減：紫2）／Lv2）

バースト：なし

さらに、ひかるは砲竜バル・ガンナーをアンドロメダ・ドラゴンに合体させ、アタッ

クを仕掛けようとした。

だが。

「ネクスス「闇の聖剣」Lv2の効果。相手スピリットが合体したとき、そのスピリット



は疲労する。それでも合体させるか？」

「うえっ?! うくん……うん! だったら次のターンで攻めればいいもんね!! というわけ  
で、バル・ガンナーをアンドロメダ・ドラゴンに合体してLv2に! アタックステップ  
に入るよ!」

〈第8ターン〉

ひかる／ライフ：4、リザーブ：0、トラッシュ：5、手札：6

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

星雲竜アンドロメダ・ドラゴン+砲竜バル・ガンナー〔闇の聖剣〕の効果

により疲労）（赤・赤／6+4（軽減：赤3）／Lv1：BP5000↓Lv2：BP8000+4000）

ネクサス：炎の楽園（赤／4（軽減：赤2）／Lv1）

バースト：なし

アンドロメダ・ドラゴンが疲労状態になったにも関わらず、ひかるは戦竜エルギニアスとライト・ブレイドラでアタックを仕掛けた。

導はこれを二つともライフで受けた。

〈第8ターン〉

導／ライフ：5↓3、リザーブ：2↓4、トラッシュ：0、手札：5

フィールド

スピリット：ヴェロキ・ハルパー（アタックにより疲労）（赤／1／Lv2：BP3000）

キツネービ（紫／1／Lv1：BP1000）

ネクサス：闇の聖剣（紫／4（軽減：紫2）／Lv2）

バースト：なし

第9ターンに入り、導は再びレイニードルをLv2、ソードルをLv1で召喚。

アタックステップに入り、ヴェロキ・ハルパーでアタックを仕掛けた。

ひかるはこのアタックをライフで受けたため、導はヴェロキ・ハルパーの効果でデッキからカードを一枚引き、ターンを終了した。

〈第9ターン〉

導／ライフ：3、リザーブ：4↓5↓1、トラッシュ：0、手札：5↓6↓4↓5

フィールド

スピリット：ヴェロキ・ハルパー（アタックにより疲労）（赤／1／Lv2：BP3000）

00)

キツネービ(紫/1/Lv1:BP1000)

レイニードル(赤/1(軽減:赤1)/Lv2:BP3000)

ソードール(紫/1(軽減:紫・白1)/Lv1:BP1000)

ネクスス:闇の聖剣(紫/4(軽減:紫2)/Lv2)

バースト:なし

ひかる/ライフ:4↓3、リザーブ:0↓1、トラッシュ:5、手札:6

フィールド

スピリット:ライト・ブレイドラ(疲労)(赤/0/Lv1:BP1000)

戦竜エルギニアス(疲労)(青/1(軽減:赤・青1)/Lv1:BP1000)

00)

戦竜エルギニアス(青/1(軽減:赤・青1)/Lv1:BP1000)

星雲竜アンドロメダ・ドラゴン+砲竜バル・ガンナー(疲労)(赤・赤/6

+4(軽減:赤3)/Lv2:BP8000+4000)

ネクスス:炎の楽園(赤/4(軽減:赤2)/Lv1)

バースト:なし

「ここまでは一進一退、というところでしょうか?」

「いまのところ、どっちが有利なのかな？」

「アドバンテージはひかるが持つてるルン。けど、ひかるのターンで導がどう動くかで変わってくるはずルン」

実際、導が配置したネクサス「闇の聖剣」はブレイヴ使いに対抗するためのカードの一つだ。

当然、マジックや大型スピリットの中には、ブレイヴや合体スピリットに対抗するカードが仕込まれていると考えられる。

ララのその予想は正しかった。

第10ターンに入り、ひかるはすべてのスピリットを回復。

「太陽龍ジーク・アポロドラゴン」と「獣装甲メガバイソン」をそれぞれLv1で召喚。戦竜エルギニアス1体のコアをジーク・アポロドラゴンに移し、Lv2になるよう合体させた。

当然、闇の聖剣の効果で疲労状態になるが、気にすることなく、アタックステップに移った。

〈第10ターン〉

ひかる／ライフ：3、リザーブ：1↓7↓1、トラッシュ：5↓0↓4、手札：6↓  
7↓5

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

星雲竜アンドロメダ・ドラゴン＋砲竜バル・ガンナー（赤・赤／6＋4（軽減：赤3）／Lv2：BP8000＋4000）

太陽龍ジーク・アポドラゴン＋獣装甲メガバイソン（疲労）（赤・白／6

＋5（軽減：赤・青2）／Lv2：BP6000＋3000）

ネクサス：炎の楽園（赤／4（軽減：赤2）／Lv1）

バースト：なし

「アタックステップ！合体スピリットでアタック！合体スピリットのアタック時効果で、デツキからカードを1枚ドロ！BP6000以下の相手スピリット1体を破壊するよ!!レイニードルを破壊!!」

「フラッシュタイムニング！マジック「サイレントウォール」を使用！バトル終了時にアタックステップを終了する！合体スピリットのアタックはライフで受ける!!」

〈第10ターン〉

ひかる／ライフ：3、リザーブ：1、トラッシュ：4、手札：5↓6

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

星雲竜アンドロメダ・ドラゴン＋砲竜バル・ガンナー（疲労）（赤・赤／6

＋4（軽減：赤3）／Lv2：BP8000＋4000）

太陽龍ジーク・アポドラゴン＋獣装甲メガバイソン（疲労）（赤・白／6

＋5（軽減：赤・青2）／Lv2：BP6000＋3000）

ネクサス：炎の楽園（赤／4（軽減：赤2）／Lv1）

バースト：なし

導／ライフ：3↓1、リザーブ：1↓3↓0↓2、トラッシュユ：0↓3、手札：5↓

4

フィールド

スピリット：ヴェロキ・ハルパー（アタックにより疲労）（赤／1／Lv2：BP30

00）

キツネービ（紫／1／Lv1：BP1000）

ソードール（紫／1（軽減：紫・白1）／Lv1：BP1000）

ネクサス：闇の聖剣（紫／4（軽減：紫2）／Lv2）

バースト：なし

白の防御魔法「サイレントウォール」。

バトル終了と同時にアタックステップを強制終了させるマジックだ。

この効果により、ひかるのアタックステップは終了となり、導のターンへと移った。

〈第1ターン〉

導／ライフ：1、リザーブ：2↓6、トラッシュユ：3↓0、手札：4↓5

フィールド

スピリット：ヴェロキ・ハルパー（赤／1／Lv2：BP3000）

キツネービ（紫／1／Lv1：BP1000）

ソードール（紫／1（軽減：紫・白1）／Lv1：BP1000）

ネクサス：闇の聖剣（紫／4（軽減：紫2）／Lv2）

バースト：なし

「メインステップ！マジック「ビッグバンエナジー」を使用！〈系統：皇竜〉を持つ俺のスピリットのコストは、このターン、俺のライフと同じになる！」

「導くんのライフと同じ……ってことはコスト1?!」

「ほとんどのスピリットをノーコストで召喚できるルン?!」

ひかるとララは導のそのコンボに目を見開いていた。

だが、これこそかつて“激突王”と呼ばれていた導の父が得意とし、母“ヴィオレ魔

ゐ」が使っていたコンボだ。

「星食らう龍をここに！」「滅神星龍ダークヴルム・ノヴァ」をノーコストで召喚！Lv2  
だ!!さらに、「闇の聖剣」をLv1に下げ、「雷皇龍ジークヴルム」をLv1で召喚する  
!!」

〈第1ターンの〉

導／ライフ：1、リザーブ：6↓4↓1、トラッシュ：0↓2、手札：5↓2

フィールド

スピリット：ヴェロキ・ハルパー（赤／1／Lv2：BP3000）

キツネービ（紫／1／Lv1：BP1000）

ソードール（紫／1（軽減：紫・白1）／Lv1：BP1000）

滅神星龍ダークヴルム・ノヴァ（紫／7（軽減：紫・赤3）／Lv2：B

P8000）

雷皇龍ジークヴルム（赤／6（軽減：赤3）／Lv1：BP6000）

ネクサス：闇の聖剣（紫／4（軽減：紫2）／Lv2↓Lv1）

バースト：なし

大型スピリットが一気に二体並び、さすがにひかるも驚きを隠せなかった。

だが、滅神星龍ダークヴルム・ノヴァと雷皇龍ジークヴルムが並び立ったということ



は、導の必殺コンボはすでに完成しているということでもあった。

そして、ダークヴルム・ノヴァの持つ能力は、ひかるたちをさらに驚愕させることとなる。

「ダークヴルム・ノヴァは合体できない。だが、そのデメリットは相手にも及ぶ！合体しているスピリットとブレイヴは分離される」

「うっ！け、けどスピリット状態で……」

「ダークヴルム・ノヴァのもう一つの効果。相手はブレイヴをスピリット状態にできない。よって、分離された2体のブレイヴはトラッシュへ送られる」

「しよ、しよんな〜……」

〈第1ターンの〉

ひかる／ライフ：3、リザーブ：1、トラッシュ：4、手札：6

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

星雲竜アンドロメダ・ドラゴン（疲労）（赤／6（軽減：赤3）／Lv2：

BP8000）

太陽龍ジーク・アポドラゴン（疲労）（赤／6（軽減：赤・青2）／Lv

2 : B P 6 0 0 0 )

ネクスス : 炎の樂園 ( 赤 / 4 ( 軽減 : 赤 2 ) / L V 1 )

バースト : なし

滅神星龍ダークヴルム・ノヴァが別名「ブレイヴ・キラー」と呼ばれている理由がこれだ。

自身が合体できない代わりに、相手ブレイヤーの持つブレイヴを無力化してしまうというブレイヴ使いからすれば非常に厄介な能力。

この能力ゆえに、導が今使っている『Wノヴァ』<sup>ダブル</sup>にはブレイヴは一切入っていない。戦力を半減されたひかるがショックを受けているが、導は無慈悲にもアタックステツプへと移行した。

「アタックステツプ！滅神星龍ダークヴルム・ノヴァでアタック!!ダークヴルム・ノヴァLv2のアタック時効果！疲労状態の相手スピリット1体を破壊!!アンドロメダ・ドラゴン破壊させてもらおう!!」

「フラツシユタイミング！マジック「ピュアエリクサー」！ジーク・アポロドラゴンを回復させるよ!!」

「こちらフラツシユタイミング！紅蓮の星より生まれし龍をここに！「超神星龍ジ

クヴルム・ノヴァ」!!ジークヴルムに煌臨!!」

〈第1ターンの〉

導／ライフ：1、リザーブ：1↓0、トラッシュユ：2↓3、手札：2↓1

フィールド

スピリット：ヴェロキ・ハルパー（赤／1／Lv2：BP3000）

キツネービ（紫／1／Lv1：BP1000）

ソードール（紫／1（軽減：紫・白1）／Lv1：BP1000）

滅神星龍ダークヴルム・ノヴァ（疲労）（紫／7（軽減：紫・赤3）／Lv

2：BP8000）

超神星龍ジークヴルム・ノヴァ（赤／9（軽減：赤5）／Lv1：BP1

2000）

ネクサス：闇の聖剣（紫／4（軽減：紫2）／Lv1）

バースト：なし

ひかる／ライフ：3、リザーブ：1、トラッシュユ：4、手札：6

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

星雲竜アンドロメダ・ドラゴン（疲労）（赤／6（軽減：赤3）／Lv2：  
BP8000）

太陽龍ジーク・アポドラゴン（「ピュアエリクサー」により回復）（赤／  
6（軽減：赤・青2）／Lv2：BP6000）

ネクサス：炎の楽園（赤／4（軽減：赤2）／Lv1）  
バースト：なし

「ジークヴルム・ノヴァの煌臨時効果、トラツシユにあるすべてのコアをこのカードに移  
動。さらに、「ヴルム」と名のついたスピリットに煌臨したことで、俺のライフを5まで  
回復させる！」

「オヨオツ?!」

「導くんのライフが振出しに戻った?!」

〈第11ターン〉

導／ライフ：1↓5、リザーブ：0、トラツシユ：3↓0、手札：5↓2  
フィールド

スピリット：ヴェロキ・ハルパー（赤／1／Lv2：BP3000）

キツネービ（紫／1／Lv1：BP1000）

ソールドール（紫／1（軽減：紫・白1）／Lv1：BP1000）

滅神星龍ダークヴルム・ノヴァ（疲労）（紫／7（軽減：紫・赤3）／Lv  
2：BP8000）

超神星龍ジークヴルム・ノヴァ（赤／9（軽減：赤5）／Lv1：BP1  
2000↓Lv2：BP15000）

ネクサス：闇の聖剣（紫／4（軽減：紫2）／Lv1）  
バースト：なし

いきなり登場した導のキースピリットの能力に、ひかるは驚きのあまり声が出ず、ラ  
ラとえれなは目を丸くしていた。

が、まだかだけはジークヴルム・ノヴァに何か思い当たる節があるらしく、考え込む  
素振りを見せていた。

そんな外野の反応は知ったことではないとばかりに、導はさらに追い打ちをかけてき  
た。

「さらにマジック「メテオストーム」を使用。ダークヴルム・ノヴァに『BPを比べ相手  
スピリットを破壊したとき、このスピリットのシンボル1つにつき相手ライフ1つをリ  
ザーブへ送る』効果をつける！不足コストはヴェロキ・ハルパーをLv1に下げて確保  
！」

「げげえっ?!?!ら、ライフで受ける!!」

## 〈第1ターンの〉

導／ライフ：5、リザーブ：0、トラッシュ：0↓2、手札：2↓1

フィールド

スピリット：ヴェロキ・ハルパー（赤／1／Lv2：BP3000↓Lv1：BP1000）

キツネービ（紫／1／Lv1：BP1000）

ソードール（紫／1（軽減：紫・白1）／Lv1：BP1000）

滅神星龍ダークヴルム・ノヴァ（疲労）（紫／7（軽減：紫・赤3）／Lv

2：BP8000）

超神星龍ジークヴルム・ノヴァ（赤／9（軽減：赤5）／Lv2：BP1

5000）

ネクサス：闇の聖剣（紫／4（軽減：紫2）／Lv1）

バースト：なし

ひかる／ライフ：3↓1、リザーブ：1↓3、トラッシュ：4、手札：6

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／Lv1：BP1000）

戦竜エルギニアス（青／1（軽減：赤・青1）／Lv1：BP1000）

星雲竜アンドロメダ・ドラゴン（疲労）（赤／6（軽減：赤3）／Lv2：  
BP8000）

ネクサス：炎の楽園（赤／4（軽減：赤2）／Lv1）

バースト：なし

「超神星龍ジークヴルム・ノヴァで追撃！ジークヴルム・ノヴァLv2、3のアタック時効果でBP20000まで相手スピリットを破壊するか、ゲーム中に一度だけ、互いの手札を破棄する！俺は手札破棄の効果を使用!!」

「ええええっ?!」

まさかの効果に、ひかるだけではなく、観戦していたララたちも目を丸くした。

アタック時効果による処理であるため、フラッシュタイミングでマジックを使用することはできない。つまり、ひかるも導もこのターン、マジックなしで戦わなければならないのだ。

「ら、ライト・ブレイドラでブロック!!」

「ヴェロキ・ハルパー、ソードール！続け!!」

ジークヴルム・ノヴァのアタックは辛うじてブロックできたが、導のフィールドには回復状態のスピリットがまだ三体いた。

そして、ひかるのフィールドにいるブロック可能なスピリットは戦竜エルギニアスの

みで、ライフは一つ。

よつて、このバトルは、ひかるが最後のライフを砕かれたことで導の勝利となった。

「うーん……やつぱり強いなあ……」

「ひかるのデツキもポテンシャルは高いんだ。これから改造していけばいい」

どこかすつきりした表情で呟くひかるに、導はそう返して、手を伸ばした。

「いいバトルだった」

「えへへ……ありがとうー」

その一言に、ひかるは満面の笑みを浮かべて導の手を取った。

外野ではプルンスが、青春でプルンスなあ、などと爺臭いことを言っていたが、ララとえれなはまったく気にしている様子はなかった。

が、唯一、まどかだけはやはりあまりいい表情はしていなかった。

——超新星龍ジークヴルム・ノヴァ、たしかあのカードは……それに導さんの『馬神』という苗字……まさか、彼は……

まどかの心に引つかかったもの。

それはかつて、地球とつながった異世界を侵略し、地球をも支配しようとした男、『異界王』の野望を砕いた一人のカードバトルの存在だった。



## 再びのゼニー星

射手座のスタープリンセスを復活させてから数日。

再びプリンセススターカラーペンの反応があったとプルンスから報告が入り、ひかるたちは再びゼニー星に来ていた。

むろん、導もひかるに引きずられて強制連行されてきていた。

「まったく……なんでまた急に……」

「まあまあー！」

「あはは……」

「およ……」

相変わらずのひかるの押しの強さにげんなりしている導に対して、えれなとララは同情の視線を向けていた。

だが、基本的にマイペースであるひかるは、そんなことは気にする様子を全く見せず  
にいた。

「で？　なんでまたここなんだ」

「わからないルン。ペンダントの反応がこの星を示していたルン」

ひかるたちはリーダーが指し示す方向へ向かっていたのだが、スタープリンスの力は、再び、ゼニー星にたどり着いたらしく、リーダーの反応は以前訪れた星を示していた。

「まったく……今度こそ、金持ちの手に渡ったか？」

「だ、だとしても、話せばわかってくれるよ。きつと！」

「……俺はお前のその樂觀的過ぎる考えが好きじゃないんだよ」

樂觀的過ぎるひかるの言葉に、導は文句を言った。

もちろん、その文句にその場にいる全員が反論しようとするが。

「現実的に考えろ。俺たちが手に入れようとしているものは、確かにスタープリンスを復活させるために必要なアイテムかもしれない」

「だからこそ、取り戻さないといけないんだよ！」

「だが、その事情をどれだけの人間が知っている？」

「うっ……」

「そ、それは確かにでプルンス……」

導の言葉に、ひかるは言葉を詰まらせ、プルンスは反論できずに納得してしまっていた。

だが、導はさらに追い打ちをかけるようにひかるたちに言葉を投げる。

「仮に、その事情を知っている人間が手にしていたとして、手放してくれると思うか？」  
「だ、だからそれこそ事情を……」

「事情を話したところで、『だから何?』で終わるのが関の山だと思うね、俺は」

とことんまで他人を信用しない発言に、ひかるだけでなく、ララたちも何も言えなくなってしまうていた。

だが、導は容赦なく追い打ちをかける。

「事情を知ったところで、自分の身に降りかからなかつたら所詮は他人事だ。火の粉がかかっているうちは、たとえどんな立場の人間でも協力してくれることなんてないだよ」

導の言葉はやや極端ではあるが、人間という存在は基本的に自分の身に降りかからなければ、『これから自分たちの身にも起こりうること』として警告されていても、『自分は大丈夫』という根拠のない自信で行動する。

地球に魔の手が伸びていることを、マジサを通じて知ることがなければ、導もまた、他人事として行動していただろう。

だからこそ、頭の中がお花畑なのではないかと疑いたくなるようなひかるの楽観主義に苛立ちを覚えているようだ。

「ま、まあまあ。とりあえず話をして、ダメだつたらそのときに考えればいいよ」

「案ずるより産むがやすし、とも言いますし」

「ここはひとつ、ひかるの提案に乗っかってから、ということにするルン」

「険悪な雰囲気になりそうになったため、えれなたちはひとまずその場を収めようとする。」

「……もしそれでうまくいかなかったら、俺は好きにやらせてもらう」

「だ、大丈夫だよ！ 為せば成る!!」

「為さねば成るものもならないけどな」

「余計なツツコミでブルンス……」

導の返す言葉に、ブルンスがそうつつこむが、誰も反応することなく、ロケットはゼニー星に着陸する。

相変わらずのまばゆい雰囲気と活気に、ひかるたちは興奮しながら、コンパスが示す方向へと歩みを進めると。

「こつて……」

「まさか……」

「なんとという奇縁……」

「いや、どんだけだよ」

「おやお……」

そこには、悪趣味とも取れるような建築デザインをした豪邸があった。

意匠から察するに、いて座のプリンセルスターカラーペンをめぐり、まどかと接戦を繰り広げた竜人系異星人ドラムスに何か関わりがありそうだ。

「こりや、やつぱり正面からつてのは厳しいんじゃないか？」

「けど、だつたらどうすれば……」

「いや、忍び込む以外に選択肢ないだろ？」

正面から入ることは難しいならば、侵入可能な場所から入り込むしかない。

導のその提案に、ひかるたちは難色を示す。

いくらプリンセススターカラーペンを取り戻さなければならぬとはいえ、泥棒のよ  
うな真似はしたくないのだろう。

むろん、導として自ら率先して犯罪者まがいの行為をしたいというわけではない。

だが、目的のために手段を選んでいる場合ではないのであれば、迷うことなくその手  
段を選ぶ。

それだけの覚悟が、導にはあった。

だが、ひかるはそれでも。

「けど、泥棒はダメだよ!!」

頑なに不法侵入を拒んでいた。

これ以上、この場で話しても平行線であり、時間の無駄であると感じた導は少し面倒くさそうにため息をつき。

「だったら、俺のやり方で話を通せるか試してみるか」

「導のやり方ルン？」

「いったい、何をするつもりでプルンス？」

さきほどのやり取りから、導のやり方、というものは、やはり不法侵入しかないのではないか。

プルンスとララはそう思いつつ、どうするつもりなのか導に問いかける。

二人の問いかけに、導は腰のホルダーに収めているデッキに触れた。

「俺の仕事は、バトルスピリッツで勝つことだ」

「え、だからバトルスピで勝負するってこと？」

「そういうことだ」

「けど、相手がバトルスピを知らないかもしれないよ？」

バトルスピリッツは地球に生まれたカードゲーム。

遠く離れたこの星に、同じカードゲームがあるとは思えず、えれなが問いかける。

だが、導は自信たっぷり。

「この間、先輩の弟さんが飛び出してた日に異星人のカードバトラーに出会ってバト

ルをしたことがあるんで、おそろく大丈夫かと」

「え?! そ、そんなことがあったの?!」

「なんで言わなかったルン?!」

「いや、言う必要、あつたか?」

地球で異星人のカードバトラーとバトルしたことは、確かに導はひかるたちに話していない。

特段、話す必要はないと感じていたということもそうだが、話すタイミングがなかった、ということも大きく、何より、ひかるたちから何も聞かれなかった。

聞かれなかったのだから、言う必要はないし、言わなくてもいいと判断したようだ。

「ともかく、これだけの規模の金持ちだったら、お抱えカードバトラーの一人くらいはいるだろうから、そいつとバトルして話をつけられないか交渉してくる」

「交渉って……できるの?」

「やってみるだけだ」

ひかるの問いかけに、導はそう返し、邸の正門へと向かっていった。

## スターカラーペンを賭けたバトル?!

プリンセススターカラーペンの反応を追いかけ、再びゼニー星へとやってきたひかるたち。

しかし、スターカラーペンの反応は大富豪の息子、ドラムスの持つ邸の中だった。

頼み込んだとしても、回収させてくれる保証はなく、かといって盗みに入るわけにもいかないため、導はバトルスピリッツでの交渉を試み、一人で門へと向かう。

「ドラムス様に何か用事か?」

「ああ。少し、聞きたいことがある」

「約束は?」

「ない。だが、緊急なので失礼を承知してアポなしで訪問させてもらった」

堂々とした態度で、門番と会話を繰り返すが、反応はあまりよくない。

約束もしていないし、ドラムスとは友人とまではいかずとも、オークション会場で一度、宇宙アイドル・マオを通じて言葉を書き換えた程度であることは事実。

いきなり玄関のインターホンを押して、商品を買ってほしいと頼んでも受け入れてくれないわけではないことと同じように、緊急だからとアポなし訪問されても困るものは困る



だろう。

だが、導には秘策があった。

『スタープリンセスの力にまつわるものについての話だ』と言えば、おそらくドラムスも興味を持つんじゃないか?』

スタープリンセスの力。それは言わずもがな、プリンセススターカラーペンのことだ。

以前、ドラムスがオークション会場で高額であったにも関わらず、まどかとの勝負を最後まで粘っていたことを覚えていた導は、彼ならば食いつく可能性が高いとみて、その話を持ち出すことにした。

結果は上々で、ドラムスから中に入る許可が出たため、警備隊に案内され、導はひかるたちとともに屋敷の中へ入っていく。

「ようこそ。興味深い話を持ってきてくれたみたいだね」

「急な来訪、謝罪する。それにも関わらず、お招きいただき感謝する」

「ほお? どうやら、それなりに礼儀はわきまえているようだな?」

導の言葉に、ニヤリ、とドラムスは笑みを浮かべる。

実際は財閥の息子なのだろうが、個人でもそれなりに資産を持っているためか、やはりどこか見下しているような雰囲気、導は一瞬、むっとした表情を浮かべるが、ここ

で感情のままわめいても意味がない。

導は怒り出したくなる気持ちを抑え、話を続ける。

「風の噂では、プリンセススターカラーペン——スタープリンセスの力について、ご執心だとか」

「ああ、それに関することだというから、こうして君たちが屋敷に入ること許可した」「まどろっこしい交渉は抜きにして、率直に要求する。あんたが持っているスタープリンセスの力、俺たちが探しているものなんだ。渡してもらえないだろうか？」

「ふむ……自分の欲望に正直なところは、好ましく思うよ」

「だけどね、とドラムスは笑みを浮かべて導の言葉を拒絶する。

「あれは僕が手に入れたものだ。相応の対価もなしにほいほいと渡せないよ？」

「渡すつもりはない、の間違いじゃないのか？ 先日のオークション、かなり粘っていたらだろ」

「ふふふ。だが、あるいは君が何を差し出すかによって変わるかもしれない」

「俺に渡せるものはない。あつたとしても……」

導はホルダーからバトルスピリッツのデッキを取り出し、その裏面をドラムスに突き出した。

「差し出すかどうかは、バトスピの勝敗で決める。それが俺のルールだ」

「なるほど……なら、君が勝ったならスタープリンセスの力は渡そう。その代わりに、負けたらどうする?」

「スタープリンセスの力に並ぶもの……彼女たちと同等の存在が宿った力を渡す」

「ちよつ?!」

スタープリンセスたちと同等の存在。

それは紛れもなく、十二宮Xレアのことだろう。

いくらプリンセススターカラーペンを手に入れるためとはいえ、そんな大事なものを勝手に掛けることに、ひかるたちは抗議の声をあげる。

「いくらなんでも、それはっ!!」

「もうちよつと冷静になるルン!!」

「いや、確かに釣り合うものはそれくらいかもしれないけれどさあっ!!」

「ほかに方法が……」

「手段を選んではいけない。だったら、道に外れない程度で選べる手段はこれくらいなものだろ」

その一言に、まどかといえな、ララの三人は黙ってしまふ。

正攻法で入手できないというのなら、邪道を使って手に入れる。

その提案を拒絶したのは他ならぬ彼女たちだ。

かといって、まだ中学生でしかない自分たちに使うことができる手段は限られている。

残された手段の中で平和的かつ人の道を外れることなくプリンセススターカラーペンを回収できる可能性がある方法は、もはやバトルスピリッツでの勝敗しか残されていない。

導はそう判断し、勝負を持ち掛けたのだ。

そのことを理解したうえでか、それとも単純に導に託された力を失うことを嫌ったのか。

ひかるはなおも反対し続けていた。

「そんなことしなくても、一生懸命説明すればきつと……」

「星奈、さつきも言ったぞ。あつちにとつてこつちの事情は知ったこつちやないんだ。話したところで納得もしないし、はいそうですかといって渡してくれるわけないだろ」

「で、でも……」

「自分が手にしたものはそう簡単に手放したくないって思うのは、地球人だろうが異星人だろうが関係ない。なら、どっちもリスクを背負う条件での勝負を行ったほうが、後腐れなくていいだろ」

欲求に正直な人間は特にそういった傾向にあるが、人間は自身が手にした

権力や財力、宝物や芸術品といったものをそう簡単に手放すものではない。

だが、逆を言えば自身が持っている以上のものを見せられれば、それを手に入れるためにありとあらゆる手段を使い、交渉することになる。

バトルスピリッツは、その交渉のための手段、ということのようだ。

そして、ドラムスは交渉のテーブルに着くことを了承した。

「いいだろう。だが覚悟しておきたまえよ？ 僕も腕に自信があるからね」

「ああ……いくぞ」

「ゲートオープン！ 界放!!」

スターカラーペンを賭けたバトル！ サジット・アポロ  
ドラゴン、出陣!!

プリンセススターカラーペンをかけて、バトルスピリッツで勝負をすることになった  
導とドラムス。

ゲートオーブンの宣言コイルを行い、二人はバトルフィールドへと転移する。

導のすぐ近くにいたひかるたちもバトルフィールド内部に備わっている観客席に転  
移していた。

「え？ え?？」

「な、何?！」

「ここはいつたい……」

「どこルン?！」

当然、彼女たちはバトルフィールドに立つこと自体が初めてであるため、困惑してい  
た。

もつとも、ひかるに限ってはその反応は一分にも満たない時間程度。

すぐにバトルフィールドに立つ導を見つけ。

「あ、導くん！ おーいつ!!」

導に向かって手を振っていた。

だが、導はひかるに手を振り返すことなく、デッキからカードを引き、ドラムスに視線を向ける。

「始めよう」

「なら、僕が先行をもらおう……スタートステップ!」

ドラムスから一方的に先行を奪われた導だったが、気にする様子もなく、ドラムスの動きを見守る。

スタートステップを宣言したドラムスはドローステップでデッキからカードを一枚引き、続けてメインステップへ移った。

「メインステップ。リザドエッジ、レイニードルを召喚。ともにレベル1だ」

〈第1ターン〉

ドラムス／ライフ：5、リザーブ：3、トラッシュ：0、手札：3

フィールド

スピリット：リザドエッジ（赤／0／レベル1：BP1000）

レイニードル（赤／1（赤1）／レベル1：BP1000）

ネクサス：なし

バースト：なし

「ターンエンド」

「スタートステップ」

第1ターン、ドラムスはスピリットを召喚するだけでターンを終了。

続く第2ターン。導はライト・ブレイドラ、ザニーガン、ノーザンベアードを1体ずつレベル1で召喚し、ターンを終えた。

〈第2ターン〉

導／ライフ：5、リザーブ：0、トラッシュユ：2、手札：3

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

ザニーガン（白／1（赤1／白1）／レベル1：BP1000）

ノーザンベアード（白／3（白2）／レベル1：BP3000）

ネクサス：なし

バースト：なし

その後も、スピリットを召喚したりマジックを使用して手札を増やすなどはしたものの、互いにアタックを仕掛けることはせず、第6ターンへと動いた。

〈第3ターン〉



## 開始時

ドラムス／ライフ：5、リザーブ：3↓4、トラツシユ：0、手札：3↓4  
 フィールド

スピリット：リザドエッジ（赤／0／レベル1：BP1000）

レイニードル（赤／1（赤1）／レベル1：BP1000）

ネクサス：なし

バースト：なし

## 終了時

ドラムス／ライフ：5、リザーブ：4↓0、トラツシユ：0↓2、手札：4↓2↓4

（マジック：ダブルドロウの使用による）

フィールド

スピリット：リザドエッジ（赤／0／レベル1：BP1000）

レイニードル（赤／1（赤1）／レベル1↓2：BP2000）

レイニードル（赤／1（赤1）／レベル1：BP1000）

ネクサス：なし

バースト：なし

〈第4ターン〉

## 開始時

導／ライフ：5、リザーブ：0↓3、トラッシュユ：2↓0、手札：3↓4

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

ザニーガン（白／1（赤1／白1）／レベル1：BP1000）

ノーザンベアード（白／3（白2）／レベル1：BP3000）

ネクサス：なし

バースト：なし

メインステツプ

導／ライフ：5、リザーブ：3↓1、トラッシュユ：0↓2、手札：4↓6（マジック：

スターリードローを使用。光龍騎神サジット・アポロドラゴンと輝竜シャイン・ブレイ

ザーが手札に）

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

ザニーガン（白／1（赤1／白1）／レベル1：BP1000）

ノーザンベアード（白／3（白2）／レベル1：BP3000）

ネクサス：なし

バースト：なし

終了時

導／ライフ：5、リザーブ：1、トラッシュユ：2、手札：6

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

ザニーガン（白／1（赤1／白1）／レベル1：BP1000）

ノーザンベアード（白／3（白2）／レベル1：BP3000）

ネクサス：なし

バースト：なし

〈第5ターン〉

開始時

ドラムス／ライフ：5、リザーブ：0↓3、トラッシュユ：2↓0、手札：4↓5

フィールド

スピリット：リザドエッジ（赤／0／レベル1：BP1000）

レイニードル（赤／1（赤1）／レベル2：BP2000）

レイニードル（赤／1（赤1）／レベル1：BP1000）

ネクサス：なし

バースト：なし

メインステツプ

ドラムス／ライフ：5、リザーブ：3↓1、トラツシユ：0↓2、手札：5↓4↓6  
 ↓7（マジック：三札之術を使用。デッキトップが赤スピリット「龍皇ジークフリード」  
 であつたため、手札へ）

フィールド

スピリット：リザドエツジ（赤／0／レベル1：BP1000）

レイニードル（赤／1（赤1）／レベル2：BP2000）

レイニードル（赤／1（赤1）／レベル1：BP1000）

ネクサス：なし

バースト：なし

終了時

ドラムス／ライフ：5、リザーブ：1、トラツシユ：2、手札：7↓6（バースト設  
 置のため）

フィールド

スピリット：リザドエツジ（赤／0／レベル1：BP1000）

レイニードル（赤／1（赤1）／レベル2：BP2000）

レイニードル (赤 / 1 (赤1)) / レベル1 : BP1000)

ネクサス : なし

バースト : あり

「ターンエンド」

「スタートステップ!」

〈第6ターン〉

導 / ライフ : 5、リザーブ : 1 ↓ 4、トラッシュ : 2 ↓ 0、手札 : 6 ↓ 7

フィールド

スピリット : ライト・ブレイドラ (赤 / 0 / レベル1 : BP1000)

ザニーガン (白 / 1 (赤1 / 白1)) / レベル1 : BP1000)

ノーザンベアード (白 / 3 (白2)) / レベル1 : BP3000)

ネクサス : なし

バースト : なし

「メインステップ! ヴェロキハルパーをレベル2で召喚!」

〈第6ターン〉

導 / ライフ : 5、リザーブ : 4 ↓ 0、トラッシュ : 0 ↓ 1、手札 : 7 ↓ 6

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

ザニーガン（白／1（赤1／白1）／レベル1：BP1000）

ノーザンベアード（白／3（白2）／レベル1：BP3000）

ヴェロキ・ハルパー（赤／1／レベル2：BP3000）

ネクサス：なし

バースト：なし

導のフィールドに鋭いかぎ爪を持ったラプトル種の恐竜が姿を現した。

その後、導はバトルを動かす。

「アタックステップ！ ヴェロキ・ハルパーでアタック！」

「ふむ……ライフだ！」

導がアタックを宣言した瞬間、ヴェロキ・ハルパーがフィールドを駆け出し、ドラムスに向かって飛びかかった。

その瞬間、ドラムスの目の前に赤い光の幕が出現する。

ヴェロキ・ハルパーは迷うことなく、その光の幕に向かって足の爪を振り下ろし、何度もひつかいていく。

その攻撃によって、光の幕が砕け、ドラムスに衝撃が襲いかかった。

〈第6ターン〉

ドラムス／ライフ：5↓4、リザーブ：1↓2

「ライフ減少によりバースト、ぜっこうひょうじゆん絶甲氷盾発動! 僕のライフを1つ回復。そして、フラッシュ効果を使用! このバトルを強制終了させる。不足コストはレベル2のレイニードル、リザドエッジから使用。リザドエッジは消滅する」

〈第6ターン〉

ドラムス／ライフ：4↓5、リザーブ：2↓0、トラッシュ：2↓6、手札：6  
 フィールド

スピリット：リザドエッジ（赤／0／レベル1：BP1000）↓コア消失のため消滅

レイニードル（赤／1（赤1）／レベル2↓1：BP2000↓1000）

レイニードル（赤／1（赤1）／レベル1：BP1000）

ネクサス：なし

バースト：あり↓『絶甲氷盾』

「ヴェロキ・ハルパーのアタック時効果。お前のライフを減らしたことで、デッキからカードをドロ―する。ターンエンドだ」

〈第6ターン〉

導／ライフ：5、リザーブ：0、トラッシュ：1、手札：6↓7

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

ザニガン（白／1（赤1／白1）／レベル1：BP1000）

ノーザンベアード（白／3（白2）／レベル1：BP3000）

ヴェロキ・ハルパー（アタックにより疲労状態）（赤／1／レベル2：BP

3000）

ネクサス：なし

バースト：なし

「やはり防御カードか」

「まあね。ドラゴン家の人間として、僕もそれなりに戦術は心得ているつもりさ」

「なら、なぜもつと広い目で物事を見ない？」

ドラムスの言葉に、導は眼光を少し強めながら問いかける。

質問の意図がわからないらしく、ドラムスは首をかしげながら導に問いかけると。

「お前がやっていることは、単に自分が集めたいものを集めているだけのようにか見え

えない。集めたものを使って何をしたい？ スタープリンセスの力を手に入れてどう

する？」

「それは……」



導の問いかけに、ドラムスは何も返さない。いや、返せなかった。

ドラムスにとつて、価値ある宝物を集めることは自分の収集癖を満たし、世間に『自分ほこれだけのものを購入できる財力を持つている』と知らしめるためだけのもの。

その宝物を手に入れ、何をしたいか、など考えたことはなかったのだ。  
だが。

「ま、まあ、僕は未来なんてものに興味がなくてね……今を楽しむために、集められるものは集めたいのさ」

「……そうか……」

ドラムスの返答に、導はただそれだけを返す。

同時に、導の心のうちには。

——自分の承認欲求と収集癖を満たしたいだけ。そんな奴に、負けるわけにはいかないな!  
いな!

負けるわけにはいかない、という強い闘志が燃え上がっていた。

その闘志を察してか。

「威勢がいいのは認めるけれど、僕に勝てるカードバトルはそうそういないよ! スタートステップ!!」

ドラムスは言外に、自分が敗北するはずがないと言い、第7ターンへと突入する。

## 〈第7ターン〉

ドラムス／ライフ：5、リザーブ：0↓7、トラッシュユ：6↓0、手札：6↓7  
 フィールド

スピリット：レイニードル（赤／1（赤1）／レベル1：BP1000）

レイニードル（赤／1（赤1）／レベル1：BP1000）

ネクサス：なし

バースト：なし

「メインステップ！ 僕のデッキの切り札、原初にして灼熱の龍皇！ 龍皇ジークフ  
 リードをLv1で召喚!!」

ドラムスが一枚のカードを手にした瞬間、そのカードから赤い光があふれ出る。

カードをフィールドに出した瞬間、地中から炎が吹き上がり、その中からがっしりとした体躯を持ち、額にとさかのような角を持つ赤い竜が姿を見せた。

## 〈第7ターン〉

ドラムス／ライフ：5、リザーブ：7↓2、トラッシュユ：0↓4、手札：7↓6  
 フィールド

スピリット：レイニードル（赤／1（赤1）／レベル1：BP1000）

レイニードル（赤／1（赤1）／レベル1：BP1000）

龍皇ジークフリード（赤／6（赤3）／レベル1：BP4000）

ネクサス：なし

バースト：なし

「ドラゴンであつ！」

「お、おっきいルン!!」

「すごい迫力……」

「なんとという威圧感……」

その迫力に、ひかるたちは各々の反応を見せる。

むろん、導も赤い竜の姿を見て、感情が動いたが。

「来たか、Xレアー！」

その竜が放つ、独特の威圧感に導は目の前の竜がドラムスの持つXレアであり、キースピリットであることを察したのか、どう猛な笑みを浮かべていた。

Xレアとは、バトルスピリッツのカードが持つ区分の中で最高レアの階級に位置するカードだ。

最高レアであるというだけあり、BPの高さだけでなくカードが持つ能力も一瞬で盤面をひっくり返すようなものが多い。

ドラムスが召喚したジークフリードも、Xレアの称号に違わぬ効果を有していた。

「龍皇ジークフリードの効果！ ソウルコアがジークフリードに乗っている間、ジークフリードは最高Lvとして扱う！ よってジークフリードのLvは3!!」

ソウルコアとは、普通のコアより一回りほど大きい、赤く、銀色の枠で縁取られたコアのことだ。

このコアを使用することで、カードに更なる効果を与えるだけでなく、『封印』と呼ばれる状態を作り上げたり、フィールドのカードの上に手札のカードを重ねる『煌臨』と呼ばれる召喚をしたりするために必要となる。

そのコアの力で、本来、ジークフリードが最高Lvとなるために必要なコアが5つではなくなったのだ。

#### 〈第7ターン〉

ドラムス／ライフ：5、リザーブ：2、トラッシュ：4、手札：6

フィールド

スピリット：レイニードル（赤／1（赤1）／レベル1：BP1000）

レイニードル（赤／1（赤1）／レベル1：BP1000）

龍皇ジークフリード（赤／6（赤3）／レベル1：BP4000↓レベル

3（効果による）：BP10000）

ネクサス：なし

バースト：なし

「アタックステップ! ジークフリード、身の程知らずにお灸をすえてやれ!」

「ライフで受ける!」

ドラムスのアタック宣言により、ジークフリードは翼を翻し、導へと接近してくる。導は迷うことなく、ライフで受けることを宣言。

上空へ跳びあがったジークフリードは、導に向かって激しい炎を浴びせかけた。

〈第7ターン〉

導／ライフ：5↓4、リザーブ：0↓1

「さらに、レイニードルでアタック!」

「ライフだっ!!」

続けて、ドラムスはレイニードルを使い、導にアタックを仕掛ける。

そのアタックをし、導はライフで受けることを宣言。

調子に乗ったのか、それとも手札に回復効果を持つマジックを握っているのか、ドラムスは残るもう一体のレイニードルによるアタックを宣言するが。

「ノーザンベアードでブロック!」

今度はライフで受ける選択はせず、ノーザンベアードでブロックさせた。

「ノーザンベアード、ブロック時効果。ボイドからコアーツをこのスピリットに乗せる

！ よってLv2へ上昇!!」

「ちっ！ 読みが外れたか？」

導はライフを撃たせてコアをためるタイプと感じていたのか、ドラムスはブロックされたことに対し、舌打ちをする。

〈第7ターン〉

導／ライフ：4↓3、リザーブ：1↓2

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

ザニガン（白／1（赤1／白1）／レベル1：BP1000）

ノーザンベアード（ブロックにより疲労状態）（白／3（白2）／レベル1：

BP3000↓レベル2：BP5000）

ヴェロキ・ハルパー（アタックにより疲労状態）（赤／1／レベル2：BP

3000）

ドラムス／ライフ：5、リザーブ：2↓3、トラッシュ：4、手札：6

フィールド

スピリット：レイニードル（アタックにより疲労状態）（赤／1（赤1）／レベル1：

BP1000）

龍皇ジークフリード（アタックにより疲労状態）（赤／6（赤3）／レベル

3（効果による）：BP10000）

「え？ 読みつてどういうこと?！」

ドラムスの言葉が聞こえていたえれなが首をかしげる。

すると、近くにいたプルンスがしたり顔で解説を始めた。

「おそらく、ドラムスは導がライフを減らすことでコアをためる、一発逆転を狙うギャンブラータイプのカードバトルだと思っただけでプルンス。でも、スピリットにブロックさせるという選択をしたことで、ドラムスはその予測を外したことになるでプルンス」

バトルスピリットに限らず、特に対面式で行われるゲームは相手との心理戦が物を言うことがある。

今回、ドラムスはプルンスの指摘通り、導がライフを砕くことでコアをより多く貯めようとするタイプのカードバトルだと予想していた。

だが、ノーザンベアードによりその攻撃がブロックされたことで、その予測が裏切られたのだ。

さらに、導の手札に何かしらの防御策となるカードがあるのではないかと警戒をしていたものの、ノーザンベアードの効果によってコアが増えたことで、そのカードを使用する可能性が濃厚となった。

それだけでなく。

「たぶん、手札のマジックを警戒してるルン」

「コアが増えたから、使われちゃうかもしれないってこと？」

「いえ、おそらくはカードによってスピリットを破壊され、導さんのターンに防御できるスピリットがいなくなることを警戒しているのではないかと」

まどかが指摘するように、ドラムスは導の手札にスピリットを破壊する効果を持つマジックが握られているのではないかと予測していた。

コアが増えたことで、このまま攻撃を続ければそのマジックを使用される可能性があり、使用を許した場合、導のターンに自分フィールドに壁となってくれるスピリットがいなくなっているという状態を作ることになる。

すべてのスピリットが疲労状態であるとはいえ、その状態でターンを明け渡すことはさすがにまずいと判断し、ドラムスはこれ以上は行動せず、ターンを明け渡すことにしたのだ。

ドラムスからターンを明け渡され、第8ターンは導のスタートステップからとなった。

〈第8ターン〉

導／ライフ：3、リザーブ：2↓3、トラッシュユ：1↓0、手札：7↓8



フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

ザニーガン（白／1（赤1／白1）／レベル1：BP1000）

ノーザンベアード（白／3（白2）／レベル2：BP5000）

ヴェロキ・ハルパー（赤／1／レベル2：BP3000）

ネクサス：なし

バースト：なし

「ドローステップ……来たか」

導はドローステップで引き寄せたカードを見て、口角を吊り上げる。

「どうやら、キーカードを手札に引き込んだようだ。」

「メイנסテップ！ 太陽よ、炎まといて龍となれ!! 太陽龍ジーク・アポロドラゴン、

召喚!!」

導がスピリットの召喚を宣言すると、導の背後からジークフリードと同じようになりしりとした体躯を持つ、赤い竜が姿を見せる。

地面から姿を見せたジークフリードに対し、アポロドラゴンは途中からその翼をはばたかせ、フィールドに着地し、咆哮をあげた。

それに反し、ヴェロキ・ハルパーとノーザンベアードはエネルギーが抜き取られたの

か、ぐったりと力なくうなだれる。

どうやら、ジーク・アポロドラゴンをレベル2で召喚した影響のようだ。

〈第8ターン〉

導／ライフ：3、リザーブ：3↓0、トラッシュ：0↓4、手札：8↓7

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

ザニガン（白／1（赤1／白1）／レベル1：BP1000）

ノーザンベアード（白／3（白2）／レベル2：BP5000↓レベル1：

BP3000）

ヴェロキ・ハルパー（赤／1／レベル2：BP3000↓レベル1：BP

1000）

太陽龍ジーク・アポロドラゴン（赤／6（赤2、青2）／レベル2：BP

6000）

ネクサス：なし

バースト：なし

「さらに、ジーク・アポロドラゴンに砲竜バル・ガンナーを直接合体!! 不足コストはザ

ニガンとヴェロキ・ハルパーから使用。よって消滅！」

「えっ?!」

「消滅させちゃうルン?!」

スピリットは、フィールドのその存在を維持するために最低1つのコアを必要とする。

そのコアがすべて取り除かれた時、スピリットはフィールドに存在する力を失い、消滅してしまう。

むろん、防御やコスト確保のためにあえてそうすることもあるが、導がその選択をしたことに驚いているようだ。

〈第8ターン〉

導／ライフ：3、リザーブ：0、トラッシュユ：4↓6、手札：7↓6

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

ノーザンベアード（白／3（白2）／レベル2：BP5000↓レベル1：

BP3000）

太陽龍ジーク・アポロドラゴン（赤／6（赤2、青2）／レベル2：BP

6000+2000）

砲竜バル・ガンナー（赤／4（赤2）／ジーク・アポロドラゴンと合体中）

ネクスス：なし  
バースト：なし

だが、そんな外野の悲鳴を気にする様子もなく、導はアタックステップへと突入する。「アタックステップ！ 合体スピリットでアタック！ アタック時効果により、デッキからカードを1枚ドロウ。そして、BP4000以下の相手スピリットを破壊する」  
そう宣言した瞬間、ジーク・アポロドラゴンはその背に取り付けられた砲台をドラムスのフィールドへ向けた。

それと同時に、ライト・ブレイドラが甲高い声で雄たけびを上げる。

「ライト・ブレイドラの『強化』<sup>チャージ</sup>！ 破壊する相手スピリットのBP上限を+1000。よって、BP5000以下のスピリットを破壊する!!」

本来なら、これでジークフリードは確実に葬れた。

しかし、ソウルコアが乗っている間、ジークフリードのレベルは最高レベルとなる。そのBPは10000。

破壊するにはまだ遠いため、導は回復状態のレイニードルを対象に選択した。

ジーク・アポロドラゴンの大砲に撃ち抜かれ、レイニードル1体が撃沈し、ドラムスはスピリットで防御することができなくなる。

「くっ！ フラッシュタイミング！ マジック『サイレントウォール』！ このバトルが

終了したとき、アタックステップを終了する!」

〈第8ターン〉

ドラムス／ライフ：5↓3、リザーブ：3↓4↓0↓2

ジーク・アポロドラゴンがその口を開き、炎を吐き出すとドラムスの前に赤い光を放つ障壁が出現し、炎からドラムスを守った。

しかし、砕け散った障壁の破片がドラムスを襲いかかったことで、プロテクターに表示されている青い光が二つ、消滅する。

「え? ライフって、シンボルの数だけ減るんだよね?」

「そうだよ?」

「じゃあ、なんで2個も? ジーク・アポロドラゴンのシンボルって赤1つじゃ……」  
えれながドラムスのライフが二つ削れたことに疑問を覚え、ひかるに問いかけた。

その問いかけに、ひかるではなくプルンスが答えを示す。

「普通ならそれでプルンスが、いまのジーク・アポロドラゴンは合体状態ブレイブでプルンス。シンボルを持つているブレイブと合体しているスピリットは、そのブレイブのシンボルも加算されるから、いまはダブルシンボルのスピリットということになるんでプルンス」

「へえ……」

プルンスの説明に、一応、納得したのか、えれなが声を漏らす。

そんな観客席の様子を気にする様子もなく、導はバトルを進めようとするが。

「ターンエンド」

サイレントウォールの効果により、これ以上、アタックを行うことができないため、ターン終了を宣言する。

この一撃を回避できたことに安堵したのか、少しばかり焦りを見せていた顔に笑みが浮かぶ。

「スタートステップ！」

〈第9ターン〉

ドラムス／ライフ：3、リザーブ：2↓7、トラッシュユ：4↓0、手札：6↓7

フィールド

スピリット：龍皇ジークフリード（赤／6（赤3）／レベル3（効果による）：B P 1  
0000）

「メインステップ！ リザドエッジ2体をレベル2で召喚！」

〈第9ターン〉

ドラムス／ライフ：3、リザーブ：7↓3、トラッシュユ：0、手札：7↓5

フィールド

スピリット：龍皇ジークフリード（赤／6（赤3）／レベル3（効果による）：B P 1

0000)

リザドエッジ (赤/0/レベル2 : BP3000)

リザドエッジ (赤/0/レベル2 : BP3000)

「アタックステップ! 龍王ジークフリードでアタック!!」

「ノーザンベアードでブロック! ブロック時効果により、ボイドからコア一つをノー

ザンベアードに追加! よってレベル2に上昇!」

「だが、破壊される!」

ドラムスのアタック宣言により襲撃してきたジークフリードを、ノーザンベアードが迎え撃つ。

しかし、ジークフリードのBPは10000。効果によってレベルが上がってもノーザンベアードでは太刀打ちすることはできず、ジークフリードに薙ぎ払われてしまった。

〈第9ターン〉

導/ライフ : 3、リザーブ : 0↓2、トラッシュ : 6、手札 : 6

フィールド

スピリット : ライト・ブレイドラ (赤/0/レベル1 : BP1000)

太陽龍ジーク・アポロドラゴン (アタックにより疲労状態) (赤/6 (赤2、

青2) / レベル2 : BP 6000 + 2000)

砲竜バル・ガンナー (赤 / 4 (赤2) / ジーク・アポロドラゴンと合体中)

ネクサス : なし

バースト : なし

「ちっ……」

だが、ドラムスは何かを狙っていたのか、予測が外れたことに苛立ちを覚えたように舌打ちをしてきた。

残るリザドエッジによるアタックも可能であるにもかかわらず、ドラムスはここでターン終了を宣言し、ターンは導へと移る。

〈第10ターン〉

導 / ライフ : 3、リザーブ : 2 ↓ 9、トラッシュ : 6 ↓ 0、手札 : 6 ↓ 7

フィールド

スピリット : ライト・ブレイドラ (赤 / 0 / レベル1 : BP 1000)

太陽龍ジーク・アポロドラゴン (赤 / 6 (赤2、青2) / レベル2 : BP

6000 + 2000)

砲竜バル・ガンナー (赤 / 4 (赤2) / ジーク・アポロドラゴンと合体中)

ネクサス : なし



バースト：なし

ドローステップになり、デッキからカードを引いた導の顔に不敵な笑みが浮かぶ。どうやら、導が勝利するために必要だと判断したカードが来たらしい。

「メインステップ! 龍神の弓、天馬の矢! 戦いの嵐を鎮めよ!! いて座の十二宮Xレア『光龍騎神サジツト・アポロドラゴン』、レベル2で召喚!!」

その瞬間、フィールド上空にいて座が瞬き、星々から光が降り注ぐ。

光は一つに集まり炎の球体となり、その中から、馬の体と足を持つ人馬の龍が降り立った。

〈第10ターン〉

導／ライフ：3、リザーブ：9↓2、トラッシュユ：0↓4、手札：7↓6

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

太陽龍ジーク・アポロドラゴン（赤／6（赤2、青2）／レベル2：BP6000+2000）

砲竜バル・ガンナー（赤／4（赤2）／ジーク・アポロドラゴンと合体中）

光龍騎神サジツト・アポロドラゴン（赤／8（赤4）／レベル2：BP1

0000）

「さらに、『輝竜シャイン・ブレイザー』をサジツト・アポロドラゴンに合体フレイグ！ 不足コストは合体スピリットより確保」

ジーク・アポロドラゴンから力が抜けていくと、その代償のようにサジツト・アポロドラゴンの背後に機械でできた鳥のようなスピリットが姿を現す。

機械鳥が自身の体を分解させると、サジツト・アポロドラゴンの背に取り付く。

〈第10ターン〉

導／ライフ：3、リザーブ：2↓0、トラッシュユ：4↓6、手札：6↓5

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

太陽龍ジーク・アポロドラゴン（赤／6（赤2、青2）／レベル2：BP

6000+2000↓レベル1：BP4000+2000）

砲竜バル・ガンナー（赤／4（赤2）／ジーク・アポロドラゴンと合体中）

光龍騎神サジツト・アポロドラゴン（赤／8（赤4）／レベル2：BP1

0000+5000）

輝竜シャイン・ブレイザー（赤／5（赤2、青2）／サジツト・アポロ

ドラゴンと合体中）

「アタックステップ！ ジーク・アポロドラゴンでリザドエッジに指定アタック！ ア

タック時効果により、デッキから1枚ドロワー! BP4000以下の相手スピリット1体を破壊する! 《強化》によって、BP上限は5000にアップ!!」

「フラッシュタイムング! マジック『リブートコード』! 疲労状態の自分スピリットすべてを回復する!! さらにマジック『ソウルオーラ』! 自分スピリットすべてのBPを+2000。ソウルコアが乗っているスピリットはさらに+3000される!! 『ソウルオーラ』に使用するコストの不足分はリザドエッジ1体から使用。よってレベル1にダウン!」

〈第10ターン〉

ドラムス/ライフ:3、リザーブ:3↓0、トラッシュ:0↓4、手札:5↓3

フィールド

スピリット:龍皇ジークフリード(赤/6(赤3)/レベル3(効果による):BP10000↓16000(『ソウルオーラ』による))

リザドエッジ(赤/0/レベル2:BP3000↓レベル1:BP1000↓4000(『ソウルオーラ』による))

リザドエッジ(赤/0/レベル2:BP3000↓6000(『ソウルオーラ』による))

ドラムスが手札のマジックを使用したことで、フィールドから白い光が降り注ぐ。

その光に力を与えられたのか、疲労していたジークフリードが立ち上がる。

さらに赤い陽炎がリザドエッジたちからもあふれ出し、3体のスピリットは一斉に咆哮をあげた。

レベルが下がったりザドエッジはジーク・アポロドラゴンの砲撃を受けてしまい、消滅するが。

「残ったりザドエッジでブロックする！」

残ったもう一体のリザドエッジが果敢にジーク・アポロドラゴンに立ち向かっていく。

ジーク・アポロドラゴンはその砲台をリザドエッジに向け、砲撃を行うが、リザドエッジがその砲身に体をつっ込んだことで大砲が爆発。

ジーク・アポロドラゴンはその爆発に巻き込まれて姿を消してしまう。

〈第10ターン〉

導／ライフ：3、リザーブ：0↓1、トラッシュ：6、手札：5

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

砲竜バル・ガンナー（アタックにより疲労状態）（赤／4（赤2）／レベル

1：BP2000）

光龍騎神サジット・アポロドラゴン（赤／8（赤4）／レベル2：BP10000+5000）

輝竜シャイン・ブレイザー（赤／5（赤2、青2）／サジット・アポロドラゴンと合体中）

ドラムス／ライフ：3、リザーブ：0↓3、トラッシュ：4、手札：3  
フィールド

スピリット：龍皇ジークフリード（赤／6（赤3）／レベル3（効果による）：BP10000↓16000（『ソウルオーラ』による））

「バル・ガンナーはフィールドに残す！ 続けて、サジット・アポロドラゴン、ジークフリードを指定アタック!!」

「BPはこちらが上！ 迎え撃て、ジークフリード!!」

「フラッシュタイミング！ マジック『スターリードロー』！ サジット・アポロドラゴンのBPを+2000！ さらにマジック『バーニングサン』！ 手札のブレイブ『トレス・ベルーガ』をノーコストで召喚。サジット・アポロドラゴンに合体させ、回復！ 不足コストはバル・ガンナーより使用。よって消滅!」

「なっ?! しかし、サジット・アポロドラゴンにはすでにシャイン・ブレイザーが……」  
「サジット・アポロドラゴンは2体まで合体できる」

## 〈第10ターン〉

導／ライフ：3、リザーブ：1↓0、トラッシュ：6↓2、手札：5↓3

フィールド

スピリット：ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

光龍騎神サジツト・アポロドラゴン（赤／8（赤4）／レベル2：BP1

0000+5000+6000↓23000（スターリードローによる）

輝竜シャイン・ブレイザー（赤／5（赤2、青2）／サジツト・アポロド

ラゴンと合体中）

トレス・ベルーガ（青／5（青2、赤2）／サジツト・アポロドラゴンと

合体中）

導の手札から青白い光がサジツト・アポロドラゴンに放たれる。

その光の中を、三つの首を持つ青い獣が駆けていき、サジツト・アポロドラゴンに激突すると、サジツト・アポロドラゴンのまとう鎧が金色へと変わった。

さらなる力を得たサジツト・アポロドラゴンがジークフリードに向かっていくと、ジークフリードはその拳で迎え撃つ。

だが、数度の激突を制したのはサジツト・アポロドラゴンの方だった。

「輝竜シャイン・ブレイザー、合体時効果。BP8000以上の相手スピリットを破壊し

た場合、はかいしたスピリットのシンボル分、相手ライフを砕く」

「くっ……」

〈第10ターン〉

ドラムス／ライフ：3↓2、リザーブ：3↓4

「これで最後だ! ダブル合体スピリット、奴の残りのライフを打ち砕け!!」

サジツト・アポロドラゴンが弓を呼び出し、その弦を引く。

その瞬間、赤い光が矢となり、サジツト・アポロドラゴンの手の中に現れ、サジツト・アポロドラゴンが弦を手放す。

すると、矢はそのシンボルの数である三本に分裂し、ドラムスへと向かっていく。

三本の矢に貫かれ、ドラムスのライフはすべて砕け散り、バトルは導の勝利で終わった。

## ブルーキャット、再び?!

プリンセススターカラーペンを所持するドラムスとのバトルに勝利した導はバトルフィールドから帰還した。

同じタイミングでドラムスも帰還していたのだが、まさか自分が敗北するとは思っていなかったのか、膝をつき、呆然としている。

そんなドラムスに近づき、導は右手を差し出す。

「なんの、つもりだ?」

「そのままじゃ話したくても話せない」

それに、と導は笑みを浮かべながら続ける。

「バトスピをした後は、互いの健闘をたたえて握手をするものだ」

「……ふふつ。地球には随分と変わった風習があるんだね……」

ドラムスは笑みを浮かべながら、導の手を取る。

導はドラムスを助け起こすため、引っ張り上げようとした。

だが、ドラムスの身長も体の大きさも、導の倍以上はあったため。

「……すまん、やっぱ自分で立ってくれ」



「まあ、無理だろうな」

助け起こすことができず、ドラムスは苦笑を浮かべながら、自力で立ち上がった。

「さて……確かにバトスピの勝負には負けた。約束通り、スタープリンスの力は君たちには渡そう」

そう話すと、ドラムスは近くにいた警備員に視線を向け、導たちを屋敷内に案内するよう指示を出す。

警備員はその指示に従い、導たちを誘導する。

促されるままついていき、しばらく歩くと、導たちの目の前に鍵のかかった重厚な扉が立ちふさがった。

「少々、お待ちください」

警備員が扉を開けようと、鍵穴に鍵を差し込む。

だが、その違和感に警備員の顔に焦りが浮かぶ。

まさか、と一言呟くと、警備員は扉を開ける。

「うわあっ!!」

「(、これは……)」

扉の向こうに広がっている金銀財宝や宝石、石像や絵画など、ありとあらゆる貴重品がそこには広がっていた。

その部屋の奥に、プリンセススターカラーペンを保管したケースがあったが、その隣にあるスペースに、見覚えのあるシルエットがある。

その姿に気づいた警備員とプルンスが同時に声をあげた。

「貴様、何者っ?!」

「怪盗ブルーキャット!!」

その声に気づいたのか、ブルーキャットはこちらの方へ振り向き、素早く警備員に向かっていき、その顔にスプレーを噴射する。

睡眠薬かしびれ薬の類をスプレーしたのか、警備員は即座に対応することができず、その場に倒れ込んでしまった。

当然、ひかるたちは何をしたのか、慌てた様子でブルーキャットに問いかけるが。

「安心なさい。ただの眠り薬よ。二、三時間すれば目を覚ますわ」

と、傷つけていないことをあっけらかんとした態度で話す。

ブルーキャットはそのまま視線を導の方へ向け、口元に笑みを浮かべながら語りかけてくる。

「意外と早い到着だったわね。もう決着がついたのかしら」

「見ていたのか」

「ええ。あなたが一人でドラムスに交渉しようとしていたときからね」

にやり、と笑みを浮かべながら、ブルーキャットはそう告げる。

「本当はあなたたちに力を借りようと思ったのだけど、囹になつてくれてたおかげで簡単に侵入できたわ」

「別にお前に助力するつもりはなかったんだがな」

「そうだよ！ それに導くんは最初からドラムスさんと話をするつもりで邸に入ったんだよ！」

「最初から盗みを働こうとしてたお前とは違うでプルンス!!」

辛かった時期にブルーキャットのもう一つの顔である宇宙アイドル、マオの歌声とパフォーマンスに救われたプルンスは、彼女の言葉に激しい怒りをぶつけている。

悪事を働こうとしているから、というよりも、ブルーキャットに青春を奪われたという私怨からの怒りのように思えるのだが、導たちは気にせずブルーキャットのほうへ歩み寄っていく。

「ああ、安心して。スタープリンセスの力はあなたたちに渡すわ。わたしはこっちのほうに用があるの」

そう言つて、ブルーキャットは虹色に輝く巨大な宝石と、その宝石と同じ輝きを放つ装飾が施された美術品に視線を向ける。

「それつて、オークションに出品されてた」

「惑星レインボーの宝でプルンスな」

「ええ……」

突如、その星に住む全住人が石化したことで滅びてしまった惑星で採取された希少価値が非常に高い宝石。

当然、金に物を言わせてあらゆる貴重なお宝をコレクションすることが趣味であるドラムスも持っていた。

その情報をつかんだからか、こうしてブルーキャットも侵入してきたのだろう。

ふと、その口元に笑みが浮かんでいることにひかるとえれな、プルンスは気づく。

その笑みは、先ほどまでの自分が持つ感情をごまかすための微笑みではなく、心の底から浮かんできた、本当の笑顔のようにひかるもえれなも感じていた。

「さて、それじゃ」

話を切り替えるように、ブルーキャットは腰のポーチに手を伸ばし、ボールのようなものを取り出し、放り投げた。

すると、ボールは巨大なコンテナのような箱へと変化する。

ひかるたちが驚きの声をあげると。

「これはカプセル倉庫よ。この中にお宝を入れていくの」

簡単に説明し、せっせとお宝を詰め込んでいく。

ある程度の量を詰め終わり、とんずらしようとした瞬間。

「悪いけど、そうはさせないよー!」

部屋の上部から、突如、ドラムスの声が響く。

視線を向けると、黄金の竜の装飾が施された出窓のような場所でドラムスが仁王立ちになっている姿がそこにあつた。

そのドラムスの手には、スイッチのようなものが握られており。

「導、と言ったね。君は早くスタープリンセスの力を持つていくがいい! 僕はブルー

キャットの方に用があるんでね!!」

そう言うと、ドラムスは手元のリモコンのスイッチを押す。

すると、突然、装飾のドラゴンが動き出し、近くにあつた美術品を握りつぶした。

「なっ?!?!」

「自分のコレクションを壊したルン?!」

「何を考えてるの?!」

突然、自分のコレクションを壊したことにララとえれなが困惑して悲鳴を上げる。

だが、ドラムスはまったく意に介する様子もなく。

「ブルーキャット。金に物を言わせて調べさせてもらつたよ。君は惑星レインボアの宝以外、盗み出したものは貧しい人に渡しているそうじゃないか」

どうやら、ブルーキャットは非合法な手段でお宝を奪い取ることやお宝を盗み出すまでの過程を楽しむ快樂者でもなく、貧困層の支援のために窃盗を行う義賊のような怪盗だったらしい。

だが、ドラムスからすれば。

「お宝の価値もわからない、さもしい一般人に僕のコレクションを渡すくらいならここで粉碎する！ コレクションはまた買い直せばいいしな!!」

価値あるものはその価値をわかるものが持つべき、という考えであるらしく、ブルーキャットの行動はひとかけらも共感できる部分がないようだ。

ドラゴンの手は、次々に美術品を破壊していき、ついにブルーキャットのカプセル倉庫へと手が伸びる。

## カップード出現?! スタープリンセスの力は誰の手に!

盗んだ美術品を貧困層の人々の支援に使っていたブルーキャット。

だが、ドラムスは価値あるものはその価値を理解できる人間の手に置くべきという考えから、ブルーキャットにコレクションを奪わせまいとして、奪われるくらいなら破壊することを選び、次々に自分のコレクションを破壊していった。

その手はついに、惑星レインボーの宝を収納したカプセル倉庫にも届き。

「この倉庫に入っているものだって……っ!!」

倉庫ごと、中に入っているものを壊そうとしたしていた。

その姿に見苦しさを感じ、導はカードケースから『射手星鎧ブレイブサジタリアス』のカードを引き抜き、頭上に掲げる。

その瞬間、カードから赤い光があふれ、導を包み込む。

光が収まると、赤い鎧をまとった導の姿がそこにあつた。

それに続くように、ひかるたちも。

「みんな、プリキュアに変身するよー!」

ペンダントを手に取り、スターカラーペンを取り出していた。

「スターカラーペンダント！ カラーチャージ!!」

『煌めく、星の力で!! 憧れの“わたし” 描くよ!! トウインクル、トウインクル、プリキュア! トウインクル、トウインクル、プリキュア! スター☆トウインクル…… スター☆トウインクルプリキュア!♪』

「空に輝く、きらきら星! キュアスター!!」

「天にあまねく、ミルキーウェイ! キュアミルキー!!」

「宇宙を照らす、灼熱の煌めき! キュアソレイユ!!」

「夜空に輝く、神秘の月明かり! キュアセレーネ!!」

『スタートウインクル! プリキュア!!』

四人が同時に変身すると、変身する姿を見ていたドラムスは驚愕の声をあげる。

だが、そんなドラムスをよそに、スターたちは床を蹴り、ドラゴンの手に取り付く。

未来もカードケースからカードを引き抜き、再び頭上にかざす。

「マジック『リミテッドバリア』を使用!!」

その瞬間、カプセル倉庫をドラゴンの手から守るように、六角形の光がコーティングされる。

さらにスターたちはカプセル倉庫から引き離そうと、ドラゴンの手を押し上げていく。



「なぜだ、なぜそこまで必死になるっ?!」

なぜブルーキャットが盗もうとしていたものを守ろうとするのか、ドラムスは理解できず、叫んでいた。

ブルーキャットもまた、なぜ変身したのか疑問を呈してきたが。

「だって、ブルーキャット、笑ってたもん!」

「は?」

「レインボーの宝を見ていた時のブルーキャットの顔は、笑ってたんだ。いつもの笑顔じゃない、本当に、心から出た笑顔だった!」

「サングラスつけてたってわかるよ、ブルーキャットは本当にその宝物が大好きだってこと!」

その大切な宝を壊させたくない。

その思いが、スターたちを突き動かしているようだ。

「なら、君はどうなんだ?! 馬神導!!」

ドラムスは突然、導の方へ視線を向け、問いかけてくる。

「どうやら、導がカードの効果を実用でも使うことができることを知っているらしい。」

「別に俺はこの怪盗の笑顔がどうか、怪盗が宝をどう思っているのか。そんなものは知らん」

「ならー！」

「だがな」

導は視線をだけでドラムスを制し、静かに続けた。

「やり方こそ間違っているかもしれないが、自分と似た境遇の連中をどうにかしてやりたいって思いは、味方してやりたくなる」

導の両親、馬神弾と馬神まゐは地球をよりよい世界にしようとする貧困層の集まる地域や発展途上にある地域の支援を現地で行ったり、国際機関にその地域の現状を伝え、どうにか支援の輪を広げてくれないか訴える活動を行っている。

それを知っている導は、ブルーキャットの行動に何か感じるものがあつたのだろう。だからこうして、ドラムスを止めようとしているのだ。

まるでバトルフィールドに立っているときのような強く冷たい視線に気圧されたのか、ドラゴンの動きが少しばかりゆるむ。

その隙に、ミルキーがドラムスの手にあるリモコンがこのドラゴンを止めるために必要になることを話す。

「なら、わたしに任せてっ!!」

その言葉を聞き、ドラゴンの手を抑えていたスターがドラムスに向かって跳び上がる。

ブルーキャットもそれに遅れて、ワイヤーロープを巧みに使い、ドラムスの目の前に着地した。

「悪いけど、任せられないわ……信じられるのは自分だけなのよ!」

「え……」

同時に着地したスターに対し、ブルーキャットがそう宣言すると、ドラムスに詰め寄り、リモコンを渡すように迫る。

「さあ、そのリモコンを渡しなさい! それで終わりよ!!」

「ぐう……っ!!」

「いいや、まだ始まってすらいらないな」

ドラムスが抵抗し、半歩下がると、背後にある扉の向こうから部外者の声が響く。

扉が開くと、そこにはノットレイターの構成員と、レーザーブレードを持ったカップードが姿を現した。

「やはり俺は幸運と見える。スタープリンセスの力を探していたら、プリキュアにも会えたのだからな」

「カップードっ?!」

「なんだ、お前らはっ?! どうやってここに来た?!」

突然の乱入者に、ドラムスも動揺を隠せず、怒号をあげる。

だが、その怒号を涼しい顔で受け流し、カッパードは空から侵入したことをドラムスに告げ。

「我が刃よ！ とくと吸え!!」

どぶのような色をした光を自分の武器にまとわせ、をドラムスへと向ける。

その瞬間、ドラムスの胸に黒い光をまとうハートが出現し、ドラムスの体から離れていく。

「歪んだ、イマジネーション!!」

そのハートがカッパードの武器に吸い込まれると、ドラゴンの頭のような装飾を持つ、三つに分かれたこん棒——三節棍へと姿を変える。

ハートを吸い込まれたドラムスは気を失い、その場に倒れ、リモコンが床に落下した。

ブルーキャットがそのリモコンを手に取り、ドラゴンの動きを止めると、ミルキーたちがスターとブルーキャットに合流する。

その瞬間、カッパードはドラゴンの頭がついた棍を回転させ。

「まとめて、片付けてやる!!」

遠心力を利用した勢いで武器を振り回す。

スターとソレイユは後ろに飛びのいて、ミルキーとセレーネ、ブルーキャット、導は身をかがめてその攻撃を回避する。

だが、後方は壁がなく、床もない空間であったため、スターとソレイユはそのまま下の階の宝物庫に落ちていく。

「逃がさん!」

カップードは二人を追いかけて下へ降りていく。

その後が続くように、構成員たちが駆け寄ってくるが。

「あなたたちの相手は」

「わたしたちルン!」

セレーネとミルキーが迎え撃つ。

当然、一緒にいた導も迎え撃つこととなり。

「マジック『サジツトノヴァアロー』を使用!!」

カードケースから赤のマジックを引き抜き、使用を宣言する。

その瞬間、導の右腕に取り付けられたボウガンに炎の矢が装填され、弦が引かれた。

なんとなく、その後はどうすればいいのかを理解した導は右腕を前方に突き出し、左手で右腕を支える。

「ミルキー、セレーネ! 跳べ!!」

その合図に半歩遅れて、導は右手を強く握る。

その瞬間、装填された炎の矢がまっすぐに構成員たちの方へ飛んでいき、彼らを吹き

飛ばした。

一方、階下では、強化されたカッパードの武器にスターとソレイユが吹き飛ばされただけでなく。

「これか」

「ま、まづい……」

スタープリンセスの力のありかをカッパードに知られてしまい、回収されてしまう。

「スタープリンセスの力、いただい……」

だが、カッパードが撤退するよりも早く、上から飛んできた青いカードに目をふさがれてしまう。

そのカードは、ブルーキャットの予告状だった。

「キュアスター!!」

「オツケーっ!! たあああああつ!!」

ブルーキャットの合図で立ち上がったスターがカッパードの武器に向かってアツパーを決める。

スターのパンチで、カッパードの武器に施された、ドラゴンの装飾の口の中に入っていたスタープリンセスの力がソレイユの方へ飛んでいく。

ソレイユは飛んできたそれをつかむと、スタープリンセスの力はおとめ座のプリンセ

ススターカラーペンへと変化する。

「プリキュア! おとめ座!! ソレイユシユートっ!!」

おとめ座のプリンセススターカラーペンの力を受けたソレイユシユートを受け止めるカップードだったが、受け止めきれず、ドラゴンの口の方へと弾き飛ばす。

突然、ソレイユシユートが前方から放たれたため、対応しきれなかった構成員たちは吹き飛んでしまう。

どうにか対応できたミルクィとセレーネ、導の三人は後方へと跳び、宝物庫へと降りてくる。

「みんな、いくよ!」

四人そろった時点で、スターが合図を送る。

その瞬間、四人は互いの背中を預けるような陣形を取った。

「宇宙に輝け! イマジネーションの力! トウインクルステッキ!!」

「スタートウインクル!」

「ミルクィトウインクル!」

「ソレイユトウインクル!」

「セレーネトウインクル!」

「四つの輝きを、いま一つに! プリキュア! サザンクロス・ショット!!」

四人のイメージーションの光が南十字星の形に変わり、カッパードを飲み込もうとする。

さすがにその光にのまれたら無事では済まないと悟ったのか、カッパードは武器を手放し、回避した。

そのおかげか、カッパードはサザンクロス・シヨットによる浄化を免れたが、武器は浄化されてしまい、取り込まれていたドラムスのイメージーションが浄化され、ドラムスの中へと戻っていく。

「くっ……今日は武器の調子がよくなかった！」

カッパードは負け惜しみを言いながら、その場から逃げていった。

その後、さすがに何度もひどい目にあつたことと、導とバトスピで敗北したことが重なったからか、ドラムスは意外とすんなり、スタープリンセスの力をひかるたちに渡してくれた。

だが、ブルーキャットが以前のオークションで盗んだ品物については返却を求め、交渉しようとしたらしく。

「ブルーキャットから、俺たちがあんたの私兵になるからと言われて、勧誘したと」

「そういうことだ！」



ドラムスが雇用しているドラゴン団に迎え入れることを宣言していた。

さすがに地球以外の惑星に長い間いるわけにはもいかなかったため、ノリノリになつていたひかる以外の全員がその申し出を断ったことは言うまでもない。

もつとも、お人好し集団でもある彼女たちは。

「ドラゴン団には入らないけど、なにか困ったことがあつたらかけつけるから」

と、無償で有事の際の手助けを約束していた。

そんなひかるたちの様子を、ブルーキャットは上空から見下ろし、不敵な笑みを浮かべながら。

「プリキュア、スタープリンセスの力……けど、最後に笑うのは」

どこか不穏な言葉を口にしていた。

そのことを知っている人間は、その場には誰もいない。

## レインボーの星へ！

ドラムスからおとめ座のプリンセススターカラーペンを受け取り、おとめ座のスタープリンセスを復活させてから数日。

漫画家であるひかるの母親が少女漫画雑誌「月刊あさがお」で漫画を連載できるかどうかという瀬戸際にあつたため、ひかるに引つ張られ、半ば無理矢理、手伝わされることになったり、まどかの弓道大会の応援に駆り出されたりしていた導は、久々に自室で一人、デツキと向き合っていた。

——今のデツキのまま、勝ち続けることができるかは怪しい。できる限り、俺も自分のデツキに手を入れて備えなきやな

一人でいる方が気楽、というのは嘘ではない。

幼稚園時代の頃から、なぜか大人の視線が冷たいことを感じ取っていた。

その理由は小学生に上がったころ、両親の友人である硯という冒険家や天才科学者として名をはせている兵堂博士から聞き、担任の教師からもそれとなく聞いてみた。

だが、コアの光主である両親に対し、世間が行っているバッシングのほうがおかしいと感じ、声をあげようとしても、力のない子どもの言うことだ。

誰も、少なくとも周囲にいる人間が誰一人として耳を貸してくれない。

結果、年齢や立場に関係なく、自分の力を示すことができる唯一の手段、バトルスピリッツでしか、他人を信用できなくなっていた。

いままではそれでいいと思っていたし、そうやって過ごすしかないと思っていたのだが、ここ最近は変わってきている。

半ば強引に誘う押し強さとはかく、ひかるやララたちと過ごす時間に、いままで感じたことのない安堵を覚えるようになったのだ。

最初こそ、マギサから自分の役割を与えられ、役目だからと言うことで引き受けたが、いまは純粹に、知人として自分が力になることができる範囲で、力になりたいと思っている。

だからこそ手を抜くことはできないし、したくない。

その想いが、今まで以上に真剣に導をデツキに向き合わせていた。

「しるるべくるん!!」

「馬神くーんっ!」

しばらくすると、元気のいい声が庭の方から聞こえてきた。

窓から下を見てみると、そこにはひかるとララ、えれな、まどかの四人が手を振っている。

「どうした？」

「反応があつたルン！ ロケットに来てほしいルン!!」

どうやら、新たなスタープリンセスの力を見つけたので、導を呼びに来たらしい。

いまはララが声をかけているが、このまま無視していたらひかるが突撃してくることは目に見えている。

「少し待ってろ」

そう言つて、導は窓を閉め、戸締りとガスの確認を済ませてから、調整したてのデッキを手に外へ出た。

その後、ララのロケットに乗り宇宙へ出ることしばし。

「うわあっ!!」

窓の外に見える虹色の惑星に、ひかるが目を輝かせながら歓声をあげる。

その惑星が「惑星レインボー」であることをプルンスが告げると、全員の顔に動揺が走つた。

つい先日、ブルーキャットが惑星レインボーのお宝を手に入れるため、ドラムスの邸に潜入したことが記憶に新しいからだろう。

だが、実際に惑星に降り立つと、その動揺はさらに強くなった。

一面、砂と石ばかりの場所、というだけならまだこの惑星の一部かもしれない。

しかし、やっと見つけたと思ったこの星の住人と思しき人影が、駆け寄ってみれば石像だったのだ。

その緊迫した表情に、誰かの手によって作られたものではないことを想像することは簡単だった。

そのリアリティの強さは、石像を見つけた時、思わず導が。

「人の手でこれが作られたってなら、かなり名のある人か、よっぽど悪趣味な人間だな」と評してしまうほどだ。

「何が起こったのかは謎でプルンス。レインボー星は宇宙星空連合に所属していなかったせいで、あまり調査はされなかったんでプルンスよ」

「人口およそ1,800人、その全員が石になった。データにはそうあったルン……数字では、わかっていただけ……」

プルンスとララは、地球に来る前から、惑星レインボーのことは話できいていたらしい。

だが、話で聞いただけであることと、実際に目にすることは天と地ほどの差がある。シヨックを受けながらも、ひかるたちはペンダントの反応を追い、歩き続けた。

すると、目の前に岩山が広がり。

「この奥からルン」

ペンドアントの反応も、その向こうからであることがわかった。

さすがに歩き続けたことで疲れてしまったのか、ひかるは手ごころな岩に腰掛け、山肌を背を預けた瞬間。

「うわわわわっ?!?!」

「ひかる?!」

「星奈?!」

「大丈夫ルン?!?!」

ひかるが背後の岩山に吸い込まれていった。

ひかるの姿が突然消えたことで、ララたちは驚き、駆け寄るが。

「な、なにこれ……?」

今度は岩肌の向こうからひかるの上半身が飛び出してくる。

恐る恐る、と言った様子でプルンスが岩肌に手を伸ばすと、さきほどのひかると同じように手の先が岩肌に吸い込まれていく。

どうやら、この岩肌は立体映像ホログラムであり、洞窟を隠すためのカモフラージュだったようだ。

洞窟の中を進んでいくと、そこにはレインボー鉱石発掘の作業中に石化してしまった

ののか、炭鉱夫らしきレインボー星人の石像があった。

さらに奥へ進んでいくと。

「わあ……っ!!」

「壮観だな……」

「これほどの貴重品が……」

そこには大量の美術品や工芸品の類が山積みになっていた。

ふと、ひかるはその中の一つに目をやる。

それが、ドラムスの宝物庫から持ち出された、惑星レインボーの宝を用いた装飾品であることを思い出す。

「これって、ドラムスさんの邸からブルーキャットが持ち出していった……」

よくよく見てみれば、そこにある美術品や工芸品にはすべて、同じ石が使用されていることがわかる。

ドラムスの話では、ブルーキャットは惑星レインボーの宝以外は貧困層に分け与えているという。

ならば、レインボーの宝はどこにあるのか。

それを考えれば、おのずと答えは見えてくることだ。

「それじゃ、ここはブルーキャットのアジト?」

「その可能性は高いな」

そう返しながら、導がじっと周囲を観察していると、山積みの工芸品の上の方に。

「おい、あれじゃないか?」

スタープリンセスの力が無造作に置かれていることに気づいた。

早速、ひかるたちが回収しようとする。

「スタープリンセスの力、見つけたっつーの」

背後から一昔前の不良少女のような話し方をする幼い声が聞こえてきた。



## レインボー星の真相

「スタープリンセスの力、見つけたっつーの」

スタープリンセスの力の反応があったため、惑星レインボーを訪れていたひかると導  
たち。

探索するうち、ブルーキャットのアジトと思われる洞窟に入り、スタープリンセスの  
力を見つけた瞬間、背後から一昔前の不良少女のような話し方をする幼い声が聞こえて  
きたため、振り向くと。

「お前は……アイワーン！」

「なんでここに！」

「あんたらのペンの反応を追ってきたら、いいもの見つけたっつーの」

どうやら、アイワーンはひかるたちが持っているプリンセススターカラーペンの反応  
を追いかけて、この星にやってきたらしい。

高性能なリーダーはあったが、レインボー鉱石から放出されている電磁波に阻まれ、  
この洞窟内にあったペンには反応しなかったようだ。

「おかげでプリンセスの力、一気にゲットだっつーの！ キヤツハハハハハ！！」

「さて、すべていただきましょう」

アイワーンの背後に控えている猫型獣人異星人、バケニヤーンが同意するように口にする。

奪い取る気満々の二人に対し、ひかるたちはプリキュアに変身し、導は『射手星鎧ブレイヴサジタリアス』をまとい、戦闘態勢に入った。

バケニヤーンとアイワーンを分断し、共闘させることを防ぐことはできているが、バケニヤーンのトリックキーで俊敏な動きに翻弄され、ソレイユとセレーネはそちらにかかりきりになってしまう。

一方、アイワーンは持っている光線銃を乱射するだけなのだが、その威力が高いため、スターとミルキーは防戦一方となっていた。

なお、導は。

「マジック『グラストラップ』、『エンジェリックプレッシャー]ー!」

緑と黄のマジックを使い、アイワーンとバケニヤーンの弱体化を図っていた。

だが、BPを下げる黄色のマジックは、周囲のレインボー鉱石の電磁波の影響かアイワーンの光線銃は威力が下がる気配がなく、相手を拾う状態にさせる緑のマジックは、バケニヤーンの素早い動きに対応できず、すべて外れている。

「赤のマジックは使わないでプルンスか?!」

「赤と青は破壊力が高いからな。余波だけで洞窟が崩れるかもしれない。紫はもつてのほかだ！」

赤と青のマジックで攻撃を行うことは確かに可能だ。

だが、そのどちらにも破壊の余波で洞窟が崩れてしまうかもしれない。

まして、コアを奪う紫のマジックは、これまでの傾向から考えて命そのものを奪ってしまう可能性が高いため、導は戦闘で使いたくないようだ。

何より。

「いまここで派手なマジックを使ったら、石化したレインボー星人も巻き込むことになる」

「そ、それは……たしかにまずいでプルンスな」

導の言葉に、プルンスは冷や汗をかきながら賛同する。

そんな状況下であるため、導がいまできることは。

「マジック『ピュアエリクサー』！」

「ありがと、導くん！」

傷つき、疲労しているスターたちを白のマジックで回復することだけだった。

だが、プリキュアたちに諦めの色はなく。

「データのあなたたちの方が不利ルン！ 観念するルン!!」

「……ああ、ここにいる人間は全員石になってるからノットリガーにできる生命体がないっつーの」

「そうルン！ だから……」

状況が不利である以上、下手に戦闘を続けて取り返しのつかない事態になる前に、投降するようミルキーは告げていた。

だが、そんなミルキーをあざ笑うように、アイワーンは目を細める。

「だってこの星の住民はアタイが石にしたんだっつーの！」

その言葉に、対面しているミルキーはもちろん、その場にいた全員が驚愕する。

アイワーンが語るには、プリンセススターカラーペンはこの星にも存在しており、その反応をキャッチしたアイワーンがペンを渡すよう、この星の住人に命じたのだそうだ。

だが、彼らはその命令を拒絶。アイワーンは実験段階だったダークペンを使用し、奪い取ろうとしたのだが、ペンの力が暴走し、この星にいた全員が石化してしまったのだという。

それだけでは飽き足らず、レインボー鉱石を奪い取り、それを売りさばいて研究資金にしてしまったそうだ。

「……っ!!」

その言葉を聞き、導の目に激しい怒りがともっていた。

自分の目的のために他者を踏みこじることにはためらうことがなく、その行動と結果の責任を自分ではなく犠牲となった他者に押し付ける。

そんな人種が、コアの光主たちの敵のような人間が、導は大嫌いだ。

「マジック……」

導は赤のマジックを引き抜き、発動させようとした。

崩落の可能性があるから使わないということを知っていたプルンスが慌ててそれを止めようとして、アイワーンから視線をそらしてしまう。

それがいけなかった。

アイワーンが一瞬で近づき、プルンスをつかみ、反対側の壁に向かって投げつける。

さらに、バケニヤーンが導に接近し、格闘戦を仕掛け、フワから引き離されてしまう。

そのため、フワが果然に無防備となってしまう。

「ノットリガーにできる生命体なら、ここにいろっつーの！」

「フワーツ!!」

アイワーンは不和を人質に取ることにあっさりと成功する。

むろん、スターたちはフワを返すよう要求するが。

「さっさとプリンセススターカラーペンを渡せっつーの」

アイワーンはプリンセススターカラーペンを要求してくる。

渡すわけにもいかず、膠着状態に入るかと思いきや。

突如、アイワーンが抱えていたフワを、バケニヤーンが抱き上げた。

「バケニヤーン?! 何するっつーの!!」

「この生物も確保するよう、ダークネスト様から命じられております」

自分よりも立場が上の存在にそう命じられているというのなら、うかつにノットリガーにするわけにはいかない。

三つ巴状態ともいえる事態に沈黙が走るが。

「いい匂いフワ〜」

その沈黙を、フワが破った。

トロンとした目で、バケニヤーンにすり寄りながら、いい匂いと口にし。

「ブルーキャットと同じ匂いフワ〜」

「え?」

「バケニヤーン、どういうことだっつーの!!」

まさかの名前に、その場にいた全員が動揺する。

当の本人は。

「……はあ……まさか、香水の匂いでばれるなんてね」

フワを抱えながらスターたちの方へ歩み寄っていく。

歩きながら、バケニヤーンは空いている手でパフュームを取り出し、自分に振りかける。

すると、バケニヤーンの姿は光に包まれ、見覚えのあるシルエットへと変化していく。「変化の状態を維持する香水が仇になるなんてね」

光が収まると、バケニヤーンが立っていた場所には、ブルーキャットの姿があった。

どうやら、バケニヤーンはブルーキャットがノットレイダーに潜入するための姿だったらしい。

## ブルーキャットの秘密

ノットレイダーの幹部、アイワーンに付き従う猫型異星人のバケニヤーン。

その正体は、宇宙をまたにかける怪盗ブルーキャットだった。

その事実には、スターたちはもとより、一番近くにいたアイワーンが最も衝撃を受けており。

「バケニヤーンはどこだっつーの！ いつ入れ替わったっつーの!!」

ブルーキャットに本物のバケニヤーンがどこにいるのか、問いかけていた。

が、その問いかけにブルーキャットはため息をつき、呆れたと言わんばかりの声色で。

「本当におめでたいわね……いないのよ、もともと。バケニヤーンなんて」

「え……」

「ずーつとわたしが化けていたニヤーン」

その言葉に、アイワーンはあることを思い出す。

自分がプリキュアたちと遭遇し、ダークペンを使おうとした時、バケニヤーンはことごとく、慎重に使用するよう忠告したり、人数的に有利な状況では使わせないようにしたりしていたのだ。



「お前、ずっとアタイにペンを使わせたがらなかつたっの……なんのためにだつっの?!」

「まだわからないの? わたしはレインボー星人よ!!」

ブルーキャットの口から飛び出た衝撃の事実、その場にいた全員が驚愕する。

彼女は、石化してしまった同胞を元に戻す方法を探るため、アイワーンに近づいたのだという。

そして、レインボー星人だからこそ、不法に売り飛ばされていった自分の星の宝を取り戻そうと、怪盗をしていたのだ。

「お前……ずっと、だましてたっっの……許せないっっの!!」

いままでずっと自分を騙してきたことにブルーキャットへ怒りをぶつけるアイワーンだが、バケニヤーンがおらず、ノットリガーを出すことができないこの状況で、彼女ができることはない。

そのことをブルーキャットに指摘されると。

「こうなつたら、一か八かっっの!!」

アイワーンはその視線を、石化してしまったレインボー星人の炭鉱夫へ向け、ダークペンを使用する。

「ダークペン! イマジネーションを、塗りつぶせっっの!!」

塗りつぶされたイメージーションが石化した炭鉱夫を包むと、炭鉱夫は石化しているにもかかわらず、ヘルメットをかぶった巨大な灰色の猫へと姿を変えた。

生体活動をしていたない石像がノットリガーになったという事態に、スターたちだけでなくブルーキャットも驚愕の声をあげる。

一方、賭けに勝ったアイワーンは。

「やったっつーの!!」

ノットリガーの肩に乗り、歓喜の声をあげていた。

ノットリガーは手にしていたつるはしを思い切り振り下ろし、壁に穴をあけ、脱出路を作る。

さらにちゃっかり、レインボーの宝が入ったカプセルをわきに抱え。

「プリンセスの力、手に入れたっつーの! レインボーの宝も、また売りさばいてやるっつーの!!」

意気揚々と、洞窟の外へと出ていく。

ブルーキャットはノットリガーを追いかけ、洞窟の外へと出る。

その目には、石像となった同胞をノットリガーにしたアイワーンへの怒りがこもっていた。

「どこまでもてあそばさば気が済むの!!」

「そんなのあたいの勝手だっつーの」

ブルーキャットの怒りの声に、アイワーンはニタニタといやらしい笑みを浮かべながら返す。

さらに、ノットリガーはブルーキャットにめがけてつるはしを振り下ろした。

どうにか後方に飛びのき、ブルーキャットは直撃を回避するが、衝撃は防ぐことができず、吹き飛んでいってしまう。

「たかが石像一体になにむきになってるんだっつーの!!」

追撃とばかりに、ノットリガーは再びつるはしを振り上げる。

だが、そのつるはしがブルーキャットに届く前に、ミルキーが割って入りバリアを展開した。

それと同時に。

『リミテッドバリア』!!」

マジックの使用を宣言する声が響き、ミルキーのバリアとつるはしの間には六角形の白い幕が出現する。

まさか自分を助けられると思っていなかったのか、ブルーキャットが驚愕している。

「たかが、じゃないルン」

ミルクィが口を開く。

惑星レインボーの住人が石化して滅んでしまったこと、住人およそ1, 800人がいたこと。

それらは彼女もデータで知っていた。

「でも違ったルン！ 来てみて初めてわかったルン。いろんな人がいたルン……」

この星の住人は、決してデータや数字ではない。

血の通った、自分と同じ人間だ。

だから。

「『たかが』で済ませられるものじゃないルン!!」

だが、その言葉はアイワーンに届かない。

彼女からすれば、ただの石の塊だ。

言葉を交わせない、息をしない、鼓動を感じない時点で、アイワーンにとってこの星の住人たちはもはやただの石像なのだろう。

だが、その言葉もミルクィは否定する。

「ノットリガーは想像力を塗りつぶして生まれるルン」

「あの石像はノットリガーになった、ということとは……」

導の言葉に、ブルーキャットは息をのむ。

想像力が、心があるということ、まだ生きているということに他ならない。  
で、あるならば。

「みんな、元に戻せるルン!!」

「ふんっ！ できるかっつーの!! あんたら石どころかこの星の塵にしてやるっつーの!!」

『クエーサーレイン』!!」

ノットトリガーに攻撃を命じようとしたアイワーンだが、それよりも早く、導が赤のマジックを使用する。

その瞬間、赤い雷をまとった大量の隕石がノットトリガーとアイワーンに向かって降り注いでいく。

だが、導はさらに容赦なく。

『シックスブレイズ』！ 『リメイションフレイム』！ 『サジッタアローレイン』!!」  
次々に赤マジックを使用し、アイワーンとノットトリガーを攻撃する。

さすがの容赦のなさにスターたちも声をかけようかと思っていたが、仇敵に対する憎悪や怒りの感情と、何が何でも勝利するという執念を感じさせるその風貌に声をかけることができなかつた。

だが、その攻撃のすべてをノットトリガーは回避し、攻撃を仕掛けようとする。

その瞬間。

「目を閉じて!! 早く!」

ブルーキャットが目を閉じるよう指示を飛ばしてきた。

その言葉に従い、スターたちと導は目を閉じる。

五人が目を閉じると、ブルーキャットは懐から閃光玉を取り出し、地面に叩きつけた。

その瞬間、激しい閃光が周囲を包み込み、ノットリガーは後退し、崖から落下する。

肩に乗っていたアイワーンも、思わずプリンセススターカラーペンとダークペンを落

とし、ノットリガーと一緒に崖から落下した。

「今よー! ペンをとって!!」

ブルーキャットの合図で、ミルキーとスターが同時にペンの元へと走る。

ミルキーがプリンセススターカラーペンを手にとると、スターもダークペンへ手をの

ばすが、這いあがってきたノットリガーに回収を邪魔されてしまう。

「プリンセススターカラーペン、返せっつーの!!」

もともと横からかつさらっていった本人が返せというのはおかしいのではないかと

導は心の片隅でツツコミを入れながら。

「『サジツトノヴァアロー』!!」

「プリキュア! 双子座! ミルキーショック!!」

ミルキーと同時にマジックを使用し、ノットリガーを吹き飛ばす。

その隙を逃さず、ミルキーはスターたちとともにサザンクロス・シヨットをノットリガーに打ち込む。

サザンクロス・シヨットの光に浄化され、ノットリガーは姿を消し、アイワーンも撤退した。

## 導の心の一端

ノットレイダーになってしまった石像が浄化されたことでアイワーンは撤退していき、ひかるたちはふたご座のスタープリンセスを復活させるため、スターパレスへとワープする。

ひかるたちがスターパレスでプリンセスと謁見している間、導とブルーキャットは浄化された石像の前に立っていた。

「ひとまず、よかつたじゃないか」

「え？」

石像を前に、なんとも言い難い表情を浮かべるブルーキャットに導はそう声をかける。

「石化してそのまま、というわけじゃなかった。サザンクロス・ショットでは元に戻すことができなかったけど、スタープリンセスの力がすべてそろえば、おそらく」

「ええ……元に戻すことはできるかもしれない」

「だからって、プリンセススターカラーペンを盗もうとか考えてないよな？」

導はまっすぐにブルーキャットを見ながら、そう問いかける。



ひたすらに馬鹿正直に正しい道を行こうとするひかるたちと違い、ブルーキャットは目的のために手段を選ばない節がある。

ひかるたちからプリンセススターカラーペンを盗み出すことくらい、やってのけるだろう。

「だから？ もしかして、それをさせないためにわたしをここで止めるつもり？」

「そうならないことを祈っている。俺としても、あんたの気持ちはわからなくもないからな」

ブルーキャットは導の言葉に眉をひそめる。

彼女にとつて、導はプリキュアたちと同じ、何も失ったことがない、何が何でも取り戻したいものもない。

そんな人間に、自分の気持ちが変わるものか。

そう思い、導の顔を見る。

導の顔に浮かぶその表情は、どこかひかるたちとは違う。

なぜかそう思わせるものがあつた。

「……あなたは、あの子たちとは少し違うのね」

「……この星の住民がどうだったのかは知らないが、少なくとも地球人の大人のせいで、少しばかり早く現実主義的にならないとならなかつたからな」

人間は年を経るごとに知識だけでなく、周囲に順応することや大多数の意見に同調することを覚えていく。

順応や同調をせず、自身の心のままに声を出し続ける人間は、付加価値カリスマ的魅力があれば『天才』や『パイオニア』と称賛され、何も持たなければただの阿呆として無視され、ひどい時には蔑まれる。

導の両親や仲間たち——コアの光主は、異界王という世界の支配と統一を目論んだ一人の男の野望を阻止したことで、一時、英雄として扱われ、付加価値のある存在として扱われた。

しかし、世界を影で支配する権力者たち『フィクサー』の存在を公表しようとした結果、強大な権力を持つ彼らに世論を操作され、前者の立場から後者の立場へと一気に叩き落されてしまい、それ以来、周囲からの視線は冷たくなり、実の両親すら敵に回ったという話を、導はコアの光主たちから聞いていた。

「俺はあいつらと違って、小さいころから味方なんていなかった……両親以外の家族すら、俺にとっては味方じゃなかった」

「周りにはみんな敵。だから早く大人にならなきゃならなかった、ということ？」

「ああ。だから、君みたいに目的のために手段を選ばないことを蔑んだりはしないし、ノットレイダーを裏切ったようなもんだから、誰かを巻き込まないために一人でいるこ

とを否定はしない」

でもな、と導はブルーキャットに視線を向け、語りかけ続けた。

「誰かや何かを救いたい、その気持ちは星奈たちも同じだ。なら、協力しあうこともできるんじゃないか？」

誰かや何かを救いたい。

ひかるたちとここ数週間、共に過ごして、彼女たちが抱えている共通の思いに、導は触れてきた。

その想いの強さは、ブルーキャットが惑星レインボウの同胞たちを救いたいという気持ちと同等の強さを持っている。

だからこそ、傷ついてもあきらめず、何度でも立ち上がるし、どんな強敵にも立ち向かっていく。

それを知っているから、導はこうして協力を要請するよう、ブルーキャットに語りかけていた。

だが。

「気持ちだけで結構よ。あなたもわかっているでしょ？ 結局、最後に頼れるのは自分だけだつてこと……カードバトラーなら、なおのことね」

いくら、デッキや戦術の構築で力を貸してくれた友人がいるのだとしても、バトル

フィールドに立つことができる人間はただ一人。

声援はあるだろうが、実際にカードバトルを行う場に立つ人間にしかわからない緊張感や重圧といったものには、一人で耐える以外にない。

その意味で、最後に頼ることができ存在は一人だけであるというブルーキャットの言い分は、導もわかる。

そして、ブルーキャット自身がこれ以上、何を言っても聞き入れるつもりがないこともわかった。

もし、ブルーキャットの心を変えることができるとすれば。

——星奈たちに行動で示してもらえないか

人たらし、というのか、他人との距離感が異様に近いひかるならばあるいは。

そう考えて、導はそれ以上、ブルーキャットに協力を要請することをやめた。

そうしているうちに、ひかるたちがスターパレスから帰還する。

帰還したひかるたちがブルーキャットに声をかけ、自分たちも協力することを告げた。ブルーキャットの答えはやはり。

「気持ちだけで結構にゃん……そこの彼にも話したけど、最後に頼れるのは、自分だけなのよ!!」

そう告げて、ブルーキャットは煙球を地面に叩きつけた。

## 新たな刺客は少年カードバトラー?!

「気持ちだけで結構にゃん……そこの彼にも話したけど、最後に頼れるのは、自分だけのよ!!」

スターパレスから帰還したひかるたちが、自分たちもレインボーの人々を救うことに協力するとブルーキャットに告げたのだが、告げられた本人はそう返し、煙球を地面に叩きつける。

周囲が煙に包まれている隙に、ブルーキャットはひかるが抱いていたフワとひかるたちが持つていたプリンセススターカラーペンを盗み取り、その場から離れていった。

幸い、導の持つ12宮Xレアは扱い方がわからなかったのか、それとも最初から対象外だったのか、手出しすることはなかったのだが。

ブルーキャットにプリンセススターカラーペンを盗まれ、フワも連れ去られたひかるたちは動揺するが。

「ペンダントは残ってるんだ。いつものやり方で追跡できるだろ」

という導の一言で、冷静になり、ペンダントを使ってプリンセススターカラーペンを探し始めた。

しばらくすると、ペンダントがプリンセススターカラーペンの存在をキャッチし、反応を示す。

「あつた!!」

「追いかけるルン!!」

その瞬間、ひかるたちはペンの反応を追いかけ、移動を開始する。

「それにしても、12宮Xレアもそうでプルンスが、ペンダントが盗まれていなかったのは幸いだったでプルンス」

「まだこの惑星にはアイワーンが——ノットレイダーがいる。襲われることも考えて、なんだろうな」

「悪人なのかそうじゃないのか、まったくわからないことをするでプルンス」

何とも言えない表情を浮かべながらそう話すプルンスだったが、導はブルーキャットの行動原理をなんとなくであつても、理解しようとする努力していた。

——手段を選んでいられないから、盗みも行う。けれど、だからって誰かが傷つくこととは許せないだろうな

あまりにも突然に、自分の同胞を奪われてしまったのだ。

そんな思いをほかの誰かに味わってほしいと思っていけないからこそ、自衛の手段として盗まずにいたのだろう。

あるいは、残りのプリンセススターカラーペンを自分の手で集め、レインボー星の人々を救ったあと、ひかるたちにフワとプリンセススターカラーペンを返すことができるよう、わざと自分を追いかけることができるようにしたのか。

いずれにしても。

「まだ説得できる余地はあると思う。けど、あいつが協力できる状態になるとすれば、それは星奈の行動を見てからだろうな」

ひかるの行動やアイデアは、なぜか周囲の人間も巻き込み、意外な方向へ事態を持つていくことが多い。

それらが悪い方向へ働くことがないわけではないのだが、最近ではララたちのサポートがいい具合に噛みあい、最善とはいかなくとも、良い方向へ向かっていくため、導はそこに期待するつもりなのだろう。

その後も、ペンの反応を追いかけ続け、ひかるたちは祭壇らしき場所へと到着する。

そこには、ブルーキャットとフワだけでなく、レインボー星人の石像が鎮座していた。

追いかけてくることは予想していたのだろうが、想定よりも早かったことに驚きを隠せなかったのか。

「意外と高性能なのね、そのリーダー」

あくまで冷静を装っていたが、その声色から少しばかりの動揺を感じ取ることができ

る。

むろん、追いついたひかるたちはフワとペンを返すよう要求するが、導は何も言わず、成り行きを見守っていた。

いつまでも平行線の状態に、プルンスは焦れてしまったのか。

「導からも何か言ってるやんでプルンス！」

と、導も援護射撃するよう、要求してくる。

しかし。

「俺の思いと考えは、お前たちがスターパレスに行ってる間に伝えた。それでだめだったんだ。よっぽど硬いぞ、あいつの決意は」

すでに説得した後であったことを知り、プルンスはそれ以上、何も言いだすことができなくなってしまう。

そうこうしているうちに、ひかるたちはプリキュアに変身し、その状態でブルーキヤットとの戦闘に発展する。

だが、導は裏12宮ブレイヴを発動することもなく、少し離れた場所で成り行きを見守っていた。

「なんでブレイヴを使わないでプルンスかつ！ 巻き込まれたら大変でプルンス!!」

「必要ない」



「どういうことでプルンス?!」

「あいつは、無防備な奴に被害を与えるようなことはしない」

ブレイヴを使用しない理由を理解できず、プルンスが戸惑いの声をあげるが、導はただそう返し、頑なにブレイヴを使用しようとしなかった。

皮肉なことに、導のその行動は、ブルーキャットが無防備な人間に危害を加えることをしない程度には良識があることを証明することとなる。

現に、プリキュアたちをカード型の時限爆弾やワイヤー、煙球を使って翻弄するも、無防備な状態であり人質として最適なはずの導に一切、手を出していない。

そのことが、誰かを傷つけてまで、ペンを奪い取ろうとしていないという何よりの証明となった。

「つて、このままじゃ引き離されるな」

「そうでプルンス! 早く追いかけるでプルンスよ!!」

そうこうしている間にも戦闘は継続しており、導はプリキュアたちから随分引き離されてしまっていた。

急いで追いかけてやろうとするが、背後に足音のようなものが聞こえ、振り向いてみると。

「ノットレイダー!」

「むっ?! 貴様は」

「プリキュアたちと一緒にいたカードバトラーだっつーの!!」

「プリンセススターカラーペンの反応を追いかけてきたか……」

導はカードホルダーから裏12宮ブレイヴを取り出そうとする。

だが。

「おっと！ カードバトラーだっつたら、そんなもんで戦わないで、こっちで勝負しろ！」

少しばかり幼い、小学生くらいの声が響く。

視線を向けると、そこにはとうまと同じ年くらいの見た目の少年がいた。

少年は、自分のデッキなのであろう、バトスピのカードを構えている。

本当なら、彼の要求を無視して、スターたちと合流し、ノットレイダーに警戒するよ

う知らせるべきなのだろう。

だが。

「……プルンス、スターたちにノットレイダーのことを知らせてくれ」

「導はどうするでプルンスか?!」

「俺は、俺の仕事をする」

導の仕事。

それはバトルスピリッツで勝つこと。

本来なら、ここで12宮ブレイヴを使い、ノットレイダーたちを止めるべきだろう。

だが、ノットレイダーのカードバトルにバトルを申し込まれた以上、それに応じなければ、契約違反となってしまう。

何より。

「ここで俺がこいつを足止めしとかねえと、最悪、紫のマジックを使われるかもしれないぞ」

「そ、それは嫌でプルンスな……」

どういうわけか、星空界ではバトルスピリッツのマジックはその効果に応じた現象として発生し、ブレイヴは実際に武器や防具として扱うことができるようになってい

る。スピリッツの生命エネルギーとも解釈できるコアを取り外すことが主なコンセプトである紫のマジックを使用された場合、最悪、命の危機にさらされるかもしれないため、導は紫マジックを使ってこなかった。

しかし、目の間にいるカードバトルーがそれだけの倫理観を持っているかはわからない。い。

わからない以上、カードバトルで足止めをする以外、対策のしようがないのだ。

「頼むぞ」

「わかったでプルンス！」

話しているうちに、アイワーンはプリンセススターカラーペンの反応を追いかけて

いった。

その後にかツパードが軍勢を率いて続いていく。

導の意図を理解したプルンスはノットレイダーたちより先にスターたちのところへ向かうべく、大きく息を吸い、思いつきり吐き出す。

ジェット噴射のようにして吐き出した空気を推進力にして、プルンスが素早くその場を離れると。

「待たせたな」

「ああ。始めようぜー」

導はデツキをカードケースから取り出し、少年に向ける。

少年も同じように導にデツキを向けると、二人は同時に。

「ゲートオープン！ 界放!!」

バトルフィールドへ向かう言葉を口にした。

## v s. 少年バトラー

「ゲートオープン！ 解放!!」

カッパードに連れられてやってきた少年バトラーを足止めするため、導はカードバトルを挑み、少年とともにバトルフィールドに突入した。

「俺から行くぜ!」

「好きにしろ」

「へへっ……スタートステップ!!」

〈第1ターン〉

少年バトラー／ライフ：5、リザーブ：4、手札4↓5

「メインステップ! ナイト・ブレイドラ2体をレベル2で召喚! ターンエンドだ」

〈第1ターン〉

少年バトラー／ライフ：5、リザーブ：4↓0、手札5↓3、トラッシュ：0

フィールド：ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル2：BP2000）

ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル2：BP2000）

少年バトラーのフィールドに紫色の体毛に身を包んでいるブレイドラが2体、姿を現

す。

だが、バーストをセットすることもなく、ターン終了を宣言する。

「スタートステップ！」

〈第2ターン〉

導／ライフ：5、リザーブ：4↓5、手札：4↓5

「メインステップ！ ニジノコ、モルゲザウルスをそれぞれレベル1で召喚！」

〈第2ターン〉

導／ライフ：5、リザーブ：5↓0、手札：5↓3、トラッシュユ：0↓3

フィールド：ニジノコ（黄／1／レベル1：BP1000）

モルゲザウルス（赤／3（赤2）／レベル1：BP2000）

導のフィールドに虹のように様々な色に輝く鱗をまとった蛇のようなスピリットと、兜をかぶり、尾の先端にスパイクのついたハンマーとなつている二足歩行の恐竜が姿を見せる。

さらに導はバーストをセットし、ターン終了を宣言した。

〈第2ターン〉

導／ライフ：5、リザーブ：0、手札：3↓2、トラッシュユ：3

フィールド：ニジノコ（黄／1／レベル1：BP1000）

モルゲザウルス（赤／3（赤2）／レベル1：BP2000）

バースト：あり

第3ターン。

少年バトラーはカメラロット・ナイトX<sup>テ</sup>をレベル1で召喚。

召喚時効果でデッキからカードをドローし、ターンを終了する。

〈第3ターン〉スタートステップ

少年バトラー／ライフ：5、リザーブ：0↓1、手札3↓4、トラッシュ：0

フィールド：ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル2：BP2000）

ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル2：BP2000）

〈第3ターン〉メインステップ

少年バトラー／ライフ：5、リザーブ：1↓0、手札4↓3↓4↓3、トラッシュ：0

↓1

フィールド：ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル2：BP2000）

ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル2↓1：BP2000↓1000）

カメラロット・ナイトX（紫／3（紫2）／レベル1：BP1000）

バースト：なし

続く第4ターン。

導はザニーガンをレベル1で召喚し、ニジノコをレベル3に上げ、ターンを終了。

〈第4ターン〉スタートステップ

導／ライフ：5、リザーブ：0↓4、手札：3↓4、トラッシュユ：3↓0

フィールド：ニジノコ(黄／1／レベル1：BP1000)

モルゲザウルス(赤／3(赤2)／レベル1：BP2000)

バースト：あり

〈第4ターン〉メインステップ

導／ライフ：5、リザーブ：4↓0、手札：4↓3、トラッシュユ：0↓1

フィールド：ニジノコ(黄／1／レベル1：BP1000↓レベル3：BP3000)

モルゲザウルス(赤／3(赤2)／レベル1：BP2000)

ザニーガン(白／1／レベル1：BP1000)

バースト：あり

続く第5ターン。

少年バトラーは闇騎士ガヘリスをレベル2で召喚。

不足コストとして、ナイト・ブレイドラー1体のレベルを1に下げ、コアを確保する。

〈第5ターン〉スタートステップ



少年バトラー／ライフ：5、リザーブ：0↓2、手札3↓4、トラッシュ：1↓0  
 フィールド：ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル2：BP2000）

ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル1：BP1000）

キヤメロット・ナイトX（紫／3（紫2）／レベル1：BP1000）

バースト：なし

〈第5ターン〉メインステップ

少年バトラー／ライフ：5、リザーブ：2↓0、手札4↓3、トラッシュ：0↓1

フィールド：ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル1：BP1000）

ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル2↓1：BP2000↓レベル1：B

P1000）

キヤメロット・ナイトX（紫／3（紫2）／レベル1：BP1000）

闇騎士ガヘリス（紫／2（紫1）／レベル2：BP3000）

バースト：なし

「アタックステップ！ ナイト・ブレイドラでアタック！」

少年バトラーが先に動きを見せ、ナイト・ブレイドラがフィールドを駆け、導に向かって突進していく。

「ライフで受ける!!」

導はその攻撃をライフで受けることを宣言。

導とナイト・ブレイドラの間、紫の障壁が出現し、ナイト・ブレイドラの口から吐き出された炎を防いだ。

だが、紫の障壁は炎に砕かれ、破片が導に降り注ぐ。

障壁が砕け散った瞬間、導のまとうバトルスーツの胸部にある五つの青白い光が一つ、砕け散る。

〈第5ターン〉

導／ライフ：5↓4、リザーブ：0↓1

「ライフ減少により、バースト『絶甲氷盾』を発動!! 俺のライフを1つ回復!」

〈第5ターン〉

導／ライフ：4↓5

バースト：あり↓絶甲氷盾

「さらに、コストを使用しフラッシュ効果を使用! アタックステップを終了する!! 不足コストはニジノコより使用! レベル1に!!」

〈第5ターン〉

導／ライフ：5、リザーブ：1↓0、手札：3、トラッシュ：1↓3

フィールド：ニジノコ（黄／1／レベル3：BP3000↓レベル1：BP1000）

モルゲザウルス（赤／3（赤2）／レベル1：BP2000）

ザニーガン（白／1／レベル1：BP1000）

バースト：あり↓絶甲氷盾

「ちえっ！ ターンエンドだ」

アタックステップの継続が不可能となったため、少年バトラーはターンエンドを宣言する。

第6ターン、導はニジノコをレベル3に戻し、ノーザンベアードをレベル1で召喚。

フィールドを充実させていく。

〈第6ターン〉スタートステップ

導／ライフ：5、リザーブ：0↓4、手札：3↓4、トラッシュユ：3↓0

フィールド：ニジノコ（黄／1／レベル1：BP1000）

モルゲザウルス（赤／3（赤2）／レベル1：BP2000）

ザニーガン（白／1／レベル1：BP1000）

〈第6ターン〉メイנסテップ

導／ライフ：5、リザーブ：4↓3、手札：4↓3、トラッシュユ：0↓1

フィールド：ニジノコ（黄／1／レベル1：BP1000）

モルゲザウルス（赤／3（赤2）／レベル1：BP2000）

ザニーガン（白／1／レベル1：BP1000）

ノーザンベアード（白／3（白2）／レベル1：BP4000）

さらに。

「ニジノコをレベル1にダウン！ マジック『スターリードロー』を使用！ デッキトップから3枚のカードをオープン。系統「光導」「星魂」「星竜」を持つスピリットまたはブレイヴを手札に加える」

〈第6ターン〉メインステップ

導／リザーブ：3↓2、手札：4↓3

導のデッキの上から3枚のカードが開かれる。

その中に、光龍騎神サジツト・アポロドラゴンと輝竜シャイン・ブレイザーが含まれていたので、手札に。

〈第6ターン〉メインステップ

導／手札：3↓5（うち2枚は光龍騎神サジツト・アポロドラゴンと輝竜シャイン・ブレイザー）

「さらにネクサス『光り輝く大銀河』をレベル1で配置。ターンエンド」

〈第6ターン〉メインステップ

導／ライフ：5、リザーブ：2↓0、手札：3↓5（うち2枚は光龍騎神サジツト・ア

ポロドラゴンと輝竜シャイン・ブレイザー)、トラッシュユ：1↓3

フィールド：ニジノコ(黄/1/レベル1：BP1000)

モルゲザウルス(赤/3(赤2)/レベル1：BP2000)

ザニガン(白/1/レベル1：BP1000)

ノーザンベアード(白/3(白2)/レベル1：BP4000)

ネクサス：光り輝く大銀河(赤/レベル1)

導の背後に多くの星が輝く銀河が出現すると、導はターン終了を宣言する。

その光景に、少年バトルーは目を輝かせながら。

「すげえっ！ すっげえな、この銀河!!」

と無邪気な感想を漏らしている。

その様子に、導は眉を顰めた。

しばらく前にバトルした緑のカードバトルー、ロビンは『強い奴と戦えるから』という理由でノットレイダーに協力していたが、目の前の少年もまた、彼と同じなのか、疑念を抱いたのだ。

——それにしては無邪気すぎるというか……純粹にバトルを楽しんでいるだけのように見える……

むろん、それが悪いわけではない。

だが、自分の敗北が意味するものを分かっているのだろうか。  
気になってしまい、導は思わず。

「なあ、お前——えっと」

「あ、そういう名前言っただけだ。俺、ゲンカ・トツパ！ 宇宙最強のカードバトルになる男だ!!」

トツパ、と名乗った少年バトルはニカツと笑みを浮かべながらそう語る。

だが、その自己紹介を気にする様子もなく、導は自分も名を名乗り。

「俺は馬神導。スタープリンセスたちから協力を求められて戦っている地球のカードバトルだ」

「スタープリンセスに？ なら、お前を倒せばあの人たちからもっと強いカードをもらえるかもしれないのか?!」

「知らん。そんなことより、お前、ノットレイダーが何をしているのかわかっているのか?」

導は、両親やコアの光主たちから地球で密かに暮らし、迫害されているが故の怒りを抱え生きている異界魔族の話を聞いていた。

それが事実かどうかはわからないが、少なくとも、外見で他者を判断するようなことはしないよう、厳しく躰けられてきたため、異星人に対して特に何か思ったり、不快感

を抱いたりすることは少ない。

だが、イメージネーションを歪め、怪物に変えたり武器に変えたり、実験の果てに惑星一つを滅ぼすような連中であるという認識であるため、あまり好印象は持つておらず、敵対心を抱いていることは事実だ。

そんな連中に、目の前にいるカードバトルが大好きなのであろうトツパが協力するとはどうしても思えなかった。

だが、トツパは不思議そうに首を傾げ。

「え？ だってあいつらに協力して、邪魔してくるカードバトラーを倒せば強いカードをもらえるんだぜ？」

「……そうか」

「強いカードバトラーを目指すなら、強いカードを手に入れるのが一番！ だから俺はあいつらに協力して……」

「もういい。お前が何も見えていないことはよくわかった」

ギン、と鋭い視線をトツパに向けながら、導はトツパの言葉を遮る。

その威圧感にトツパは身じろぎするが。

「へんつ！ に、睨んだって無駄だ!! 俺は絶対に勝つて決めてるんだから!! スタートステップ!!」

## 〈第7ターン〉

トツパ／ライフ：5、リザーブ：0↓2、手札3↓4、トラッシュ：1↓0

フィールド：ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル1：BP1000）

ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル1：BP1000）

キヤメロット・ナイトX（紫／3（紫2）／レベル1：BP1000）

闇騎士ガヘリス（紫／2（紫1）／レベル2：BP3000）

「メインステップ！ ミラージュ『黄昏のキヤメロット城』をセット！」

「ミラージュ？……いったい、どんな効果が」

## 〈第7ターン〉

トツパ／ライフ：5、リザーブ：2↓1、手札4↓3、トラッシュ：0↓1

フィールド：ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル1：BP1000）

ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル1：BP1000）

キヤメロット・ナイトX（紫／3（紫2）／レベル1：BP1000）

闇騎士ガヘリス（紫／2（紫1）／レベル2：BP3000）

バースト：なし

ミラージュ：黄昏のキヤメロット城（紫／2（紫1））

トツパがバーストゾーンのカードに表側でカードをセットした瞬間、トツパの頭上に



霧に覆われた城が出現する。

聞いた覚えのないカードに、導が警戒心をあらわにすると。

「効果はすぐにわかるさ！ アタックステップ！ 闇騎士ガヘリスでアタック!! この瞬間、騎士と名のついた俺のスピリットがアタックしたことで、黄昏のキャメロット城のミラーージュ効果発揮！ 相手スピリットのコア一つをリザーブへ置く!! ノーザンベアードのコア一つを外すことで、ノーザンベアードは消滅！」

「なにっ?!!」

「さらに相手スピリットが消滅したことで、俺はカードを一枚ドロウする!!」

突然、ノーザンベアードが消滅したことに導は驚愕する。

ミラーージュとは、マジック、ネクサス加えられた新たなギミックであり、バーストゾーンに表側でセットすることでその効力を発揮するものだ。

ネクサスと似たように感じられるが、一度配置したネクサスは配置したプレイヤーが任意のタイミングで取り外すことができなないことに対し、ミラーージュは1ターンの1度だけではあるが、ほかのカードに張り替えることが可能となっている。

違うミラーージュをセットし直すことで、戦況を一気に覆すことが可能となる、強力な効果だ。

〈第7ターン〉

トツパ／手札3↓4

導／リザーブ：0↓1

ファイールド：ニジノコ（黄／1／レベル1：BP1000）

モルゲザウルス（赤／3（赤2）／レベル1：BP2000）

ザニーガン（白／1／レベル1：BP1000）

ノーザンベアード（白／3（白2）／レベル1：BP4000）↓消滅

ネクサス：光り輝く大銀河（赤／レベル1）

両手に紫に輝く刀身の剣を構え、ハクビシンのような姿の獣が導に向かって駆けてくる。

だが、ノーザンベアードが消滅したことで動揺してしまった導の脳はすでに冷静さを取り戻しており。

——闇騎士ガヘリスの特性は『不死』。ならここは

ガヘリスの特性から、フラッシュタイミングでの破壊はかえって不利になるかもしれないと考え。

「ライフで受ける！」

ライフで受けることを選択する。

「キヤメロット・ナイトX！ 続けてアタック!! 黄昏のキヤメロット城のミラージュ

効果でニジノコを消滅!!　そしてカードを1枚ドロロー!!」

〈第7ターン〉

トツパ／手札4↓5

「それもライフだ!!」

愛らしい印象を受けるおもちゃのような鎧の騎士が、手にした槍を突き出しながら導に突進してくる。

導はそのアタックもライフで受けることを宣言。

このターンで、導は2つのライフを失うこととなる。

〈第7ターン〉

導／ライフ：5↓3、リザーブ：2↓4

だが、ブロッカーを残すためか、トツパはナイト・ブレイドラ2体でアタックすることとはなく、ターンを終了させる。

第8ターンとなったが、導のフィールドはモルゲザウルスとザニーガンのみ。

光り輝く大銀河により、赤の軽減コストは3つ確保できているが、トツパのフィールドに黄昏のキャメロット城がある以上、大型スピリットを呼ぶことに少しためらいがでていた。

〈第8ターン〉

導／ライフ：3、リザーブ：4↓7、手札：5↓6（うち2枚は光龍騎神サジット・アポロドラゴンと輝竜シャイン・ブレイザー）、トラッシュユ：3↓0

フィールド：モルゲザウルス（赤／3（赤2）／レベル1：BP2000）

ザニーガン（白／1／レベル1：BP1000）

ネクサス：光り輝く大銀河（赤／レベル1）

——とはいえ、このままこうしていても埒が明かない……今の所、トツパのスピリットでキヤメロットの条件を満たしているスピリットは2体

手札が5枚あるため、第9ターンにさらなる条件を満たしたスピリットの増援が考えられなくもないが、ここでじっとしていても勝つことはできない。

ならば。

「臆せずに進む！ 手札からライト・ブレイドラをレベル1で召喚！ さらに、光り輝く大銀河のレベル1効果。系統〈光導〉を持つスピリットはすべてコスト5として扱う」  
導のフィールドに白い体毛に身を包んだブレイドラが姿を見せる。

ナイト・ブレイドラと同族なのか、それとも単に似通った姿のスピリットの出現に驚いてか、二体は互いににらみ合い、威嚇し合っていた。

だが、導はそんな様子を気にすることなく。

「射手座より降り立つ12宮Xレア！ 『光龍騎神サジット・アポロドラゴン』をレベル

2で召喚!! 不足分はザニーガンのコアを使用!」

〈第8ターン〉

導／ライフ：3、リザーブ：7↓0、手札：6↓4（うち1枚は輝竜シャイン・ブレ  
イザー）、トラッシュ：0↓1

フィールド：光龍騎神サジツト・アポロドラゴン（赤／8（赤4）／レベル2：BP  
10000）

モルゲザウルス（赤／3（赤2）／レベル1：BP2000）

ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

ネクサス：光り輝く大銀河（赤／レベル1）

キースピリットであるサジツト・アポロドラゴンを召喚した。

さらにバーストをセットすると。

「アタックステップ! サジツト・アポロドラゴンでキヤメロット・ナイトXを指定ア  
タック!!」

「キヤメロット・ナイトでブロック!!」

導はサジツト・アポロドラゴンでアタックを宣言するが、ここではライフではなく相  
手スピリットに狙いを定め、指定アタックを宣言していた。

その体格差とスピリットのBPの差もあって、キヤメロット・ナイトXはあっさりサ

ジット・アポロドラゴンに踏みつぶされてしまう。

導はこれでターンを終了し、トツパの第9ターンへと移る。

〈第9ターン〉スタートステップ

トツパ／ライフ：5、リザーブ：2↓4、手札5↓6、トラッシュユ：1↓0

フィールド：ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル1：BP1000）

ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル1：BP1000）

闇騎士ガヘリス（紫／2（紫1）／レベル2：BP3000）

ミラーージュ：黄昏のキャメロット城（紫／2（紫1））

「メイנסテップ！ 来たれ、円卓を統べる騎士王の力宿す竜！ 『竜騎士ソーディア

ス・ドラグーン』、召喚!!」

〈第9ターン〉メイנסテップ

トツパ／ライフ：5、リザーブ：4↓0、手札6↓5、トラッシュユ：0↓3

フィールド：ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル1：BP1000）

ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル1：BP1000）

闇騎士ガヘリス（紫／2（紫1）／レベル2：BP3000）

竜騎士ソーディアス・ドラグーン（紫／6（紫3）／レベル1：BP50

00）

ミラージユ：黄昏のキヤメロット城（紫／＼2（紫1））

トツパのフィールドに黄金の鎧を身にまとい、赤い竜の衣装が施された黄金の盾を構え、紫の光を放つ刀身の剣を構えた竜騎士が姿を見せる。

その騎士に、導は背筋に冷たいものを感じた。

殺気や敵意というものではない、そう言ったものとはもつと別の威圧感に似たものだ。

——ソーディアス・ドラグーン、何かあるな……警戒しないと

そういったものを感じた時のバトルは苦戦する。

その経験を思い出し、導は気を引き締めて目の前のスピリットを見るが、そんな導の心のうちなど知った様子はなく。

「アタックステップ！ ソーディアス・ドラグーンでアタック！ キヤメロット城の効果でサジツト・アポロドラゴンのコアを1つ取り外す！ さらに、ソーディアス・ドラグーンのアタック時効果。コアが2つ以上乗っている相手スピリットを指定してアタックできる！ サジツト・アポロドラゴンを指定アタック!!」

「サジツト・アポロドラゴンでブロック!!」

〈第9ターン〉

導／リザーブ：0↓1

フィールド：光龍騎神サジツト・アポロドラゴン（赤／8（赤4）／レベル2：BP10000↓レベル1：BP6000）

指定アタックを宣言されてしまったため、ブロックせざるをえなくなった導はサジツト・アポロドラゴンでのブロックを宣言する。

その瞬間、ソーディアス・ドラグリーンとサジツト・アポロドラゴンが互いに急接近し、戦闘を開始した。

鎧をまと竜騎士の斬撃を、半身が馬となっている龍が回避し、炎を浴びせかける。

その瞬間、ソーディアス・ドラグーンの体が紫色の光を放つ。

「ソーディアス・ドラグリーン、レベル1から3の共通効果！ コア2個以上の相手スピリットにブロックされたことで、このカードは転醒てんせいする！」

「転醒っ?!」

「聖杯の力解き放ち、竜騎士はいま、竜騎士王として戦場に立て!! 竜騎士王ソーディアス・ドラグリーン・ケーニヒ!! 転醒っ!!」

ソーディアス・ドラグリーンから放たれた光が収まると、ソーディアス・ドラグーンのいた場所には先ほどと異なり、紫に輝く鎧をまとい、同じく紫の鎧をまとった竜を駆る騎士がそこにはいた。

〈第9ターン〉メインステップ



トツパ／カウント：0↓1

フィールド：ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル1：BP1000）

ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル1：BP1000）

闇騎士ガヘリス（紫／2（紫1）／レベル2：BP3000）

竜騎士ソーディアス・ドラグーン（紫／6（紫3）／レベル1：BP50

00）↓竜騎士王ソーディアス・ドラグーン・ケーニヒ（紫／8（転醒）／レベル1：BP8000）

ミラーージュ：黄昏のキャメロット城（紫／2（紫1））

「ケーニヒの転醒時効果！ ケーニヒを回復！！ 本当は、トラッシュユにある転醒以外の

「騎士」と名のついた紫のカードをノーコスト召喚できるんだけど……いまはない！」

「で、バトル継続か？」

「その通りだ！ 今度はケーニヒでアタック！！ キャメロット城の効果でモルゲザウルスのコアを外し、消滅。消滅したことで、俺はデッキから一枚ドロ―！」

「ライフで受ける！！」

ケーニヒが動き出すとほぼ同時にモルゲザウルスが消滅し、導はライフで受けることを宣言する。

その瞬間、ケーニヒが持つ紫の刀身の太剣が導を捉え、振り下ろされた。

## 〈第9ターン〉

導／ライフ：3↓1、リザーブ：1↓4

フィールド：光龍騎神サジツト・アポロドラゴン（赤／8（赤4）／レベル1：BP  
8000）

ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

ネクサス：光り輝く大銀河（赤／レベル1）

トツパは続けてアタックを行おうとするが、導は手札のマジックを発動させた。

「ライフ減少により、ノーコストでマジック『絶甲氷盾』を使用！ このバトル終了時に、アタックステップを終了する!!」

## 〈第9ターン〉

導／手札4↓3（『絶甲氷盾』使用による）

「ターンエンド……けど、あなたのフィールドはがら空き。次のターン、俺が攻め込めば勝ちは確定だな」

「……そう思っているうちは、お前はまだ子どもだ」

フィールドのスピリットの数とBP差。

それらを総合的に判断して、トツパはそう語るが、導の目に闘志は燃え続けている。相手の残りライフは1つで手札は1枚。対する自分のフィールドは盤石。

圧倒的に有利な状況であったにも関わらず、ドローステップで引き込んだカードによつて敗北するということは、バトルスピリッツに限らず、カードゲームではよくあることだ。

そして、その奇跡を引き込むことが。

〈第10ターン〉コアステップ、ドローステップ

導／ライフ：1、リザーブ：4↓5、手札：3↓4（うち1枚は輝竜シャイン・ブレイザー）、トラッシュ：1

フィールド：光龍騎神サジツト・アポロドラゴン（赤／8（赤4）／レベル1：BP 8000）

ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP 1000）

ネクサス：光り輝く大銀河（赤／レベル1）

導にはできた。

「……来た！」

ドローステップで呼び込んだカードに口角を吊り上げ、導はメインステップへと進む。

〈第10ターン〉リフレッシュステップ

導／ライフ：1、リザーブ：5↓6、手札：4（うち1枚は輝竜シャイン・ブレイザー）、

トラッシュ：1↓0

フィールド：光龍騎神サジツト・アポロドラゴン（赤／8（赤4）／レベル1：BP  
8000）

ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

ネクサス：光り輝く大銀河（赤／レベル1）

「メインステツプ！ 輝竜シャイン・ブレイザーをサジツト・アポロドラゴンに合体！」

導のフィールドにジェット機のような機械仕掛けの竜が出現すると、一瞬で翼へと変  
形し、サジツト・アポロドラゴンと合体した。

さらに、導はサジツト・アポロドラゴンと光り輝く大銀河のレベルを2にアップする。

〈第10ターン〉メインステツプ

導／ライフ：1、リザーブ：6↓3↓0、手札：3、トラッシュ：0↓3

フィールド：光龍騎神サジツト・アポロドラゴン＋輝竜シャイン・ブレイザー（赤／  
8＋5（赤4）／レベル1：BP8000＋5000↓レベル2：BP10000＋5  
000）

ライト・ブレイドラ（赤／0／レベル1：BP1000）

ネクサス：光り輝く大銀河（赤／レベル1↓2）

「アタックステツプ！ 合体スピリットで竜騎士王ソーディアス・ドラグーン・ケーニヒ

を指定アタック！ さらに、アタック時効果でこのスピリットのブレイヴ1枚につき、BP10000以下の相手スピリット1体を破壊する！」

導の宣言を受けて、サジツト・アポロドラゴンがフィールドを駆ける。

同時に、弓を取り出し弦を引いた瞬間、炎が渦を巻き、一本の矢へと変化し、番えられた。

その瞬間、ライト・ブレイドラが甲高い声をあげ、体から赤い光が上り、サジツト・アポロドラゴンへと伸びていく。

「ライト・ブレイドラの【強化<sup>チャージ</sup>】！ BPによる破壊上限を+1000!! ナイト・ブレイドラを破壊！」

導が宣言した瞬間、サジツト・アポロドラゴンは番えていた矢を放す。

炎の矢は真っ直ぐにナイト・ブレイドラに向かつていき、ナイト・ブレイドラは抵抗する間もなく、矢に射抜かれ、破壊されてしまった。

〈第10ターン〉アタックステップ

トツパ／ライフ：5、リザーブ：0↓1

フィールド：ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル1：BP1000）

闇騎士ガヘリス（紫／2（紫1）／レベル2：BP3000）

竜騎士王ソーディアス・ドラグーン・ケーニヒ（紫／8（転醒）／レベル

1 : BP 8000)

ミラージュ：黄昏のキャメロット城（紫／2（紫1））

「くっ……ケーニヒ!!」

トツパがケーニツヒに命じると、ケーニツヒは疲労した身体に鞭打つように立ち上がり、サジット・アポロドラゴンに向かっていく。

だがBPの差が大きく、サジット・アポロドラゴンに踏み抜かれてしまう。

さらに、BP 8000以上のケーニヒが破壊されたことで、輝竜シャイン・ブレイザーの合体アタック時効果が発動。

トツパのライフが1つ破壊されてしまった。

〈第10ターン〉アタックステップ

トツパ／ライフ：5↓4、リザーブ：1↓3

フィールド：ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル1：BP 1000）

闇騎士ガハリス（紫／2（紫1）／レベル2：BP 3000）

ミラージュ：黄昏のキャメロット城（紫／2（紫1））

「けど、ケーニヒ——コスト8のスピリットが破壊されたことで、トラツシユのキャメロット・ナイトXの【不死】発動！　トラツシユからキャメロット・ナイトXを召喚で

きる!!」

ケーニヒが破壊された後に残った爆炎の中から、まるで入れ替わるようにカメラロツト・ナイトXが姿を現す。

〈第10ターン〉アタックステップ

トツパ／ライフ：4、リザーブ：3↓1

ファイールド：ナイト・ブレイドラ（紫／0／レベル1：BP1000）

闇騎士ガヘリス（紫／2（紫1）／レベル2：BP3000）

カメラロツト・ナイトX（紫／3（紫2）／レベル1：BP1000）

ミラージュ：黄昏のカメラロツト城（紫／2（紫1））

だが、導はトラツシユから蘇ったスピリットを意に介さず、手札のマジックを使用する。

「フラツシユタイミング！ マジック『バーニングサン』を使用。手札の『トレス・ベルーガ』をノーコストで召喚し、サジット・アポロドラゴンに合体！ そして回復！」

「だ、ダブル合体?!」

「不足コストはライト・ブレイドラより確保。よって消滅」

ライト・ブレイドラのコアがすべて取り除かれてしまったことで、ライト・ブレイドラの姿は光となってファイールドから消えてしまう。

だが、そのことに何も感じていないかのように、導は手札のトレス・ベルーガをサジット

ト・アポドラゴンに合体させる。

その瞬間、青い光がサジツト・アポドラゴンに伸びていく。

その光の中をケルベロスのような三本首の犬のような竜が駆けていき、サジツト・アポドラゴンに激突し、光で包み込んだ。

光が収まると、鎧の大部分が黒と金へと変化し、さらに強い威圧感を放つ。

同時に、導のバトルスーツも金色と赤から黒と赤へと変化し、歴戦の戦士を思わせる激しさがその顔に宿った。

〈第10ターン〉メインステツプ

導／ライフ：1、リザーブ：0、手札：3↓1、トラッシュ：3↓4

フィールド：光龍騎神サジツト・アポドラゴン＋輝竜シャイン・ブレイザー＋トレス・ブルーガ（赤／8＋5（赤4）／レベル2：BP10000＋5000＋6000）

ネクサス：光り輝く大銀河（赤／レベル2）

「合体スピリット、再び攻撃!! アタック時効果により、ナイト・ブレイドラとキャメロット・ナイトXを破壊! トレス・ブルーガの合体アタック時効果。デッキの上から6枚、カードを破棄し、BP＋6000!」

「ガヘリスでブロック!!」

トツパの宣言に、ガヘリスは文句を言いたそうにあんぐりと口を開けるが、逆らうこ



とができず、サジット・アポロドラゴンへ向かっていく。

だが、圧倒的なBP差があったため勝負にならず、何もできずに踏みつぶされてしま  
う。

「これであんたのスピリットは疲労状態。次の俺のターンで……」

「させると思うか？」

「え？」

「トレス・ペルーガの効果により破棄されたカードの中に系統〈光導〉を持つスピリット  
があった場合、このスピリットを回復する」

導の言葉に、トツパは導のトラツシユを見る。

先ほどトラツシユに送られたカードは、ニジノコ、ライト・ブレイドラ、モルゲザウ  
ルス、リバイブドロー、バキウムシンボル、金牛龍神ドラゴニック・タウラスの六枚。

そのうち、ドラゴニック・タウラスは系統〈光導〉を持つスピリットだ。

「よって、サジット・アポロドラゴンは回復する。再びアタック!! フラツシユタイミン  
グで光り輝く大銀河レベル2の効果! 手札の太陽神龍ライジング・アポロドラゴンを  
破棄し、サジット・アポロドラゴンのBPを+6000し、赤のシンボルを1つ追加す  
る!!」

これにより、サジット・アポロドラゴンのシンボルは4つ。

ブロックできるスピリットもおらず、手札には防御用のマジックも存在していなかったのか。

「ら、ライフだ！ ライフで受けるしかないだろおおおおおっ!!」

トツパは涙を目じりに浮かべながら、そう叫ぶ。

その声を気にする様子もなく、サジット・アポロドラゴン<sup>①</sup>は四本の炎の矢を番え、発射する。

炎の矢はトツパを捉え、残されたトツパのライフである4つの青い光を打ち砕いた。

# 宇宙に煌めく、七色の光! キュアコスモ、誕生!!

導がトツパとのバトルに勝利すると、導とトツパはバトルフィールドから戻ってきたが、その場所ではスターたちとノットレイダーたちが戦闘を繰り広げていた。

「なっ?! ちよ、どういふことだよ?!」

「くそっ! マジック『白晶防壁』!!」

「ノット?!」

突然の事態ではあったが、導はマジックを使用し、奇襲をかけてきたノットレイダーの構成員に白のマジックを使用する。

瞬間、白い光を放つ半透明の壁がノットレイダーの攻撃を遮り、導とトツパを守った。

「導くん?!」

「どこ行つてたルン?!」

「どこ行つてたつて、プルンスから聞いてないのかよ?!……まあ、いいけどー!」

スターとミルキーに文句を言われながら、導はブレイヴサジタリアスのカードを頭上にかざし、鎧を身にまとう。

その姿に、トツパは幼い少年らしく、カッコイイという感想を漏らしていたが。

「お前はここから動くなよ！ いいな?!」

トツパにそう言い残し、導も参戦する。

だが、アイワーンが自分自身を素体にノットリガーを作り出し、戦況はさらに混乱することとなった。

だというのに、一步も引かず、戦い続ける様子を、ブルーキャットは呆然と眺め、なぜそこまでするのか、疑問を口にする。

所詮は、他人のこと。そして、まったく違う星の生まれのもののことだ。放っておけばいい。

なのになぜ。

「なんで、戦うのよ!」

「だってほっとけないじゃん!!」

その疑問に、スターがまっすぐに答えを返す。

「あなたには関係ない! 何も知らない他人でしょ?!」

「確かに、お前と俺たちは他人同士だ。まして、羽衣以外は全員地球人だ。普通なら放っておくだろうさ」

「ならなんで?!」

「だからって放っておくことを、俺はしない!」

導の語気の強さに、ブルーキャットは息をのむ。

そんなことは素知らぬ様子で、スターたちは言葉が続けた。

「ブルーキャットのことだけじゃない、わたしの知らないことはいっぱいある。だからこそ知りたいし、会って話したい! もちろん、この星の人たちとも!! だつてさ、キラやば〜! だよ? なんでも好きな姿に変わるなんて!!」

「……っ」

「だから、わたしは守りたい!!」

スターの言葉に、ミルキーたちもうなずいて返す。

それと同時に、彼女たちはノットリガーへと向かっていく。

その後ろ姿に、ブルーキャットはなぜそこまでできるのか、疑問を口にするが。

「お前も、その答えはもうわかってるはずだろ?」

「え?」

「目の前で困ってる誰かがいて、その誰かに力を貸せるなら全力を尽くす。自分がそうしたいからそうしてるんだ、俺もあいつらも」

それだけを口にするると、導は地面を蹴り、ノットリガーと化したアイワーンへと向かっていき、プリキュアたちの援護に入る。

「マジック『リミテッドバリア』!!」

「鬱陶しいっつーの!!」

アイワーンの強烈な一撃が入る前に、防御を行おうとするが、ノットリガーの力が予想以上に強く、リミテッドバリアの防壁を簡単に破壊する。

その衝撃はスターたちを襲い、変身を強制解除させるほど強力なものだった。

リミテッドバリアのおかげかなんとか立つことはできるが、それでもダメージは大きく、すぐに変身することができない。

そんなひかるたちに容赦なくアイワーンが拳を振り上げようとする。

だが、アイワーンはその拳を止めた。

「なんであんたがそこにいるんだっつーの?」

そこには変身が解除されたひかるたちを前に、仁王立ちするブルーキャットの姿があった。

なぜ、自分がここに立っているのか。ひかるたちを守るようにしているのか。

ブルーキャット本人も戸惑っている様子はあった。

だが。

「わたしだつてわからない……けど、倒れているんだ! わたしの目の前で!!」

倒れている人を見捨てることができない。

ブルーキャットの本質がその言葉から、うかがい知ることができる。

だから、倒れているひかるたちも救いたい。

本心から出たのであろうその言葉が、フワに反応したのか、フワが突如。

「ふーわーっ!!」

光を放ちながら声をあげた。

すると、ブルーキャットの胸元にひかるたちと同じペンダントとペンが出現する。

「ブルーキャット! 君のイメージを描け!! そのイメージが君の力になってくれるはずだ!!」

導の声に答えるように、ブルーキャットはペンとペンダントをつかむ。

「スターカラーペンダント! カラーチャージ!!」

ブルーキャットがスターカラーペンとペンダントを手に取り、ひかるたちと同じように、ペンダントにペンを差し込む。

その瞬間、彼女の姿は、レインボー星人の姿、宇宙アイドルマオ、ブルーキャットの三つの姿へと変わり、最後にはサングラスと帽子を脱ぎ捨てた、彼女の素顔を見せた状態になる。

「煌めく、星の力で! 憧れの"わたし"描くよ!! トウインクル、トウインクル、プリキュア♪ トウインクル、トウインクル、プリキュア♪ トウインクル、トウインクル、トウインクル、トウインクル、トウインクル……スタートウインクル☆プリキュア! Ah

……♪」

なぜか久しぶりに聞いたような気がするプリキュアに変身するための歌声を響かせながら、猫耳と猫のしっぽ、そして七色の配色がされたスカートをまとったコスチュームへと、ブルーキャットが姿を変えていく。

「銀河に光る、虹色のスペクトル！ キュアコスモ!!」

その姿に、ひかるは目を輝かせながら、いつもキラキラの口癖と口にする。  
だが。

「ふんっ!!」

プリキュアになったことでアイワーンがブルーキャット——キュアコスモに対する危険度と認識を改めたのか、コスモに攻撃を集中させる。

ノットレイダーの構成員を含め、コスモに集中攻撃を行うが、そのすべてをコスモはさばいていく。

コスモがノットレイダーに対し、反撃を行っていくと、アイワーンと彼女を素体にしたノットリガーが突如、変化を見せた。



## 乗っ取られたアイワーン?! ダークネスト登場!!

ブルーキャットの心に反応するかのようには、フワが突如光だし、スターカラーペンダントとペンが出現し、彼女をキュアコスモへと変身させた。

コスモの戦闘力は高く、ノットレイダーの構成員たちだけでは太刀打ちすることもできなかつたのだが、突如、アイワーンと彼女を素体にしたノットリガーが異変を見せる。深緑、というよりも黒に近い陽炎を立ち上らせながら、ノットリガーが立ち上がると、その背後に紫色に輝く目を向ける存在があった。

その存在を、コスモは知っていたようで。

「ダークネスト……」

と、その名を口にしていた。

当然、ひかるたちは何者なのか疑問をぶつけてくる。

その疑問に、コスモはノットレイダーを統べるもの、とだけ返す。

それ以上のことは話さなかつたが、アイワーンからあふれ出てくるその威圧感だけで、かなりの力を持った存在であることをうかがい知ることができた。

だが、同時に。

「うつ……ぐうううう……」

「あ、アイワーン?!」

「なんだか、くるしそうルン……」

ダークネストがアイワーンの背後に出現した瞬間、彼女の表情が苦し気に歪む。

そのことに気づいたひかるたちは、その様子がノットリガーにされた人々が見せた様子と同じであることに気づく。

アイワーンは苦しみながらもスターたちに視線をむけ。

「プリキュア……っ!」

憎悪と怒りのこもった声を向けた。

が、その声はアイワーンのものではない。もっと禍々しく、重い声をしている。

「え……」

「これは、アイワーンの声じゃない」

「ダークネストの声?!」

その声を聞いた瞬間、コスモの脳裏にバケニヤーンとして潜入していた頃の記憶が蘇った。

それは、アイワーンがプリンセススターカラーペンを使い、ダークペンを完成させた時のこと。

想像力を塗りつぶし、強力なノットリガーを生み出すことができるという。

当然、バケニヤーンは本来の人格を失うことになるのでは、と懸念を口にする。

が、アイワーンはそのことを肯定したうえで、想像力が塗りつぶされても人格は残ることを話し、笑みを浮かべていた。

「想像力を、塗りつぶす……」

「否っ! ダークネスト様のお力は、想像力を塗りつぶす次元のものではない!!」

カッパードが語る、想像力を塗りつぶす以上の力。

その行く先は、想像力という存在自体の消滅か、それとも、自分たちが考えている以上のことが起こるのではないか。

「……早く助けないと」

「アイワーンをか?」

「うん」

その様子に、ひかるは助けたいという気持ちが芽生えたらしく、導が確認のために問いかけた。

その問いかけに、ひかるは迷うことなくなずいて返し。

「だって、苦しんで……わたし、助けたい!」

強い意志が込められた目で答えていた。

その答えが返ってくることは導もわかっていたのか、ため息をつきながら。

「言うと思った」

とつぶやきながら、裏12宮ブレイヴを取り出すと同時に、ひかるたちもペンダントに手を伸ばす。

迷いなく、敵であるはずのアイワーンを救おうとするその姿勢に、コスモは困惑したような表情を浮かべたが。

「こうなったら、こいつらは止まらないぞ?」

という導の一言に。

「ああ、もう……ほんと、お節介な子ニヤン」

腹を決めたらしく、アイワーンへと視線を戻す。

「ニスタートウインクル! プリキュア!!」

四人がプリキュアに変身すると、導はかに座の裏12宮ブレイヴ『ブレイヴキャンサー』を身にまとう。

その瞬間、導の姿はブレイヴサジタリアスのような西洋の騎士を思わせる鎧でも、ブレイヴアクエリアスのようなラグビー選手のユニフォームのような特徴的な鎧でもなく、戦国武将の甲冑のような出で立ちへと変化する。

いつもならば、スターやミルキーが反応を見せるところなのだが、そんなことをして

いる余裕がないらしく、すぐにノットレイダーたちとの戦闘が始まった。

向かってくるノットレイダーの構成員たちを退けながら、どうにかアイワーンに憑依したダークネストを引き剥がそうとするが。

「うざいつつのっ!!」

怒りに任せ、ノットリガーの腕を振るい、スターたちに確実にダメージを与えていく。アイワーンにすれば、バケニヤーン——ブルーキャットに裏切られ、自分の立場が亡くなったことに危機感を覚えたがゆえに吹き出た怒りなのだろう。

もつとも、そもそも話ではあるが、惑星レインボーでダークペンの試作品を使用しなければこんな事態にはならなかったのかもしれない。

まさに因果応報というもののだが、そのあたりのことは見た目通りの幼さからか、アイワーンは理解していないようだ。

《アイワーン、無駄な思考は捨て去れ……想像力を捨て去り、我に身をゆだねよ》  
「くうう……」

そんなことは関係なく、ダークネストはアイワーンが今なお自我を持っていることを疎ましく思っているらしく、アイワーンを完全に乗っ取ろうとしていた。

アイワーンもそれに抵抗するが、それにもいざれ限界がくる。

「このままじゃアイワーンが!」

タイムリミットがせまっていることに、スターたちの顔に焦りが浮かぶ。

どうにかしたいところではあるのだが、ダークネストという総大将を前にしてか、構成員たちとカッパードの士気が高く、四人がいか所に集まることが難しい状況になっていた。

「どうするルン?!」

「このままじゃ、サザンクロス・シヨットが使えない!」

「どうにか、この状況を打開しないことには!!」

四人とも、どうにか状況を打開しようとするが、目の前に迫ってくる構成員を相手するだけで手一杯であったため、どうしようもできない。

だが。

「……スター! ミルキー! ソレイユ! セレーネ! コスモ!! うまく避けてくれ!!」

導の声が、その状況を打開するきっかけとなった。

すでに何人かの構成員に囲まれている導だったが、その構成員たちを薙ぎ払い、黄色のカードを掲げ、どこかやけくそな様子でマジックの使用を宣言する。

『跪いて、エヴリワン』!!』

カード名というよりも、誰かのセリフのように思えるが、これも立派な黄色のマジック

ク一枚である。

そのマジックが発動した瞬間、周囲にいたノットレイダーの構成員たちとカッパードが同時に地面に腹ばいになった。

まるで、何か大きな力に押し付けられているかのようだ。

が、ダークネストの力を直接受けているのである。ノットリガーは、いまだ健在だった。

その隙に、スターが地面を蹴り、ノットリガーへ向かっていく。

「愚かな！ 一切の思考を止め、圧倒的な力を得た奴に勝てるはずがない!!」

カッパードが地面に伏せながらそう叫ぶ。

その言葉に、スターはノットリガーの中心でうづくまるアイワーンの姿を見る。

その苦し気な様子に、スターは思いのたけをアイワーンにぶつけた。

「あなたは前、わたしには想像力がないって言った……けど！ いまのあなたがどんなに苦しんでいるかはわかる!!」

思いの丈を拳にこめ、ノットリガーにぶつけようとするが、その拳が当たる前に、スターはノットリガーの右腕に叩きつけられ、地面に落下する。

追撃とばかりに、ノットリガーは両手を組み、スターに振り下ろそうとするが。

「マジック『サイレント・ロック』!!」

導がマジックを使用し、ノットリガーの腕の動きを止めるが、ノットリガーの力は想像以上に強く、あまり長い間止めることができなかった。

今にも鎖を破壊し、スターに拳を振り下ろそうとするノットリガーに、コスモが向かっていく。

「アイワーン、あなたのことには許せない！ でも!! アイワーンを乗っ取って、想像力を、自由を奪うダークネストは、もつと許せない!!」

そう叫んだ瞬間、コスモの胸元から光が放たれる。

ノットリガーがその光にひるんでいると、光はコスモが愛用しているパフュームへと吸い込まれていき、パフュームの形が変化した。

同時に、スターが取り戻していた牡羊座のプリンセススターカラーペンが呼応するように光を放つ。

その光を見たスターは。

「コスモ!!」

コスモに向かってプリンセススターカラーペンを投げる。

プリンセススターカラーペンを受け取ると。

「レインボーパフューム！ 行くニャン!! プリンセススターカラーペン、牡羊座!! くるくるカラーチャージ!!」



踊るようにしてコスモはレインボーパフュームを構え、プリンセススターカラーペン  
をパフュームの上部に装着し、くるくるとハンドルを回す。

すると、パフュームの中にプリンセススターカラーペンの持つ、イマジネーションの  
光が蓄積していく。

「プリキュア! レインボー・スプラッシュユ!!」

光が十分に溜まると、コスモはノットリガーに噴霧口を向け、トリガーを引く。  
すると、パフュームの中にたまっていた光がノットリガーを包み込み、ノットリガー  
を浄化していった。

だが、アイワーンに憑依していたダークネストは、完全に浄化される前に脱出したよ  
うで。

「プリキュア……カードバトラー……愚かなイマジネーションを持つものたちよ!!」  
そう吐き捨て、その場から消えていった。

スターパレスへ！ プリンセスの復活と……どちらさま

？

ノットリガーを浄化し、ダークネストを退散させたコスモは地面に倒れているアイワーンの傍らにいた。

少しすると、アイワーンの意識が戻ったらしく、呻きながらアイワーンが目を開け。

「バケ、ニヤーン……」

そばにいたコスモをバケニヤーンと錯覚し、その名を呟く。

「ほんと、世話が焼けるニヤーン」

だが、コスモのその言葉に、アイワーンは我に返り、コスモがバケニヤーン——ブルーキャットであることに気づき、怒りをぶちまけ、文句を口にします。

その文句も、カッパードが撤退を促したことで止まりはしたが。

「あんなのせいで、アタイの立場がないっつーの!! 覚えてろっつーの!!」

「つて、それわたしの宇宙船!!」

腹いせか、それとも近くにあつたからか。

アイワーンはブルーキャットの宇宙船を奪い、カッパードたちとともにワープホール

に突入していく。

宇宙船を奪われたことでコスモは、返せ、と叫ぶが、すでにワープホールが閉じた後であり、その叫びはレインボー星の空にむなしく響くだけだった。

がつくりと肩を落とすコスモを横目に。

「しかし、まさかブルーキャットがプリキユアになるとは……」

「キラヤバーっ、だよね！」

プルンスが複雑そうな表情を浮かべ、ひかるが笑みを浮かべていた。

その瞬間、牡羊座のプリンセススターカラーペンが光を放つ。

「呼んでる」

「えっ？」

その光を始めてみたブルーキャットが首をかしげていると、ひかるはブルーキャットの手をつかむ。

「行こう、スターパレスに!!」

「スタープリンセスたちの所へ?!」

「うんっ！」

ひかるがうなずくと、トウインクルブックを取り出し、牡羊座のプリンセススターカラーペンを装着し、イマジネーションを注ぎこむ。

すると、フワの姿が牡羊座を模したものと変わり、その場にいた全員をスターパレスへと送り出した。

スターパレスに到着すると、フワの胸元に光がまとまり、星の形へと変化する。

「星の輝き！ 戻るふーわーっ!!」

フワがぐるりと回転し、星を上空へと放つと、色とりどりの花火がスターパレス上空を彩り、牡羊座のステンドグラスに光がともる。

その瞬間、空席となっていた牡羊座の玉座に羊の角を模した髪型の女性が姿を現す。

「どうやら、彼女が牡羊座のプリンセスらしい。」

「皆さん、ありがとう」

「スター、プリンセス……」

牡羊座のプリンセスはお礼を言うと、ブルーキャットへ視線を向け、優し気な笑みを浮かべる。

「新たなプリキュアが誕生するとは……」

「スタープリンセス！ 教えてください、惑星レインボーは……わたしの故郷は、プリンセススターカラーペンを集めれば元に戻るの?!」

ブルーキャットとしては、一番知りたい、知らなければならぬことをスタープリンセスにぶつける。

が、スタープリンセスが返した答えは。

「星座の力。そしてフワの力があれば、宇宙に平穏が訪れます」

元に戻るのか戻らないのか、どこかはぐらかされているようなものだった。

その答えを口にする、ひかるたちの背後に二つの光が出現し、牡牛座のスタープリンセスと、三角帽子をかぶった桃色の髪の女性が姿を現す。

「牡牛座のプリンセス……と、ええと」

「あなたは、誰ルン？」

三角帽子をかぶった、魔女のような姿をした女性とは初対面であるひかるたちは首をかしげる。

唯一、その女性を知っていた導だけは。

「マジサ。スターパレスに来ることができたのか？」

と問いかけていた。

その問いかけに、マジサと呼ばれた女性はいたずら小僧のような笑みを浮かべ。

「あら。たまには様子を見に来るわよ？ それに、お仲間も増えたみたいだし、そろそろ

お披露目してもいいかなあって」

「いやお披露目って……」

まるで自分が登場を先延ばしにさせ、物語終盤になって姿を見せる重要キャラクター

であるかのように振る舞うマジサに、導は呆れたような表情を浮かべる。  
だが、その会話も。

「あ、あのお……」

置いてけぼりにされていたひかるたちが、手をあげながら二人に呼びかけてきたことで、ストップした。

「あなたは一体??」

「あなたは何者ルン?」

「なんで、馬神くんのこと知ってるの?」

「ていうか、どこから出てきたニヤン?」

「あら……そういうえば、あなたたちとは初めましてだったかしら?」

ひかるたちに名乗っていないかったことを思い出したマジサは、うっかりしてた、とでも言いたそうに笑みを浮かべながらちよつとだけ舌を出し、自身の頭を小突く。

その様子に導が。

「……いい歳して、何を可愛い子ぶってんだよ……」

ぼそりとつぶやいたことで、マジサに杖で小突かれたことは言うまでもない。

「わたしはマジサ。異界グラン・ロ口を守護するマザーコアの光主よ。よろしくね、プリキュアさん」

グラン・ロロについては、ひかるたちも導から聞いていたため、存在は知っていた。だが、マジサのことも聞いてはいたが、導が最初にスターパレスを訪れた時には姿を見せなかったため、これが初対面となる。

「で、どうしたんだよ？ こつちよりグラン・ロロの方があんたにとつちや重要だろうに」

「まあ、そうなんだけどね」

困ったように笑みを浮かべながら、マジサはバトルスピリッツのカードを取り出した。